越中史論賛

十四

井上忠雄著

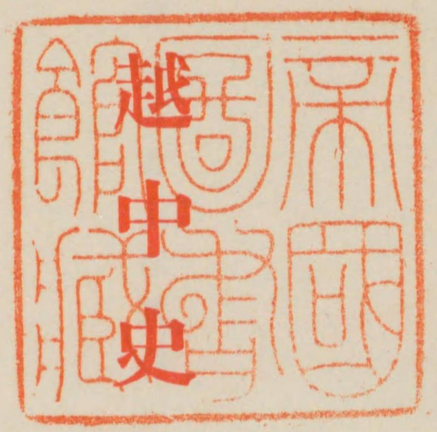
548
55

548-55
1200501506699

越中史論

高岡

548
55

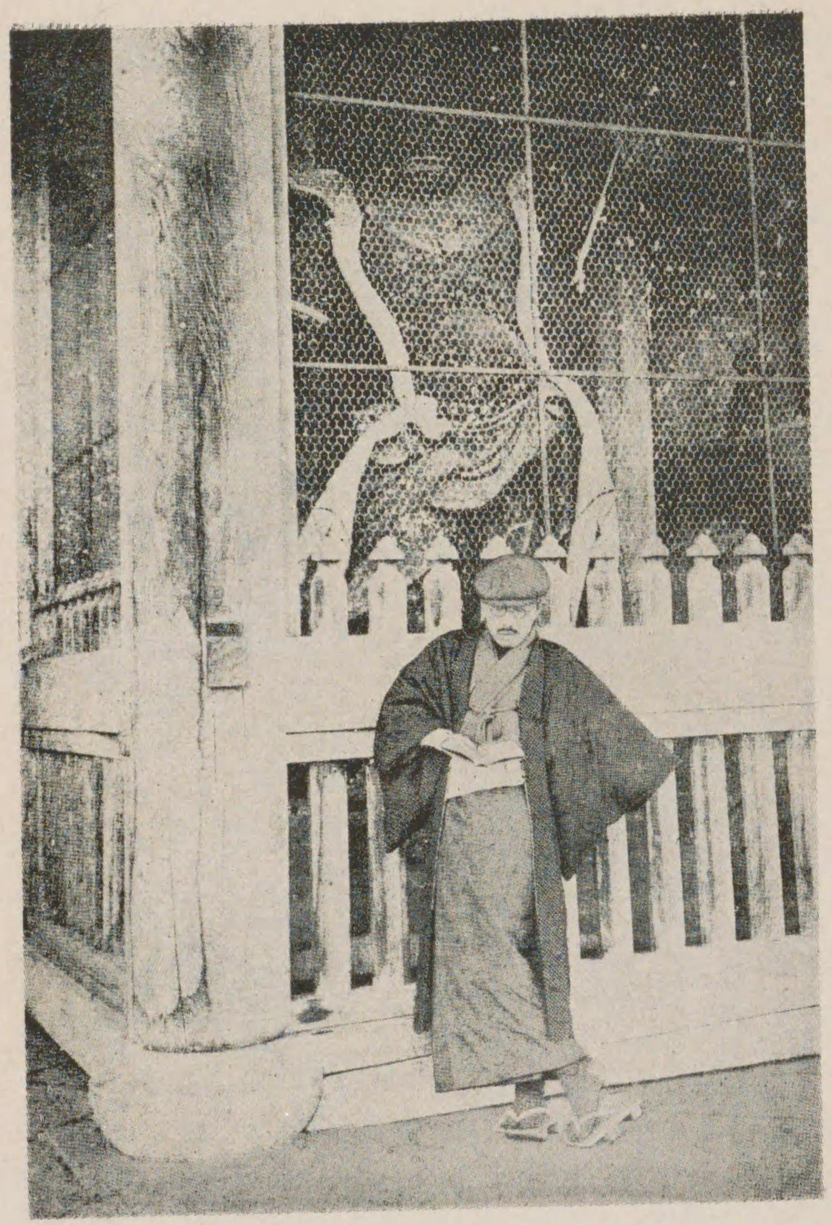


論贊

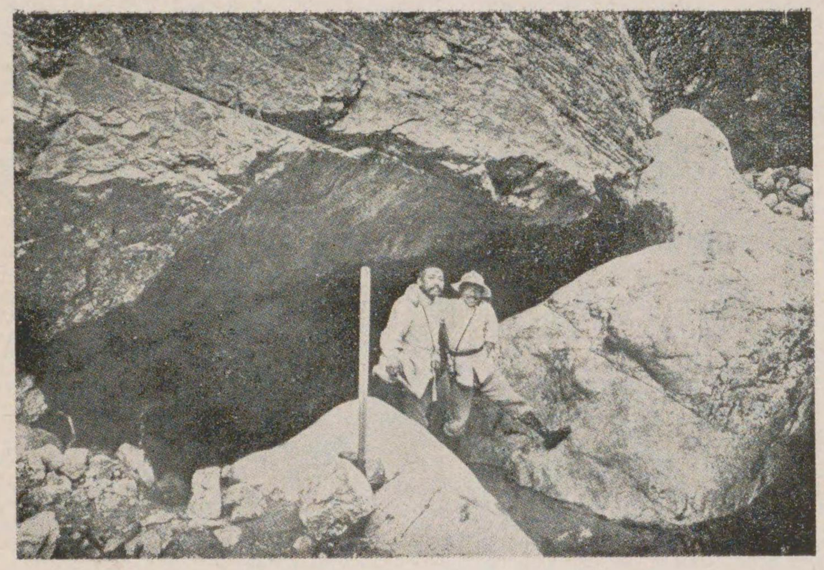
謹みて井上江花翁の靈前に捧ぐ

昭和十一年三月十一日十周忌之日

江花會同人



瑞龍寺山門前に於けるありし日の翁（大正二年）



黑部採掘當時の翁（明治四十二年）

548-55

目次

越中人の智惠……一
牛的越中人……三六
雪の越中……四四
黑部讃美錄……五三
城端及井波……六三
戰國時代の越中……八二
越中の治水と山林……一二六
高岡銅像論……一三七

越中人の智惠

井上江花著

「人國記」の著者は、北陸諸國の氣風を觀察して、加賀は「賢人風の形儀」ありて「自然と怠りの氣に慣れたり」と做し、能登は「人の心別して狹く」且つ「偏固にして道理に闇し」と稱するに拘はらず、西の方越前に至りては「日本に双びなき智惠國」と評し、東の方越後に至りては「勝つことを好み假初にも勇を嗜む」と說けり。而して越中に對しては東越後の勇氣と、西越前の智惠とを配合し、智勇兼備と見做せるものゝ如く「越中風俗、陰氣の中に智勇あり、邪佞なる處多し。人と事を約するに親子の間にて、言質を取る風儀あり、臨事不厭死の風もあり、勇氣ケハシキ故なり」と言ふ。越中人の勇氣は吾輩之を認む、邪佞も亦之れあらむ。是等は姑らく後章に讓りて、只だ智

の一字のみは不幸にして直ちに首肯すること能はざるなり。近時人國記的觀察を下すものは、專ら自然物の交渉に留意して、山川の形態にあらざれば、則ち氣候の狀象を以てするに過ぎずと雖も、畢竟之れ一部の說明にして、吾輩は少なくとも其原因を內外二種に分ち、內は則ち血統上より來る人種的關係に歸し、外は則ち（一）地方に發生したる人事上の現象より來る所謂歷史的關係と、（二）業務若くは生活の關係と、（三）山川風土の自然物によりて淘汰せらるゝ、地理的關係とに歸せんと欲するものなり。思ふに原因複雜、其他猶ほ幾多の觀察点あるべく、敎育の如きも亦或は逸すべかざる一要項に屬せんか。乃ち如上の關係より先づ越中人の智に就て、所見を陳述せんと欲す。血統上より見たる越中人は如何、越中は往古の古志の一部にして、曾て蝦夷種族の旺盛を極めし時代に於ては、越蝦夷勢力の中心地なりしと想像せらるべき理由を有す。神代出雲朝廷の主權者が、帷幕の智囊少彥名の補佐を得て國土を經營するに際し、越中は出雲と同じく裏日本に位置し、併も無類の良灣を控ゑたるに依りて、夙に高等種族に接觸し、其干涉を甘受せると共に、蝦夷少女の卵巢は優等なる雄精によりて混血を開始したること言ふ迄もなく、對岸大陸より漂着したる異種族にして、永住蕃殖せしも亦珍らしからざるに似たれば、素より單純の人種に由つて今日の越中人を成せりと、

斷定するの早計なるを知ると雖も、基礎を置けるものは則ち蝦夷にして、蝦夷種族が我々の祖先なることは掩ふべからざる一大事實なり。然らば蝦夷種族の特質は如何、高等種族即ち所謂大和民族の膨脹史が、殆ど此の勇敢にして頑强なる勁敵の征討史ともいふべきものにして、彼等の勇氣は餘りありと雖も、智力に於ては到底西來の東進軍に抗するに足らざりき。故に兩種族抗爭の歷史は或意味に於ては文明と蠻力、智略と勇氣との抗爭史と稱し得ざるに非ず。隨つて最も多く蝦夷の細胞を繼承したる我々越中人に、智惠の分量少なきは、遠因する所莫しとせんや。斯く看じ來りて更に太古に於ける人種勢力の進向したる順路と、後世の地方民質とを照合するときは、洵に新なる興味を覺ゆ。即ち蝦夷種の勢力は東より西に進み、大和族の銳鋒は西より東に伸びたる如く、蠻勇の氣は同じく東より西に進み、智略の氣は西より東に伸びたるの狀なきにあらず。請ふ人國記の記載を顧みよ。北陸の中に於て西の方越前は「日本に双びなき智慧國と覺ゑたり」と評せられ、東の方越後は「勝ことを好み、假初にも勇を嗜みて痛きといふことを齒痒きといふ。餓鬼目などと幼き者の育にも、荒らかに强みを敎ふる風俗」と稱し、其兩越の中間なる越中は、兩人種の交叉点として「智勇あり」との加減按排振りは復た面白からずや。然れども不幸にして越中の基礎人種が、勇の人な

りしが爲に一滴の單砂利別は、未だ辛辣の苦味劑を調和するの分量たらざることを遺憾とす。

○

氣質に及ぼす歴史的原因は、其範圍頗る複雜にして廣汎なり。例せば三國志の豪傑が革命黨の小豪傑を產み、奈破侖一世が奈破侖三世を產み、一個の桃中軒雲右衞門が幾多の小雲右衞門を產み出せる如きは其一なり。百万石の治下となりて百萬石氣質を生じ、十万石の藩領となりて十万石氣質を生じ、天領には自ら天領氣質を生ぜしが如きも其一なり。謠曲の流行が悠長の風を養ひ、淨瑠璃の流行が粹俗の氣を成し、武術の勃興文藝の隆盛が亦各々民心に淘汰するが如きも其一なり。然れども之れを概括するに歴史的原因なるものは、偶然の事象より來れると、故意に之れを敎化したるとの兩者に分類することを得べく、敎育の如きは即ち後者に屬するものなり。此の意味に於て試みに我鄕土史を回顧すれば、其偶然たると故意たるとを問はず、殆んど人心を刺戟して機智敏才を發達せしめたる顯著の事實に接すること能はず。越中史の一篇を通じて戰亂の續發にあらずや、佛敎の弘布にあらずや、水田の開墾にあらずや、夫れ戰ひには智略莫るべからず。吾輩越中の戰記を讀むに、倶利加羅に於ける源軍火牛の奇計以下二三の數ふべきものを有すと雖も、开は只だ參謀者の

與り知れるに過ぎずして、苅菰と亂れたる元龜、天正時代を中心として、溯りては建武、元弘、建久、壽永の昔まで打續く戰爭に依りて、一般の住民が受けたる所のものは、殺伐の氣に非ずんば恐怖の念のみ。若し夫れ佛敎の弘布と水田の開墾に至りては、其化を被り其惠に浴せし我々の祖先に向つて、徒らに苟安の因を與へ、潑溂たる進取的の氣象を抑壓すると共に、智才の發達を障碍せしこと洵に鮮からざるを信ず。職業が氣質を淘汰するの如何に顯著なるかは、眼前の實例歴々徵すべく、政治家には政治家氣質あり、學者には學者氣質あり、官吏には官吏氣質あり、其他職人肌と云ひ、藝人風と云ひ、或は盜賊根性と稱するものあり、社會万別の職業を見來れば、一として心理的作用なきものあらんや。其殘忍の業務は殘忍の心を養ひ、猥褻の業務は猥褻の心を養ひ、慈仁の業務は慈仁の心を養ふと共に、才智の必要なる業務と、然らざる者とに依りて、人をして或は魯鈍ならしめ、或は慧敏ならしむるは素より當然となす。猶又富豪と貧民とは其性質を異にし、更に窮困して乞食の境遇に陷れば自ら乞食の心を成すの類は、生活狀態より來る氣質の淘汰にして、是等の境遇が人智に及ぼす所亦決して少なしとせざるべし。然らば此方面より看たる縣人の智鈍果して如何。

○

越中は農業國なり。其農耕の歴史は極めて太古に始り、茫邈として事情を審かにせずと雖も、崇神天皇の御代に於て四道將軍の一人たる偉傑、大彦命來つて稼穡を奬勵し各郷多く此時より起れりと傳稱するに徴せば、因由の遠き思ひ半ばに過ぎんとす。今日に於ては現住人口職業別統計上、商工漸增して農者減少の傾向を認むるに拘らず、猶ほ依然として我國有數の農業縣たるを失はず。經濟の消長死活一に米の生産に據るは、吾輩の新に說くを須ゐざるなり。農業者と商業者とは、其氣質に於て常に著大の相違点を有し、彼れの長は之れの短、彼れの短は之れの長、得失未だ遽に定め難く、近時歐米の學者等が、職業より見たる農業者の氣質を謳歌して已まざる如く、剛健質撲は慥に其尊重すべき長所にして、商業者の多くは之れを欠如すと雖も、商の特質たる敏才機智に至りては、蓋し農の一大欠点に屬し、佐藤信淵翁の所謂「下民は其性至つて愚蒙なるものなり」との痛罵は、道ひ得て肯綮に中れりとなす。縣人の智才に乏しきは、人種の關係、歴史の關係、及び後章に叙述せんとする地理の關係等に基くと共に、越中の古來農業國にして職業上智才を要すること尠かりしは、亦重大の一原因に數ふべきもの也。然れども本縣の面積三百一方里東西二十三里三十餘町に延

び、藩政時代は前田氏本支兩藩の治下に分れたる而已ならず、交通の便不便に依りて、人事交渉の狀態を異にせし結果、今の二市八郡、即ち往時の東西各二郡が自ら人情風俗に若干の變化を來せるは怪むに足らず。隨つて農業國の故を以て、直ちに同一色の刷毛を揮ひ其氣質圖を塗了し去るは、稍妥當を欠くものにして濃淡深淺は數の免れざる所なり。就て想ふ、曾て新川縣時代に成川尚義なる人あり、官に權令として越中に來り、四郡を巡歴して具さに民情を察し、産業を奬勵す。人と爲り慧敏達識、當時の牧民官中に在りては頗る錚々の名ありしと云ふ。成川權令乃ち縣人氣質を評して曰く、(一)新川郡は卒直にして輕浮の嫌あり、(二)婦負郡は質撲にして蒙昧の弊あり。(三)射水郡は敏捷にして猾智の虞あり、(四)礪波郡は自重にして固陋の謗あり。吾輩之れを當時の下僚たりし一老吏より傳聞せしものなるが故に、語句に於ては或は多少の誤謬を保し難し。併も新川縣時代にありては牧民官として人國記的觀察を爲せるもの、洵に珍重の材料と做すべきなり。

○

成川權令の所謂新川郡は、今日上、中、下の三郡に分れ、嚴密に批評せんとせば、東西の差違同日に談ずべからざるもの有るべしと雖も、民情輕浮の嫌は富山市を含める上新川郡に該當し、其言

必ずしも不倫となさず。所謂射水郡は氷見射水の總稱にして、民心敏捷にして猾智の恐れありと爲せるは、特に高岡市を含める今日の射水郡を指すものとせば、之れまた首肯するに足る。其他婦負と云ひ、礪波と云ひ、其觀察克く正鵠を射て過らざるは、權令の器凡庸ならざりしを思はしむ。洵に彼れの言へるが如く、卒直、質撲、及び自重は、農業國民の特長として誇るべき良氣質にして、近世歐米學者の農業を讃美する要点と一致し、將來愈々這の美質を保存し助長せしむるの必要あるに反し、蒙昧固陋は則ち智才の缺如を意味せるものにして、佐藤信淵翁の所謂「愚蒙なるものなり」との痛罵と戻らず、農業國民の短所にあらずや。

只夫れ射水の一郡に對して、評者たる權令は敏捷猾智の稱を與へたるもの、高岡の商工業地たる所以にして、農の越中に在りて單り同方面而已、住民氣質の狀態を異にせるは、職業關係の然らしむる所也。聞く高岡創建の當時は千保川の水勢頗る激烈なりしも、大船の交通自由にして水運の利便今日の比にあらず。而して其千保川と小矢部川との合流地点を撰擇し、藩主の特別保護の下に建設せられしものは則ち高岡木町にして、木町の住民は河海の航通と或商權を特許せられ、礪波射水の平野を控制し、伏木六渡寺の港灣に出入して殆ど、全越中の通商航海の中心地となれりとは高岡

史料の載する所、隨つて渡海船の勃興あり、萬里の波濤を蹴つて高岡商人の氣を吐きたる鳥山善五郎等の輩出あり、米場起りて仲買人を生じ、鹽藏成り、煙草座建ち、魚問屋綿問屋起り、東西の商賣此に蝟集し蜂屯し、北陸中央の大市場として闔國の供給、一に高岡に仰ぐの盛況を呈し、川には舶船舳艫相接し、町には往來絡繹織るが如く、夙に瞥女町の銷金窩あり、其狀或は大阪に比すべきものありたりと云へば、住民に商業的氣質を生じ、蒙昧固陋鈍智劣才の間に立ち、獨り敏捷にして猾智の異風を見るに至れるならむ。德富猪一郎氏先年北陸を巡遊して高岡に來るや「高岡市は商機敏活頗る進取の風あり」と做せる亦故なしとせんや。然れども今日の高岡は果して本縣の智囊と稱せらるゝ價値ありや否やは大なる疑問にして、記錄の上に見る往年の活才活氣に比せば、寧ろ退歩纔に遺風を留むるかの觀なくんばあらず。

○

農の越中は亦自ら富の越中なり。其地形東南西の三方環らすに山嶽を以てし、北方は則ち煙波縹渺たる日本海を控ゑ、中部及び北部の大半は所謂中越の沃野にして、十万町歩の曠漠たる耕地此間に拓け、飛驒より來れる庄、神通の二川、立山々彙及び其附近より發源せる常願寺、黑部の諸川は

常に是等の冲積層を滋潤して其地味を肥育し、穰々たる米穀の產は縣人の食糧に充てゝ猶ほ巨額の餘剩あり。加るに海產物の豊富なる、漁獵の減少せし今日と雖も、猶且二百万圓を算せらる。隨つて古來豪族富家の各鄕に其勢力を競ふもの多く、一朝凶作に際せば藩に救血の慣例存して百姓憑賴する所あり。環嶽眼界の別乾坤、給養裕にして人の衣食の困苦少なく、悠々乎として自ら武陵桃源の趣をなせり。此生活狀態の平穩は職業の關係と共に、亦豈に人心に作用する所莫らんや。艱難汝を玉にす、生活の壓迫、境遇の刺戟は、人生に於ける一個の試練にして、勇氣と智惠とは、此試練に逢ふこと愈々多くして愈々增進するを常とす。縣人の質撲、率直、自重は生活の壓迫と境遇の刺戟とを受けざるに依りて、養成せられたる美質となすも、蒙昧固陋の弊風は亦慥に平穩なる空氣の裡に發生したる產物ならずんばあらず。故に等しく越中にありては、天產遍からずして、生活窮乏を感ずる地方の住民は、其必要よりして奮發一番、或は智囊を絞り或は勇氣を皷して他の保守的なるに似ず、進取の氣象甚だ見るべきもの莫きにしもあらず。氷見郡の地、縣の西北隅に位して、平原少なく米產之れに伴ふが爲め、山間僻村の住民は冬期全國を巡歷して鏡研を業とし、名聲到る處に高く胡桃原多胡家の如きは、歷代伊勢大廟の神鏡を研ぎたりと云ひ、宇波村大宇大窪は古來大工

職を業とするもの多く、技工の巧妙を以て知られ、藩の作事大工として諸種の特典を受けたりと云ひ、又縫針、鏡、小間物等の行商を試み、關東方面に向つて年々四千餘人の遠征者を出したりと云ひ、高岡產の佛具賣となりて高岡銅器の名聲を全國に紹介するの基因をなせるは、亦十三谷地方の住民なりしと云ひ、何れも生活安穩なる他郡に於て其例を見ざる所なり。又下新川郡生地々方は由來生活狀態良好ならず、漁民等冬期北海の怒濤狂瀾を冒して鰤を氷見に購ひ、轉じて之れを松前に鬻ぐを以て生地の一貫命の稱あり、米屋長左衞門の如き才物出でて民利を興し、田村前名の如き好漢現はれて單身蝦夷地を探撿し、各地漁撈の方法及び漁具の構造を研究視察せし結果、漁業の一新紀元を開くに至れるは偶然にあらざるなり。併も是等は一小局部の事にして、平穩鄕裡の越中人は概して其智囊の口を開くべき生活の壓迫を被ること少かりき。

○

旅客の初めて越中に入るもの皆必ず以爲らく、富山縣の名稱は定めて山嶽の多きに由れるものならむと、乃ち携ふる所の地圖を展し之れを見る。果然山嶽重疊殆ど其大部分を領し、大蓮華山、眞砂岳の如き標高一万尺内外の諸山は、東方に屹立して飛驒山脈の一部を爲し、北走して日本海に入

る。其西方にありて立山・劔岳・淨土山・藥師岳等の山彙連亘して標高八千尺に及び、南境には飛驒山脈の一部伸びて婦負、礪波兩郡の間に北走し、西境には加賀白山の系脈笈岳、醫王山等を群起して能登の石動山、寶達山脈に連る。之れある哉富山縣、旅中の困苦甚だ憂ふべしと。汽車金澤驛を發し津幡驛を過ぎて、徐ろに倶利加羅の傾斜を攀づるに及び、愈々寂寞の念を强ふするものあり。何ぞ圖らむ、眼界忽ち展けて曠漠たる礪波平原を現出し、更に高岡市の商工地を目擊せむとは。此反動は軈て意外に開發せる越中の賞讃となるは、吾輩從來幾多の旅客に就て聽取せる紋切型の所感にして、朝野知名の人物と雖も、尙且其迂濶を免れざる所なり。越中の眞狀が世人に解せられざる、何ぞ夫れ甚しきや。之れ實に上記の如く山嶽國境を包圍して地形自ら外界と隔絶し、世人をして壺人の秘境を窺知することを許さゞりしに基かずんばあらず。而して縣民も亦賣藥行商の如き一部の人士を除きては、國外を巡遊するもの乏しく、隨つて越中の事情を他に紹介するに、由莫りしものなり。夫れ旅客の入來は智識を輸入する所以にして、縣人の外出は智識を涉獵する所以也。然るに地形の爲に妨害せられたる人事交涉の疎隔は、縣人をして外來旅客の越中に對する迂濶を、嗤ふこと能はざる迂濶者たらしめたり。吾輩往年、社用を以て三府八縣を歷遊するや、到る處に於て必ず先

づ、高岡新報記者の職名ある名刺を致すを例とす。然るに吾輩の名刺を受けたる大部分の人々は、未だ高岡市が我國の何れの方面に在るやを知らず、偶ま之れを知るも銅漆器の產物は勿論、甚しきは市制を布かれたる大市邑なるを知らざる者多かりき。縣商工業の中心地たる高岡にして此の如し、吾輩悵然たらざるを得んや。准南子曰く、井魚共に大を語る可らず、隘に拘すればなり。越の路の中國は地形に就て宛然井底の觀あり、外界に於て其消息に通ぜざるは、畢竟縣人の思想所謂隘に拘して、未だ克く高岡をして天下に有名ならしむるに至らざればなり。機智敏才の發達せざる素より異むに足らず。

○

誤つて塵煙の中に落つ、一去三十年、羈鳥は舊林を戀ひ、池魚は故淵を思ふ。鄉土の山と水と樹と石と空の色とは、其住民に向つて大なる感化を與へ、强き印象を貽さしむ。人生一種不可思議の勢力を有するものは則ち鄉土なり。富山縣の地形が三面皆、山嶽重疊して交通を阻碍し、爲に智識の進步を遲鈍ならしめたるは、地理の氣質に作用したる重大の原因たるを失はずと雖も、彼の山容と謂ひ將た此水態と謂ひ、越中に於ける自然界一般の現象も亦豈に人心を支配すると鮮なしとせん

や。蒲團着て寢たる姿の東山、京都の長閑なる山水は京都人の優長なる氣質を養ひ、尾張の雄大なる地勢は日吉丸の如き偉大の產物を生じ、繪卷物の如く夢の如き大和の風景は、到る所に小說的夢幻的の事實を作るとは、近時の人國記的看察者によりて唱へらるゝ所なり。富山縣各郡の自然物は、素より其狀態を等しふせざるが故に、鄉土の山水に感化せらるゝ所の氣質に至りても、自ら亦一律ならざるべしと雖も、其代表物は立山の嶮峻、庄、神通、黑部等の激流、及び是等の河川によりて沖積せられたる越中平原ならずんばあらず。

越中は古來の一揆國なり。北陸の土寇は史上有名の出來事にして、領主爲に其制馭に惱み、將軍も時に鎭定に苦む。前田氏の治下に屬して、後一面非常の高壓手段を取ると共に、一面恩惠を售りて巧みに其氣質を寬和する所ありしに拘らず、猶ほ機に觸れ事に激して數次爆發を止むること能はざりし所以のものは、人種的の天性に由ると雖も、抑も亦峻嶮の山嶽急激の河川が其天性を保護し、却つて愈々之れを感化したるものにあらざる乎。要するに越中の自然は機智敏才の士を產出するには、餘りに峻嶮にして又餘りに急激なるに似たり。吾輩本論の前章に於て北陸巡遊者の批評として德富猪一郎氏の言を引きたるに因み、玆に又同氏の語を語らむ。曰く「立山の嶮峻、神通川、庄川

等の激流、聊か富山縣の人氣に反影するもの莫しとせず、人地相關の緣決して淺からざるなり。」と然れども人地相關の緣淺からず、立山を父とし、神通、庄の激流を母として產出せる自然兒には、抑も何等の人物をか擧示せられたるぞ。氏又曰く「富山縣の名物は山には立山あり、人には安田、淺野の徒あり。」と、安田善次郎、淺野總一郎の兩金傑は中央實業界の巨頭にして、又正に越中の名物たるを否むべからず。併も若し之れを以て嶮山激流の產出せし自然兒と見做さんには、恐らく妥當を欠かむなり。

○

越中の代表的自然物として、吾輩前に山と川と平原とを擧げたり。平原の風物は住民の氣宇をして宏博ならしめ、往々雄大の人物を崛起することあり。三河、尾張、美濃の大平原が織田信長の如き豊臣秀吉の如き、德川家康の如き我國第一流の英雄を產出したるは則ち其實例也。地理學者は曰く、平原地方人民の長所短所は、山嶽地方人民の長所短所と正反對にして、平原の人物は地勢の平坦博大に伴れ、自ら統一を助け混融を促すものあり。山嶽國若くは溪谷の間に興りたる英雄が、其覇業を開展する能はざるに引き換へ、信長、秀吉、家康の三雄が、揃ひも揃ひて平原を統一したるこ

と故なきにあらずと。然れども未だ曾て越中の平原より出でて、此種の覇業を成功したるもの無く、小雄各郡に割據して向背常なく、一度び上杉謙信の如き勁敵の來攻するに遇ふて、聯合軍を組織し之れに當れることあるも、又忽ちにして結合を破り、遂に統一融合の大器を欠けるため、佐々成政來つて先づ庄川平を威服し、更に居を神通平に占むるに及んで全然越中の守護たり。成政は則ち尾州春日井郡の出生にして所謂大平原人士なり。成政の秀吉に抗する、之れ平原の雄と平原の傑と相爭ふものにして、彼れの敵手は不幸にも山嶽徒或は溪間徒たらざりしがために一敗地に塗れ、前田氏に及んで初めて加越能三國の統一融合を完えするに至れり。而して前田利家は同じく尾州荒子産、大平原の氣風を最も善く代表せる所の偉人物なりき。扨て然らば越中の平原は何故に雄大の精靈を有せざるか。思ふに山脈の伸ぶるところ急流の駛するところ、境界徒らに多くして、平原の狀態は自ら八郡の區劃を爲し、八郡各々特種の氣風を發生せること前章論述せる如く、其面積に於ては三万町歩を算すと雖も、畢竟大平原にあらずして小平原の接續に過ぎざればなり。此區劃多き越中平原の地勢は、人種の勇猛なる本質あるに似ず、將た山川の峻烈なるに拘はらず、個人的にして且つ蓄積主義の氣風を馴致したり。人或は安田、淺野等越中出身の金傑を目して、嶮峻の山嶽と激烈の

河川とに貪縁せしめんと欲する者あれども、开は聊か吾輩と所見を異にせり。又大平原の人物は氣宇の博大と共に、敏才慧智の見るべきものなきにあらず。之れ人類の集注に依りて、起る所の生存競爭の結果にして、檻房的平原とも稱すべき本縣の地勢は、大なる人物と共に又智の人物をも欠けるは、是非もなき次第と云ふべし。

○

人種に歴史に職業に地理に、吾輩諸多の原因に歸納して、縣人の氣質に智の發達遲鈍なりし所以を叙述したり。然れども飜つて思ふに、原因を歸納するの困難なるは、結果を演繹するの容易なるに如かず。最も有力なる證明は、眼前の事實なればなり。今試みに富山縣民の上に横に一線を劃し、先づ其水平線上に擡頭せる少數著名人物を一瞥し、然る後水平線下に沒在せる一般の民庶を概觀するときは如何。本縣出身の著名人物とし謂はゞ、之れを前にしては高僧及び力士にあらずや。篠島久太郎君曩に「越中史略」を著し、越中偉人小傳を列記せるものゝ内、高僧には日隆、宜明、性海、閑雲、義教、善意、義諦、靈潭、洞水等ありて、偉人物の大部分を占めたり。則ち地方に於ける佛教旺盛の致す所にして、素より異むを要せず。而して力士に至りては僧侶の如く文籍の徵すべきも

の乏しき以て、纔かに口碑傳説に據るの外なしと雖も、九紋龍清吉・階ケ嶽龍右衞門・劍山文藏・荒戸岩幸次郎等は、驍名後世に嘖々たり。九紋龍は礪波郡の出にして、壯年江戸に之き天明年間大關に上り、小野川才助、谷風梶之助等と並び稱せらる。階ケ嶽は同じく礪波郡の產、雷權太夫の門より起りて大關に昇れるもの。劍山は新川郡上掛尾の農、天保年間大關に進み横綱を許され、仙台候より七ツ組の大盃を贈られしもの。荒戸岩は中央に出でざりしを以て名聲を博せざりしも、無双の力量近代に於て著しきものとなす。梅ケ谷、太刀山以下現時の偉物に至りては、復た吾輩の謂ふを要せざるなり。斯く力士の輩出せし所以は、往古より斯道の旺盛なりしためにして、婦負郡牛ケ首角力の由來に考ふると思ひ半に過ぎんとす。牛ケ首角力の起因、年月審かならず、茫々漠々追及するに由なし。口碑に曰ふ、龍女を娶れる孝子六治古の弟村治古の子孫、瑠璃の牛頭を耕地に發堀して、兄弟其所有を爭ひ、角力の勝敗に依りて之れを決すと。其譚獨逸語の所謂ザアグ、若くはフォルクスザアグに過ぎずとなすも、以て越中に於ける角力の流行が淵源する所を知るべし。力士の生命は力量なり、其資本も力なり、名譽も力なり、才を要せず、智を要せず、營々として養ひ鍛へ蓄ふ所のものは、即ち唯一の筋肉而已。之れ縣人の性格に恰好の職業にして、啻に角力の流行が力士

を產出せるのみには非ず。角力の趣味角力の流行は、智才に遲鈍なる越中人士の氣質より生じたる、必然的結果と見做すことを得べきものなり。

○

牛ケ首角力の由來する珍寶瑠璃の牛頭、後世祀られて牛頭天皇の宮となる。舊藩の儒者野崎氏の考證に曰く、牛頭天皇の宮は、今の針原村にて松森長者爰にありて政務を把る。松森の居址今に長者屋舗と稱し、婦負郡北代村にあり。俚謠にいふ「漆千倍朱千倍、金の鷄の一番、朝日輝く夕日映す、三葉うつぎの下にある」と、思ふに長者の蓄積せし金銀を埋藏せるものか。此地より駒率錢を滿載せる巨瓶を發堀せしこともありと。吾輩は思ふ「漆千倍朱千倍」の俚謠は、檻房平原に棲息せる越中人の個人的にして、又蓄積主義の氣實を、最も善く表明したるものなり。彼等は金錢を蓄積し之れを巨瓶に滿載して、邸宅の地下に埋藏することを以て、畢生の主義とし且つ快樂とす。「富山縣の名物、山には立山あり、人には安田、淺野の徒あり」と稱せらる。水平線擡頭の名物は、之れを現代時勢の產兒と見做さんよりも寧ろ、三つ葉字津木の下なる松森長者の精靈が、再生したるものと謂ふこと得べし。

吾輩我國の金傑傳を讀むに、成功の經路智を以てするものと力を以てするものとあり。甲は機略縱横にして其爲す所複雜なるに反し、乙は鈍重倦まず、其爲す所單純なり。試みに關西商才の府より崛起して、沖の暗いのに白帆が見ゆる、密柑船の俗謠と共に、其名天下に喧傳せられたる紀伊國屋文左衞門の施設經營を見よ。江戸の市場を敏知して柑船を送り、明暦の大火を豫想して木材を買收する等、其小傳は則ち一篇の智慧史ならずや。近時の怪傑故雨宮敬次郎氏曰く、成功の秘訣は見通しにあり、機會好運は常に我々の眼前を往來しゝつあり、巧みに之れを捕捉し得ると否との一点に依りて、成功と失敗とは岐ると。事象を未前に觀破して機會好運を捕捉するは、鋭智敏才の事なり。然れども越中の金傑は紀文、淀辰、錢五乃至雨敬、大倉等の行口と其趣を異にせり。彼等は鋭智敏才を武器とせずして、「辛抱は金」の格言を守本尊となす。故に其傳記は平凡を極め、色彩に乏し。猶ほ力士の營々として筋肉を鍛へ力量を蓄ふるが如く、彼等は一心不亂に勤儉し節約し、營々として微を積み產を造る。嗚呼越中の國粹や、秀でゝは日下開山の相撲取となり、凝つては漆千倍、朱千倍の大金持となる。而して其横道に外れたるものは則ち僧侶なり。

○

參謀本部陸地測量部の報告に依れば、加賀の白山は標高九千七十五尺にして、越中の立山は九千八百八十三尺五寸、劍山は九千八百九十三尺四寸なり。然れども測量正確ならざりし往昔に於ては、越中人自ら立山を以て、白山よりも馬の沓一束丈け低しと信じ、登山者は石塊一個宛を携へて、之れを絶頂に置くの風習ありしといふ。卒如として聞けば、越中人の負けじ魂を表明せるものに似て、其氣慨や嘉すべく、其努力や賞するに足ると雖も、風勢の猛烈なる、動もすれば五尺の人體を拉して、之れを雲間に吹飛ばし去る高山の絶巔に石塊を積むの所爲は、寔に智慧なきこと夥多しく、愚蒙にして徒らに螻蟻の如く蓄積惟れ事とする越中人の氣質を遺憾なく、九千八百尺の高きに於て廣告せるものに非らざるか。昔は越中人の都會に出でゝ業を操るもの、米搗男にあらずんば、則ち湯屋の三助なりと稱せられたり。之れ水平線下の越中人にして國外に發展せるものゝ氣質を、研究する恰好の材料にして、智才を用ふるの必要なく、兀々其手足を働かせて根氣强く賃銀を蓄積せんことを心掛くるの狀は、猶ほ立山の絶頂に石塊を載置するが如く、畢竟異曲にして同巧に出でたるものなり。

○

茲に注意すべき社會的現象あり、即ち我が越中には詐欺の犯罪多きこと之れなり。今ま吾輩の机上最近の犯罪統計を所有せざるに付、姑らく去三十九年開設の富山縣教育大會記錄中、社會教育部の調査に係る十年間の統計に據るに、犯罪事件の總數三万六千八百四十八件の内、最も多きは徴兵令違犯の一万六百三十件にして、之れに亞ぐは窃盗五千二百四十二件、更に之れに次ぐは即ち詐欺取財の二千五百四十九件となす。百分比に於て徴兵違犯は二十八人と八分五厘、窃盗は十四人人と二分五厘、詐欺は六人と九分一厘に相當せり。元來詐欺取財は各種犯罪の内にありて、最も猾智狡才を要するものなるが故に、卒如として之れを聞くときは、越中の人間は概して悪智しと速了し得ざるにあらず。然れども吾輩をして謂はしむれば、統計上斯く意外に詐欺犯の件數多きは、偶ま縣民が如何に迂濶にして、成川權令の言へる如く蒙昧なるかを反證するに足るものならんか。等しく詐欺と稱す、併も其巧拙の程度は多大の階級と懸隔とありて素より同日に談ずべからず。其巧妙なるものに至りては、往々にして驚嘆すべき悪智悪才を發揮し、堂々たる有識者も爲に其被害を免れざることありと雖も、謀略の淺薄、手段の拙劣なるものに至りては、洵に兒戯に類し失笑に堪へざること多し。蓋し智者は詐るに智を以てし、愚者は欺くに愚を以てす。越中の詐欺は概して淺薄拙

劣兒戯の如きものにして、彼の都會に行はるゝ巧妙なる犯罪と同視し、猾智恐るべしと做さば、甚しき誤解に陥らむ。蒙昧なる越中人は、阿彌陀如來の木像が泣きたると云ふも之れを信じ、乳臭の凡兒が豫言者なりと云ふも之れを信じ、自然薯が鰻に化し、鼻糞が万金丹と爲ると云ふも、敢て疑ふ所なし。之れ則ち平凡なる詐欺犯が盛行し、併も容易に其目的を遂げ得る所以なり。故に統計に見る所の犯罪現象は、決して縣人の多智を示す材料たらず、却つて淺智を證する奥書きとなす、又何の不可かあらむ。縣人窃盗犯の多きは遙に詐欺の上にあり、窃盗も亦往々にして巧慧敏捷、警察當事者をして舌を卷かしむるものありと雖も、刑事巡査の謂ふ所を以てせば、此種「鼠小僧」的悪才能を有するものは、地方殆んど絶無にして、會ま犯罪あれば必ず縣外より侵入せる者に限れりと、以て越中泥棒の性質一班を卜するに足らんとす。

○

吾輩既に本論の回を重ねて縣人の機智敏才を否定したりと雖も、未だ必ずしも無智の二字を用ふるに至らざる所以は、仔細に看察するときは縣人亦全く才智無しとせざれはなり。極北に棲息するエスキモーは、單純の數量をすら計算し得ざる程の、無智蒙昧なる種族にも拘らず、猶且探撿者に

對して、淺薄の虚僞を弄することありと云ふにあらずや。況んや越中未開と雖も其幹線路は、往古より加賀越前を經て京洛に通じ、藩公の參觀交替は時に越後信濃路に取られし事もあり。上方の交渉と共に一面江戸文明の影響を蒙れるよりして、富山は夙に北國の小江戸の稱あり。又三百年前より賣藥行商者の足縱天下に遍きに於てをや。單に是等の交通關係のみを以てするも、都會智識の輸入せられしもの莫るべからず。隨つて少數異出の才幹は求めて或は之れを得ることあらむ、併も縣人一般を概觀するに及んでは、必ずしも無智の二字を用ふべからざるにせよ、其有する所は淺智陋才に過ぎざるなり。比喩を極地未開の蠻族に取るは、不倫の嫌ひありと雖も、尻から剝るエスキモーの嘘言と相距ること幾何ぞ。先づ例を農業者に求むれば、縣令米穀檢査規則違犯者の所爲を擧ぐるの利便なるに如かず。彼等は容量を不足せしめて若干の剝出しを得んと試み、稍々進歩せしものに至りては、或方法を用ゐて俵米の中央部へ粗惡米を混入するものあり。併も此類の奸手段は常に檢査員の發見する所となりて、科料、罰金、拘留等の處分を受け、若くは數次嚴重の戒告を與へられつゝありと雖も、去明治三十七年檢査事業の創始以來茲に八個年を閲し、違犯者の發生依然として止むことなく、動もすれば却つて其件數を增加せんとする傾向なきにしもあらず、之れ豈に農民

の淺智を證據立つるものに非ずして何ぞや。啻に農民と謂はず、商工に於ても亦同じく其弊風を認むることあり、米穀檢査規則違犯は農業者以外米穀商人にして、之れを行ふもの實に少からざるなり。其他一二の事例を引んか、富山縣の代表的生産物たる賣藥は如何、高岡市の代表的生産物たる銅器は如何、全國に於て有名賣藥の稱ある賣行き旺盛のものに對しては、必ず模擬品を續出す。而して類似品を造ること最も多きは則ち富山賣藥なり。高岡の銅器は擬物の弊害なしと雖も、原料の實量を削減するによりて花瓶水漏等の欠点多し。模擬賣藥は恰も擬印を用ひたる俵米の如く、水漏銅器は恰も容量を削減せし俵米の如く、彼之れ共に米檢違犯と其手段を等ふす、淺智眞に恥づべきにあらずや。此の如き淺智陋才は、寧ろ無智の單純愛すべきに如かざるなり。

○

昨臘富山縣廳は文部省の照會に基きて、公私立小學校學童中の低能兒を調査したる所、男一千二百二十七人、女一千十七人、合計二千二百四十四人を計上せられたるは、縣人氣質の智的方面を研究するに際し、吾輩の看過を許さゞるなり。同調査は普通低能兒の外、白痴者一百三十人、風癲者六十三人、盲啞を除きての不具者四百十九人をも低能兒の中に加へ居れるが故に、是等を合算する

ときは、男一千六百二十人、女一千二百二十九人、總計實に二千八百五十六人と云へる巨數に達するなり。而かも以上は學童中の低能者に過ぎずして、別に學齡兒童中、低能の爲め就學せざる者を算するに、男四百三十三人、女八百四十八人、計一千二百八十一人あり。之れを前揭の就學者に加ふるときは、縣下學齡兒童中の低能者は現在に於て無量四千一百三十六人に上る、豈に夫れ驚愕せざるを得んや。元來低能兒と見做すべき者は、如何なる標準に據るを至當となすかは面倒なる問題にして、該調査の標準として文部省の指定せるは「精神の發達著しく不十分にて、教育上特別の取扱を要する者、若くは能力薄弱にて二回以上落第せる者」と云ふに在り。然れども其見解は自ら一樣ならしむるに困難なる而已ならず、聊か過激の語を藉るときは、之が鑑別の局に當り居れる小學校教員中にすら、往々低能の譏を免れ得ざる者あるが故に、該統計の信認すべき程度は、姑らく一個の疑問として存置するに如かず。仮りに其數字が正確の鑑別より出でしものと做すも、未だ各府縣との比較優劣を瞭かにせざる以上は、直ちに本縣を以て低能兒の特產地なりと斷定し難きは勿論の事なり。去り乍ら仮令調査に杜撰の嫌ひありて、大數の幾分に誤謬あるにせよ、低能兒幾千人を算ふるの一事は、本縣人の智能觀察に有力の材料を與ふるものにして、才氣の煥發に乏しきは決して

偶然にあらざるを知る也。縣當局者は該調査の結果を見るに及んで、吾輩の驚けるが如くに定めて一驚を吃せしことならんと信ず。果して然らば茲に二個の必要なる研究事項あり、其一は則ち是等の低能兒が如何にして發生せしかを、系統・家庭及び當人直接の精神的肉體的原因に徵して研究することにして、其二は則ち教育上の取扱方法之れなり。兩者互ひに相待つて離るべからざるは、恰かも患者の病因を確知せざれば適切の醫療を加へ難きと一般、教育上洵に重要の問題なると共に、此種の研究は間接に於て縣人氣質の大欠点とする、淺智陋才の因由を解決せしむるに庶幾からむ。

○

天地正大の氣粹然として神州に鍾り、秀でゝは不二の嶽となり、發しては万朶の櫻となる。其衆芳與に儔ぶ可らざる櫻花の如き大和魂は、我國民氣質の特色として中外に誇るに足らむ。然れども熟々宇內の大勢に鑑みるときは、我れに於て最も缺くる所のものは、外交と云はず商業と謂はず、縱横の機略と敏略の行動とにはあらざる乎。歐米諸國にありて外交に商業に烱眼機微を洞察し、擧措進退の巧慧を極むるもの獨逸の如きは少し。彼れが能く大陸に孤立して國勢の隆興を致し、世界の各方面に商業的勢力を發展して止まざるの狀あるは輕視し難きものあり。近時士魂商才論の我邦

に唱へらるゝを聞くは所以なしとせんや。士魂は則ち之れあり、商才的智能に至りては、我國民の長所にあらざるなり。而して富山縣民の氣質は前來述ぶる所の如く、人種・歴史・地理等諸般の關係に由りて、國民的短所の最も甚しきものあるを看る。蓋し開國以前の日本は未だ世界的智略の必要を感ぜざりし如く、北陬孤立の富山縣は自ら耕して自ら衣食するに、未だ必ずしも氣質の如何を問ふことを要せざりしと雖も、富直鐵道聯絡して他府縣との間に生じ來る經濟關係の、愈々複雜となるべき而已ならず、進んで海外貿易の發展をも計らざる可らざる秋に於て、人心猶ほ固陋蒙昧の謗を免れずんば、縣勢の將來に取りて洵に憂ふべきものあるは、恰も世界列强の間に立てる我邦が、外交に商業に一種の智的能力を欠如するに等しからんとす。縣廳は曩に富直鐵道完成に伴ふ經濟的調査の一機關を設置し、廳員を選んで委員とし、本縣產業の方針を確定するの資料とせしことあり。次で官民より組織せられたる產業調査會の成立するに及び、數四の問題を討究議決し、今後之れを繼續せんとするは、素より有用の事業たるを失はずと雖も、此の如きは地方發展の根本的政策にあらず。若し夫れ富山縣の一大活躍を企圖せんと欲せば、八十萬民衆の氣質を陶冶して其鈍根を治し、愚蒙を啓き秀發慧敏ならしむるに如かざるなり。氣質にして依然舊態を改めざれば、仮令陸に鐵道

の網を敷き、海に港灣の門を列ぬるも、適當に之れを利用すること能はず。動もすれば縣外人の爲に、地方の產業的利益を壟斷せらるゝの虞あり。縣人以爲く、交通機關にして完備せば、幸運求めずして到らむと。焉ぞ知らむ、其幸運なるものは縣人の智力に依りて、獲得せらるゝものならむを。

○

フリードルヒ、ウヰルヘム曾て佛軍にエナに敗るゝや慨然として嘆ずらく、今や我邦は智力を以て物質的勢力の損耗を挽回せざる可らず。而して此の目的を達せんが爲め、予は百事を盡して人民の教育を振張し、完成せんことを希望すと。之れ實に現時獨逸に於ける實際教育の發端にして、機智縱横の經濟的民風を振起し得たる根源とも做すべきなり。曾て米國に於て一組合が實業振興策に關する懸賞論文を募集するや、某氏の「近時に於ける獨逸實業發達の原因及び程度」の一篇一等賞に推さる。其說く所、同國商工業の發展並に驚くべき人民の進步的氣風を、特色ある教育の効果に歸し、專ら米人の注意を喚起せんとするにあり。該論文曾て譯されて我國に行はる。而して近時獨逸國勢の隆興は、漸く邦人の研究に上らんとするものゝ如く、往々此種の譯述若くは著作の刊行を見ることあるは、思ふに時勢の要求が然らしむるものあるに由らむか。吾輩今ま此一事を取り來れ

るは、教育の効果が、如何に國民氣質の上に陶汰する所、偉且つ大なるかを言んと欲するにあり。縣民氣質の欠点は仮令既往に於て人種的・歴史的・職業的の關係に由來し、又た地理的の原因を有するにせよ、之れを改造する敢て難しとなさず、乃ち偉大なる教育の鑄型を以てするは、實に其最大要件にして、教育者の責任繫つて茲に在り。我邦今日の教育を批難するもの、動もすれば智育に倚偏して德育に冷淡なる結果、人心の日に輕兆に趨り、世態の月に浮華に流るゝを謂ひ、人格教育の聲於是高し。然るに吾輩の智才教育を說くを聞けば、顰蹙一番して愈々現代社會の弊風を煽動し助長せしむるものと做さんも未だ知るべからず。夫れ然り豈夫れ然らんや。今日の教育は其弊、智育に倚偏すと做さんよりは、寧ろ斯くいふを得べし。曰く「今日の教育とは成熟者即ち教員なるものが、未成熟者即ち生徒なるものに對し、確乎たる目的もなく形式的の方案に據り、繼續して施す所の作用なり」と。故に其教育せられたるものは、唯だ形式的に或事柄を習ひ得たりといふに留まりて、其人格と云ひ氣質といふものに至りては、一に教育以外の原因により、各種各樣の陶冶を受け、或は敏才となり或は魯鈍となり剛毅となり、或は怯懦となり正直となり奸譎となり、堅實となり浮薄となる。盍んぞ今日の教育を以て智才に重しとなさんや。我邦は智力を以て物質的勢力の損

耗を、挽回せざるべからずと做せし、カイゼルの言は啻に普佛戰後の獨逸に於てのみ必要なりとせず。時世の要求に適應せる大智才の紳士を造成するは、實に我邦の急務にして、而して最も智才に欠けたる本縣の教育に取るべき一大精神ならずとせんや。

○

故伊藤公曾て疾を熱海に養ひ、一新聞記者の訪問を受け、一夕の懷舊談を試みて曰く「英京に着いて驚いたのは、其物質的進歩の豫想以上に絕して居た事ぢや。テームス河口に林立せる帆檣の偉觀、宏麗なる煉瓦の建物、言はず共行路は織るが如しで、汽車は黑煙を漲らしつゝ屋上を疾驅して居る。地下にも亦囂々たる地下線が四通八達してゐる。仰げは電信電話の線、蜘蛛の網よりも繁く、見るもの一として珍らしからぬはない。有りと有らゆる此文明の權化を、現實に見て誰も驚かぬ者は無かつたのぢや。其と同時に攘夷杯とは到底行ひ得られぬ愚論で、攘夷どころか日本も之に習はねは、終に亡國の嘆を見ねばならぬと云ふ事を悟つて、一刻も早く日本へ歸り頑固なる攘夷論者を說破しなければならぬと決心したぢや。」之れ實に味ふべき談話なり。倫敦に於ける文物の實驗は、公に取りて忽ち智識の開發となり、隨つて我邦維新の功業及び文明進歩の動機ともなれるなり。學校

に於ける教育は、之を受くる者の年齢に限りあり、殊に其効果は必ずしも敏速を期すべからず。然るに實物の視察は、如何なる年齢にあるを問はず、直覺的に其智能を開發するに最も即効あり。百聞は一見に如かずの語、陳腐と雖も不磨の眞理たるを失はざるなり。縣人は由來籠居主義にして、賣藥行商人の如き特種の職業にある者を除きては多く旅行することなく、見聞の狹き所謂井蛙の譏を免れず。之れ則ち其氣質を迂愚ならしむる一原因なるが故に、交通機關の整備を利用し、盛んに見學的旅行を實行するは、効力ある智的教育と做すべきなり。然れども人各々職業あり、多少の時日と經費とを要する見學的旅行は、其境遇の狀態によりて、望みて得べからざるもの多からむ。於是乎、坐乍らにして社會百般の現象を、捕捉する所の簡便の機關莫るべからず。曰く之れあり、則ち新聞紙なり。新聞紙が常識を涵養し智才を啓發するの著大なるは、文明國人をして、一日之れを讀まざれば猶ほ且つ自ら迂愚を感ずと云ふに依りて知るべし。英國首相アスキス氏は少年時代より新聞紙を愛好し、他の學友がクリツケツトに耽り、フートボールに熱中しつゝある間に、獨りロンドンタイムスを熟讀玩味したるは、彼れの才能を研磨するに與つて力ありしと云ふ。曾て本縣教育課長たりし某氏、山間僻陬の小學校を視察して、深く其住民の蒙昧を慨嘆し、薦むるに新聞紙の購

讀を以てせし事あり何ぞ啻に僻陬地と云はむ。縣人の氣質中最も缺如せる所を補はしむるに、新聞紙の如く簡便にして且つ安價なる要具ある莫し。之れ決して吾輩の我田引水的强辯にはあらざるなり。

○

縣下の風俗として最も嫌忌すべきもの、吾輩之れを結婚に於て看る。即ち結婚を爲さんとするに方り、婿家に於て先つ調査する所の要項は對者の家產なり、持參の金品なり、家柄なり。婦たる者の人格と才能の如きは第一の問題にはあらず、時としては第二の問題ともならざる事あり。隨つて婦家に於て關心する所も亦之れと同じく、夫たるべき者の人格と才能とを主眼とせず、仮令才識に足らざる所あり、品行に欠くる所あるも、財產裕かなければ則ち生涯を托して悔ゆること無し。此の如き風習は獨り越中のみに留らず、我邦一般に其傾向あり。殊に歐米文明國は黃金結婚の本場とも稱すべき狀態にありと雖も、其弊習の一面に於ては財產若くは家系に拘泥せざる、人格結婚の極めて盛んなるものなきにあらず。然るに本縣に於ては未だ當事者の人物、即ち貴重なる無形的資產を唯一の目的とせる嫁娶に乏しきは、誰人も否むべからざる事實にして、猶ほ嫁娶の區域が多くは一

郷内にあらざれば一郡内に限られ、然らざるも縣内を出づること少し。此關係は出生兒の氣質に及ぼすところ、甚だ多く久しく愚蒙の謗を免れざる一原因と見做すべきなり。故に吾輩は結婚に關する縣人の思想を一變し、財産よりも智德の圓滿を主眼として、對者の選擇を爲し、必ずしも小區域内に蹋躇せず、弘く材を天下に索めて蝦夷種族を基本とせる血液を混和し、之れを複雜ならしむることを必要となすものなり。

若し夫れ前章論述せる所の地理的關係に至りては、幾條の急流ありと雖も、往昔渡船時代に於けるが如き交通隔絶の憂ひなく、架くるに完全なる橋梁あり、射婦兩郡を境界せる吳羽山脈の障碍のみは、人力を以て未だ除却すること能はずと雖も、鐵路其の胴腹を穿ちて、高岡富山間を三十分間に駛驅すべく、更に電車を含める輕便鐵道の計畫進捗して、二市八郡を四通八達するに至らば、所謂檻房的平原を化して一個の大平原たらしめ、米搗根性三助氣風、乃至立山の絶頂に石塊を蓄積するが如き氣質は、自然の裡に消滅し去り、秀吉の才、家康の略、此間に發生せしむる必ずしも望み難きにあらず。況んや産業的競爭の波瀾、滔々として地方に襲來し、人をして復た昔日の偷安を許さゞるものあるに於てをや。大勢此の如くにして我々の覺醒と奮勵とを促しつゝあり、縣人たるも

の盍んぞ起たざるを得んや。

（明治四十四年一月稿）

牛的越中人

○

石州の人橘南谿氏、醫を攷むるを以て、出でゝ四方を漫遊すること前後五年、足跡殆ど天下に遍し、具さに各地の人情殊俗を捜察し、其著東遊記、西遊記は讀書家の珍とする所なり。中に「小杉の感」と題せる一章あり。十二月下旬、南谿其從者と共に越中小杉を過ぎんとして「此邊の百姓と見えて四十計りなる男」に途を問ふ。男いふ「旅の人は何處より何處へ越し給ふや、又何の用にか出で給ふや」南谿曰ふ「我々は都方の醫者なるが、富山の方へ志して罷るなり」男曰ふ「富山は此所より程近し、彼地に逗留し給はんや」曰ふ「品よくば足をも留むべし」曰ふ「此寒空にさぞ難義に思ひ給ふべし。されど人は辛抱こそ肝要なり、そこ達も深く察し入らずとも、富山に足を留め給へ、富山は繁昌の地なれば、程なく有り付も出來ぬべく、過し年玄格と云へる醫者、都方より富山へ來り給ひしが、此人辛抱も強く、醫者も上手にて其家業大に行はれ、其上近き頃には町醫ながら五人

扶持を上より賜はり、目醒しき繁昌なり、是と云ふも辛抱の能き故なり。其所達も玄格老程にこそなくとも、などか身の片付出來ぬ事やあるべき、必ず色々の所へさまよひ歩かずとも富山にて辛抱し給へ」と繰返し勸告すること切なり。既にして小杉の一茶店に休憩せしに、彼男途中の言を取つて再び縷述するに及び、從者怫然として其無禮を恕る。南谿乃ち制して曰く「咎むるに足らず、是よく人情世態を知るの學問也」と、眞に南谿のいへる如く越中の人情世態、此對話により瀝々たるものあり。即ち一、人生成功の秘訣は辛抱にあるのみ。二、現に玄格老の如き好個の活模範之を證す。三、故に右顧左眄せず兀々として只管其生業に辛抱せよとは、小杉近在の農夫が南谿に告げし主旨にして、之れ軈て越中人士の處世の抱懷を、代表的に發表せしものと見做して可也。彼の有名なる「人國記」の著者が、越中人士を品隲するや餘りに簡單に過ぎて、忍耐の一事を叙せざりしは千古の遺憾なりと雖も、其の「陰氣の中に才勇あり」といへるは、或は沈勇の意に解し得ざるにあらず。又「臨事不壓死の風もあり」といへるは、堅忍不拔の精神と做し得ざるにあらず。恐らく之れ意到りて筆の未だ盡さゞりしもの乎、抽象的の「人國記」に盡さゞるところ、具體的人國記とも稱すべき、東遊記に於て補綴拾遺、復た餘蘊あるなし。牛的越中人の眞面目於是最早掩ふ可らざる

なり。

○

越中人士の祖先たる原住民は慓悍無比にして、戰を好み太古時代に於て早くも東進の西力に抗して、優等種族と屢々激烈なる衝突を起し、我が國史の上に「越の蝦夷反す」の文字を繰返さしめたるものにあらずや。然るにも拘らず、其性質を枉げて、陰忍克己牛の如くならしめたるは、三千年の昔より出雲朝廷の上古時代に渉り、優勝劣敗の結果、境遇の變化が然らしめしものと想像せらる。之を歴史的最初の原因と做し、更に下つては領主の壓迫あり。一面又德川氏の鎖國政策ありて、遂に第二の天性を養成せしめたるに非ざる莫けんや。領主の壓迫は前田氏の治となりて、顯著の効果を收めたるものにして、之が爲には歴代の藩主苦心を費すこと鮮少ならざりしに似たり。前田利常は加藩三代の英主たり、明暦二年の春某日、近臣左門、玄蕃、對馬、因幡の徒を膝下に召し、告げて曰く、卿等加越能三國の農民を御すること、茶飯を喫するが如く易々たりと爲す乎。何ぞ夫れ然らんや、北國の暴徒屢々猖獗を逞ふし、信長以來頗る其鎭壓に勞したり。就中加越兩國は悍性抑ゆべからず、曾て佐久間、柴田等强壓を加へて仮藉せず、利長も亦專ら峻嚴の手段を取れり。而して寡

人に至りては、苟くも不順不逞の徒あらむか、捕へて或は刎ね或は磔し少毫も恕さず。此の如くにして、猶且納米の分を果たさゞる者は之を責むるに體を縛し、四肢を挾み、水火を用ひて殘酷を敢てせり。今や人心漸く軟化し、政務難境を脱せるに似たりと雖も、併も決して意を安んずる能はず。卿等夫れ之を了し大いに將來を戒めよと。之れ則ち利常に扈從せし侍臣藤田内藏允が八十餘歳の高齡に達して、手記したる記錄の一節なり。所謂「泣く子と地頭には勝たれぬ」の語我れを欺かず、反抗すれば一身一家を失ふが故に、忍耐に忍耐を重ねて習ひ性となれるものと做す。而して民衆の進取的元氣を抑止し、退嬰苟安、汲々として己れを持し、只管寸を積み尺を重ぬるの處世方針を取らしむるに至れる一般的原因が、近古德川初世の取りたる政策の結果なるは、素より喋々を要せざるなり。之を以て機に觸れ時に會ふて、越中人士の奮然獄起、權勢に反抗するや血を流し命を捐て顧みず、恰も鈍重の牛畜一たび猛怒するや、當るに敵なきが如く、又恰も休火山の俄然として爆發するが如きは、一見矛盾に似て而かも怪むに足らず、之れ即ち越中人士の越中人士たる所以也。

○

越中人士をして牛的氣質を馴致せしめたる歴史的原因以外の別個の原因は、則ち地理及び氣候の

關係なり。越中の國たる東南西の三方環らすに高山を以てし、此の一方は日本海を以て限らる。北せんか波濤澎湃たり、南せんか山嶽重疊たり、東西兩面一路纔かに通ずと雖も、交通便ならずして、壺中の天地、遠く都會と隔絶せるを以て住民の生活勢ひ自給自立の計に出でざるを得ず。於是乎勤勉を要し、忍耐を要し、蓄積を要し、意を一攫千金の快擧に奔することなく、寧ろ牛歩の遲々たるを甘んず、寔に已むを得ざるなり。氣候の人生に於ける交渉は、最も切實にして、就中溫度の高低が氣質を陶汰するの大なる、地球上に分布せられつゝある人類の狀態を見て知るべきなり。即ち高溫地に生活するものは、筋肉の運動を弛緩ならしめて怠惰放漫に流れ易く、天産豊かにして食物の需用容易なるを以て勤勞の習慣を作るが如きは、素より望んで得べき所にあらず。之に反して低溫地の生活は、其極度に至りては身体の發育を妨げられて矮少短軀となり、防寒と衣食との爲に全力を費やし文化發達の餘裕なしと雖も、天産豊かならず食物の需用亦容易ならざるを以て、勤勞の氣質は之を養ふの機會あり。越中の地たる北緯三十六度より同三十七度の間にありて、氣候概ね和順を得、併も溫暖地方の如く筋肉の運動を弛緩ならしむるの虞れなく、酷寒地の如く身體の發育を障碍せらるゝの嫌ひなし。唯夫れ降雪の期長く、降水の量多くして寒暖、孰れかと云へば則ち寒國に

屬し、生活上冬籠りの準備に鞅掌するの必要に迫られ、隨つて住民自ら勤勉忍耐の良習を蓄ふ、越中人士の牛的氣質豈夫れ所以なしとせんや。地理、氣候以外に氣質の淘決を爲すものは職業ならずんばあらず。越中の生産業は農業なり、農の業たる星を戴いて出て月を踏んで歸り、耒耜を握り牛馬を驅逐し、汲々孜々として大なる苦勞を要す。故に農は人をして着實、勤勉、忍耐の諸德を養成せしむること自然の數なり。舊記を案ずるに越中農業の勤勉力行を奬勵せらるゝや由る所太だ遠く、傳說の如くんば大彦命婦負郡内に留り盛んに稼穡を興す。時に黑牧彦なる者あり、勵精無比農功殊に勝れたるを以て、賞して鄕將として早稻比古と名づく。彦の居る所今の黑牧村なりと、又傳ふ武内宿禰の北陸を巡撿するに當り、其子藤津を留めて勸業に從はしむ。藤津新川に田廬を作り、丁壯を集めて敎へ、自ら力耕の範を示す、今の高野村之なりと。斯くて遂に鈍重牛の如き越中人あり。

○

越中最古の歷史的並に敎訓的お伽噺を六治古の物語となす。曰く婦負郡長澤山は古へ篠山と呼ぶ、時に六治古なる者あり性質純朴、其家貧うして耕作纔に食ふに足る、勤勉忍耐力を竭して母に仕へ近隣に範とせらる。一夕妙齡の美女雪中路を誤りて來り宿し終に六治古と婚す、之より夫婦共力、

新田を開きて西山の水を引き、秧を挿み肥を培ひ、禾稼穠々として秋成多く、勞を重ね産を積み、富力一鄕に冠たるに及んで妻女卒然として去る、之れ龍女六治の成功を幇助せしなりと。味ふべき哉物語や。越中農民の辛抱主義の理想此一篇に於て歴々窺ふべきものあり。彼の橘南谿の「小杉感」に現はれたる一農夫の訓言と對照し來らば、釋然手を拍つ所あらんとす。見よ外に出づる所の中越農民が、如何に彼の忍耐鈍重牛の如き性質に依りて珍重せられつゝあるかを、北海道は越中農民の發展地にして、移住土着せるものゝ員數よりしても殆んど其右に出づる莫らんとす。而して彼等が荆棘榛毛の未開地に臨むや、能く絶倫の精力を揮ひ、百難千辛に遇ふて曲折せず、遂に資産を作り、幸運を贏ち得るに至りては、他府縣人士の企て能はざる所にして、名聲嘖々道廳當局者の賞讃を博し、今に及んで猶ほ年々出張所を伏木に設け、我か移民を歡迎して措かざる所以なり。何ぞ啻に農民のみと謂はんや、此氣風惹いて一般の國風となれることは、越中の商工業を代表する所の富山賣藥に於て最も明白に證據立てられたり。即ち無數の行商人が、商品を負ふて全國足跡を印せざるの地なく、苟くも人間の棲息する所は如何なる山間僻地と雖も、必ず往いて配藥するの勤勉力行は、農業者が風雨寒暑を厭はずして耕作に從事すると彷彿たるのみならず、其營業方法が各々一定の地盤

を有して、相冐さゞること所有耕地の區劃に同しく、春播秋收繼續的に之を行ふ狀は愈々農業に酷似せり。此の如き商業は富山賣藥を除いて、其例を見ること恐らくは少なからむ。更に賣藥のみと謂はず、有ゆる使用人となり、有ゆる勞役者となる者は、悉く耐久力を以て唯一の資本と做し、仮令安田淺野の如き見覺しき金傑たるを得ずと雖も、相應の立身出世を爲せるもの甚だ多し。若し夫れ加賀、北海道、東京、大阪等の各地に於て、徒手空拳を打つて中等以上の實業家となれる越中人士を物色し來らば、其數幾千を算せずんば已まざらんとす。蓋し著名の人物に至つては、寥々晨星の如きを否むべからざるも、健全なる中等人士の數量を以て換算するときは、十枚の百圓券も百枚の十圓券も彼之れ損德ある莫し。越中國は則ち牛材を産する好牧場なり、胡爲ぞ恥づるに當らむ。乞ふらくは永久に此美質を保持し、此良風を發達せしめよ。

（大正二年一月稿）

雪の越中

宗良親王の歌に曰く「ふるさとの人に見せばや立山の千とせふるてふ雪の曙」旅客の初めて越中に入るものは、先づ白雪皚々たる立嶽の雄姿に對して、詩興を動かさゞるを得ず。殊に京洛の人たる宗良親王にして、圖らず北陬に流落し、其錦心繡腸を以て自然の偉觀を仰望せし時には、逆境の裡猶且「故郷の人に見せばや」との感興を湧起せしも當然といふべし。何ぞ立嶽の雪と謂はむ、雪と寒とは北國の名物、越中の特色なり。橘南谿の東遊記に記して曰く「横さまに降る吹雪にて、頭巾の間より眉ぬれて、其露眉毛に氷り付き、眉毛の先き白く氷柱の如く下ることあり……草鞋の氷り付きて石の如くになり、解けざることは毎日かくの如く北地にては珍らしき事にはあらず……我輩南國に生れて、かゝる寒氣は聞も及ばぬ事なるを」越中に於て降雪の早き年は、十一月五六日頃に鵞毛の既に片々として飛ぶあり、去明治三十七年の如き之れなり。遅きは十二月二十日頃より銀世界を現出す、即ち明治三十一年又は三十五年の如き之れなり。而して降雪の最終期は早きを

三月七日とし、遅きを四月二十一日とす。積雪は三十七年の如く十一月十七日に始れる事あり、又十九年の如く二月一日に始れる事ありて、堆積期間の長短一定せず、積量多きは四五尺、少きは尺餘、年により不同を免れずと雖も、未だ曾て積雪無き冬に會へることなく、將來とても必ず爾かあるべきは勿論なり。

○

雪は越中の名物なり、然れども此名物は交通を杜絶し業務を妨げ、加ふるに寒氣の凛烈なる橘南谿をして舌を卷かしめしものありて、地方人士の間には、其恩惠を感謝するよりも寧ろ迷惑を訴ふる所となり、隨つて冬期は屋内に蟄居して、或は男女の風を紊し、或は賭博の習を成す等、雪の人生に與ふる交渉は、喜ぶべきものなくして、却つて憂ふべきものを見る。即ち退いて雪の支配する所となるも、進んで雪を利用せんとすることなきは、我輩の深く遺憾となす所以なり。自然が人生を支配するは素より已むを得ずと雖も、或程度まで自然を支配して利用厚生に資するは、則ち吾人の職分ならずや。

○

北國の雪、越中の雪は、由來文章、詩歌、俳句、又は繪畫等に於て、之れを寫され、之れを描かれざるにあらずと雖も、多くは皆な火鉢を擁し、室内に蹲れる閑人者流の餘技に過ぎず。換言せば、征服的の產物にあらずして、被征服的の產物なり。積極的の利用にあらずして、消極的の利用なり。試みに鄉土史を繙き、征服的に雪を利用せし者の事績を索むるに、纔かに佐々成政の左良々々越ある而已。傳へいふ、成政の秀吉に抗して兵を前田氏と搆ふるや、天正十二年十一月下旬、從士數十人と共に、雪中立山の險を踰ゑ、遠州濱松に往いて、密に德川家康に會すと。是れ素より窮餘の奮發に出づと雖も、併も雪の越中史を裝飾する唯一の事件なり。加藩の儒者富田景周氏は、其著三州志に於て之れを否定し、同年七月の事と做せり。曰く十一月と七月と字體似たるを以て謬寫せること疑ふべからずと。又有澤永貞の言を引きて曰く、蘆峅の者に問ふに、冬日立山に登ることは絕えてなき事なりと、夫れ然り豈夫れ然らんや。雪中の登山は事實に於て不可能ならざるのみならず、當時成政の境遇に考へ、且つ野猪猛進敢て冒險を厭はざる彼の氣象に徵するときは、深く疑ひを挿むを要せざるなり。

○

成政の左良々々越の記錄以外に於ては、燕臺風雅に收むる加藩の學者木下貞幹の詩あり。曰く「放鷹於越野、勁氣滿雲端、百羽獲俄頃、雙飛落一丸、鴻肥翎似蓋、鳧老蹼如丹、得復眼莎毬、相隨上竹竿、憐斯搏擊後、寧避雪風寒、歸府千夫膳、俱稱萬壽歡‖獵越中‖」即ち知る加賀の名君前田綱紀公が初冬風雪の間、侍臣を率ゐて越中の野外に出獵し、奬學興文の傍ら盛んに武道を勵まし、雪國男子の志氣を振作せられたることを。此他に征服的積極的に雪を利用せるものとては、我輩寡聞にして越中の史籍に認めず。却つて大雪の間、特に令して藩士年甫の禮を廢せしめたること、數次舊記の上に散見するに至りては、庶民をして冬眠的安逸を貪るの意氣地なき慣習を、作らしめしも怪むに足らざるなり。

○

さりながら、こゝに特記すべき勇壯の職業あるを逸すべからず。开は實に山村に於ける獵師の徒なり。中新川郡にありては立山一帶、下新川郡に在りては黑部一帶の千嶽萬谿を跋涉して、猛獸を捕殺する彼等の活動は、則ち冬期風雪の荒るゝを機とせざるは莫し。拙著「黑部探撿記」の一節に曰く「助七の如きは、雪中黑薙溫泉の留守番旁々、二日でも三日でも、深山幽谷の間を獵り暮し、

行當りばつたり何處でも雪の中に寢轉んで、夜を明すといふ暢氣千萬のものだ。夫れでも身體に何の害もないとは驚いたもの」と。又黑雉上流の怪窟瘤杉を叙するの條に曰く「此處は猛獸狩に來る獵夫の根據地で、此洞の中に、五日でも十日でも起臥して、附近の山々谷々を獵るのだ。其間は着の身着の儘で、雪が降れば奥の方の狹い所へ匍込んで寢るのださうな」と、雪を恐れざる生活の狀態見るべきなり。而して彼等は往々大吹雪のため、又は大崩雪のため、壯烈の最期を遂ぐること莫きにしもあらず。此の如き場合は、其死體の捜査も亦非常の冒險事業に屬するは云ふに及ばざるなり。我輩が前に成政立山越の擧を有り得べく、成し得べき事とせるは、獵夫生活の實例に據れるものにして、積雪は數十丈の深谷を埋め、奔駛矢の如き急流を覆ふて、渡渉の便却つて平日の比に非ずと聽く。橘南谿其旅行記に於て成政の冒險を說明すらく「其さら〳〵越の所は、彼地の人も秘すと云へり。常の道を廻りて行けば、富山より松本へ六七十里にも餘れる所を、一日か二日の間に行く道也。此事只寒中より早春の間にすべき事にて、常時にはなり難しとぞ。其仔細は人跡絕えたる極深山のことなれば、草木生ひ茂りて行くべき道を遮り、或は斷岸絕壁の所ありて、羽なければ飛び難く、或は猛獸出で人を食ふ。數十丈の雪積る時には、斷岸絕壁の所も一面の雪と成り、仮令轉

落ちたるにも雪の上なれば其身損ずることなし。又大樹喬木と雖も皆雪に埋もれて一面平地の如く、猛獸又皆遁陰れて穴に住めば、人を害することなし。此故に寒氣に堪忍びて命全ければ、谷嶺池川の差別なく、眞直に越えらるゝことなり。此事を越中にて悉く聞きしかど、餘り怪からぬ事ゆゑ、只昔物語のやう聞流し居たりしが、夫れよりだん〳〵出羽奥州に入て見るに、聞くに立山のざら〳〵越の事、初めて誠の事と思ひ悟りぬ」とて、甲田山其他の實例を引證せるは、景周氏の實驗に據らざる否定說を打破するに餘りあらむとす。

○

征服的に雪を利用せるもの、之れを史乘に徵しては成政あり、職業に索めて獵夫あり、其他は詩客文人及び畫家の筆に依りて纔かに描寫し、賞玩さるゝに過ぎずと雖も、近時圖らず對雪注意を惹起せしめたるものあり。日淸日露の兩大戰役に於て、經驗せられたる軍事上の關係を最とす。即ち砲、騎、步、輜重の各兵種が、冬期數次實演する雪中强行軍は、我が陸軍に多大の利益と敎訓とを與へ、併せて一般國民の志氣を皷舞せしは人の知る所にして、越中の沿道も亦曾て强行軍騎兵の馬蹄に積雪を蹂躪せられしことあり。更に敎育の側に於ては、工藝學校の雪製模型嘖々の名あり。又

小學校に於て、時に兒童をして雪合戰を行はしむるものなきにしもあらず、猶ほ他方面に於ては、夏期の飲料、若くは防腐冷藏のため貯雪するものあれども、雪國としては之れが利用の途は決して盡せりと謂ふべからず。否惜しむべし、好箇の北國名物は幾んど無用の長物視せられ、日常の挨拶必ず「厭な物が降りました」の嫌惡的言辭を以てせざるは莫し。天既に降らすに雪を以てす、進んで此天惠を如何に處置すべきかに就て考慮し工夫するこそ、正に雪國人士當然の責務とせずや。

○

我輩曾て屢々人種的關係より越中人士の肉體が、寒暑孰れにも堪へ得ることを縷說せしことあり。現に移民の募に應じて南米若くは布哇に在る者を見るも、北海道樺太等に在住する者を見るも、其成績良好にして、殊に北海道に於ては、寒氣に屈せずして奮勉努力する越中農民の歡迎せらるゝこと大なりと稱す。然らば冬期遊惰の弊風の如きは、全く習慣に因れるに外ならずして、敢て雪と寒氣とに辟易し、畏怖する所以にあらざるを知るべし。雪と文化との關係を說く者は、古代文明國が、悉く降雪地帶の外にありしに、現在の文明國は、悉く降雪地帶にあらざるはなきを味ふべしと做す。天惠を得たる雪國の人士は、重大の使命に顧みて須らく奮躍一番して可なり。

○

されば先づ地方人士をして愛雪の觀念を養はしめ、雪を厭ふべきものとせず、愛すべきものと做し、猫の如く之れを辟易せず、狗の如く之れを歡迎する所の良習を作らんことを推奬せずんばあらず。而して此良習を作るは、謂ふ迄もなく兒童の時代より開始するに如かざるなり。今より二十年三十年以前の北陸の市街地は、高岡、富山と謂はず、福井、金澤と謂はず、積雪道路を埋めて其高さ數尺、時としては家屋の軒に等しきことあり。運搬は凡て橇に據り、橇は人をも載せて交通機關を兼ぬることを常とせり。隨つて皎々として鏡面の如く凝結せる道路は好箇の滑走場となり、スケーチング即ちスベリコの遊戯は、冬期に於ける兒童の最大娯樂に屬し、終日戸外の寒氣に觸れて歸へるを忘れ、滑走に飽けば雪合戰を演じ、或は雪を以て家屋を築き達磨を造る。故に初冬降雪を見れば彼等は雀躍禁せず、直ちに雪鋤を取て戸外に馳せざるは莫りき。然るに近時兒童遊戯の種類漸く一變せる傾向あり、雪遊びの如きは纔かに一部幼年者の間に存するに過ぎず。學童の氣風甚だ之れを喜ばざるの色を見る、其一原因は街路除雪の取締嚴重なるにも由らむが、時世の變遷は一般兒童をして大人らしくせるにはあらざるか。スケートの遊戯は歐州に於て紳士淑女の愛好する所にし

て、白髮の老人も亦進んで之れに加はると。英語讀本を見るも雪滑りの遊戯を叙すること甚だ多きは偶然にあらず。冬を愛し雪を愛し征服的に之れを利用する此の如くにして、初めて極地探撿の如き雄志も勃動し來るを得む。

○

故に曰く、初等教育と謂はず、中等教育と謂はず、將た社會教育といはず、雪國越中の如き地方にありては雪滑、雪戰、雪工、若くは雪中探撿等凡て雪の利用を盛んにし、身體精神合せ鍛ふの覺悟あるを要す。曩きに知事以下の本縣高等官が皆な寒を避けて溫泉に去れるや、我輩深く社會教育の爲に慨し、彼等が年末年始の休暇を機とし寧ろ縣廳搆內に雪合戰を催すべしと揶揄せしことあり。之れ單り當地方の爲めならんや。耐雪耐寒の勇健なる國民を造るは、領土を大陸に擴張したる日本帝國膨脹の一大要務なり。

（明治四十四年一月稿）

黑部讃美錄

○

予は先年、黑部の山谷を跋涉して、天下又此の如き奇景莫るべしとまで叫んだ。但だ予は旅行の經驗多からず、未だ木曾を過ぎず、耶馬溪をも訪はず、有ゆる山水と黑部とを、比較對照して判斷を下すこと能はざるを憾みとした。然るに今回多數の同好者と共に、再び入山し、愈々深く黑部の谿谷美を味ひ得て、今後若し機會だにあらば、更に幾回となく其境に親みたいとの欲望を起すに至つた。依つて同伴者の所感を聽くに、二十餘名の諸君は悉く黑部の嘆美者となり、多少の困難と疲勞とを覺えた者も、其困難疲勞に酬ゆる所充分であると言つて居る。是等諸君のうちには旅行家も少からず、足跡を普く景勝の地に印したる人の加はり居りしにも拘らず、異口同音に黑部を以て天下の奇景と稱したことは、予の意見に奥書をしたも同樣である。

○

同伴者の一人は、狩野畫の山水に怪奇の山岳を描いてあるを見て、事實有り得べからざる空想的のものとばかり思つてゐた所、黒部の諸山を見るに及んで初めて首肯することができた。巍峨として蠡立し居る黒部の大岳小山は、孰れも皆嶮怪を極め、狩野派の名畫を以てするも或は其眞を寫し難く思はれるものがあると謂つた。山の態既に此の如くであるから、谿谷も亦隨つて深く、無數の瀑は本流及び支流へ落ち來つて、華嚴の如きもの、霧降の如きもの、養老の如きもの、千差萬別恰も瀑の共進會を見るやうにて、祖母谷の魚止と云ふは、其形狀の壯大なこと恰もナイヤガラの如く、凄まじい轟轟の響は四境を震動して居る。谿谷の展けた所は淺水小瀨を立て、細波銀の如く、潺湲微妙の音がする。例せば黒薙の足洗の上流が夫れである。谿谷の逼る所は激流奔騰岩を嚙み石を碎いて、雪の如き泡沫を天に冲せしめて居る。例せば本流の猿飛が夫れである。此谿谷の變化は、或は優美の景となり、或は豪宕の趣を呈し、閑雅幽靜の後にて、忽ち豪宕壯烈に逢ふ。看て竭すこと能はず、賞して飽くことの無い所以である。斯る天下の奇景の未だ世に現はれぬは、寶の持腐りと云はうか。予は詩人、文章家、畫家、若くは寫眞師等が續々同山中に入込み、陰れたる仙境を大に世人へ紹介せんことを望む。

○

黒部の奇觀は岩石で莫ければならぬ。愛本橋あたりでは未だ岩石美を見ることは能きぬが、黒薙流域にては溫泉より上流へ進むに隨ふて、奇岩怪石の現はるゝこと甚だ多く、本流に於ては、鐘釣、祖母谷邊りに於て充分に之を見得るのである。彼の有名なる鐘釣山の如きは直立幾百尺、全く一個の巨岩から成立つて居ることを認める。又新鐘釣溫泉流失の遺跡へ、不歸谷から激流のために押出された所謂黒部大理石は、其大さ家屋に等しいもので、猶其附近には之に似た多くの巨岩が亂立し、岩石の展覽會とも稱すべき趣を呈してゐる。岩石の種類は、主として花崗岩から成り、安山岩、閃綠岩、石灰岩、輝石等を交へ、又片麻岩らしいものも見受けた。隊員高田東洋君は、岩石の間に身を置き、嗚呼此のやうな美石の一個でも富山へ運搬したら、其價格實に幾許であらうかと嘆息して、稍々暫時石を撫でた。黒部の石を採取して利用の方法を講じつゝあるは、獨り石川舜台氏の黒部大理石事業あるばかりである。然して予は利用の方而よりも、寧ろ天然の布置宜しきを得、皎々たること雪の如くなる花崗岩の間から、清流の奔駛する黒部の谿谷美を推賞して措かざるものである。此偉大なる價値は、親しく其境に臨まねば決して了解し得る所ではない。經濟の念を離れて言ふと

きは、天の與へたる黑部の偉觀は、我々人類の精神を慰め身體を養ふ聖地たり公園たるが故に、其處に布置せられたる岩石を損傷するは餘り喜ばしい事柄ではない。

○

黑部の奇觀は、又樹木で莫ければならぬ。國有林の最高所は、海拔一萬尺に達して、植物狀態は所謂高山植物帶に入れども、其大部分を占むる所、五千尺以下の温帶林は、昔ながらの原生林にて、人工植林を行へるは唯だ五味平の局部に過ぎない。是等の原生林は、濶葉樹あり、針葉樹あり、中には貴重樹種に乏しからず、欅及び黑部杉の名あるネヅコの如きは、良幹豊富にて、入山中屢々四抱へ五抱へもあるネヅコの巨木、又は直徑三尺以上の欅、其他百年二百年を經たと思ばしい、栂、姫子松、杉、楢、橡、山毛欅の類をも見受ける。雄大の山谷を彩るに是等の樹木を以てし、森林美は他に覓むるを得ざる趣であるから、詩想を養ふにも畫材を採るにも、將た精神を修練するにも、黑部國有林に優る良好の學校は莫からうと信ずる。

○

水の美、石の美、及び樹木の美を有する黑部の大谿谷が、更に加ふるに溫泉の湧出を以てすることは、自然の恩惠何處まで渥きか測り知ることができぬ。併も其溫泉は、林道の入口から數里にして黑薙がある、無色透明の塩類泉で、攝氏九十一度の溫を有し、夫れから又數里にして祖母谷がある。泉質清淨無垢飲料に好適し、夫れから又數里にして鐘釣がある。玲瓏瑠璃の如き亞爾加里塩類泉にて、是等の各溫泉は、醫治の能効卓越し、神經衰弱・肺病呼吸器病・脚氣・胃腸・子宮・僂麻質斯・皮膚諸病其他に宜しく、其上溫泉所在の四境が凡俗を脫して、靈湯に浴せざるも、猶且身神の患ひを洗滌し去るの効力を有してゐる。

○

下新川郡史稿は黑薙溫泉を叙して「此地深山幽谷の事とて、青山白雲、遠く塵寰を隔てゝ夏期の避暑に最も適せり。東方及び南方に飛瀑ありて巉巖絶壁の間に懸る、直下六丈餘り、附近勝景の一たるを失はず」と言ふ。鐘釣溫泉を述べて「溫泉は客舍より下ること殆んど一町、黑部川の溪間、石灰岩の罅隙より迸出す、別に浴舍の設けなし、三面の岩壁によりて包圍せられ、砂礫其底をなせり。前面は黑部の清瀨を隔てゝ連れる嶮峭、側立數百尺、直ちに面を掠むるが如し」と稱し、又更に祖母谷溫泉を描きて「海拔實に二千二百五十二尺、空氣清新にして、四邊の光景自から塵俗を脫

するものあり。懸崖千仞の間にはツガ、ネヅコ、姫子松等の針葉樹の參差たるあり。サハクルミ、ブナ、イタヤカヘデ、ナカマドの如き濶葉樹其間に夾雜して、白雲の去來に任す。沸白萬石の溪流怒漲激越して山脚に咆哮す、小黑部の如き、猿飛の始き、溫泉附近の如き、其奇拔なる山容、豪宕なる水態は、鐘釣附近と共に黑部谿谷の壯觀にして、天下多く見ざる所とす」と激賞してゐる。この記事を誦しても、黑部各溫泉が、いかに得難き仙境の裡に在るかを想見せらるゝであらう。郡史稿の記事は黑薙に對して稍々薄い感あるが、同溫泉の上流には猿馬場、瘤杉等の大岩窟を初めとして、大深層・小深層・手洗・足洗の美景と奇觀とに富み、往くとして佳ならざるは莫しである。

○

黑部現在の溫泉は三個所に過ぎないけれども、本流支流の間には猶ほ幾多の溫泉の存在することを推察せられる。即ち鐘釣溫泉の下流には、先般洪水のために流失した新鐘釣溫泉があつた。猶ほ黑薙溫泉の下流、霞瀧勝景の地に於て、今ま方さに工事最中の霞溫泉と云ふのが、遠からず竣成する筈である。又た祖母谷溫泉の上流に熱湯を湧出する所多きに徵しても、黑部山間を跋涉するとき數次硫黃の湯氣を嗅ぐことあるに稽へても、溫泉の發見は今後必ず續出することと信ずる。隨つて

箱根七湯と共に將來黑部七湯、若くは八湯九泉の賑ひを見ること無しとも限らぬ、有望なるは夫れ黑部溫泉である。

○

黑部の山谷は嶮絕であるけれども、流域の諸所に此の如き靈泉を湧出して、隨意隨所に浴し得られる組織となつて居ることは、天の配意到れり竭せりと謂はねばならぬ。北陸探檢團青年隊たる予の一行の入山の際、時に冒險を試み過激の旅行を敢てしたこともあるが、歸り來つて溫泉に投ずれば疲勞立ちどころに癒えて、翌日は又新たなる英氣を振ひ起すことができた。若し彼の流域に溫泉の配置が無かつたならば、仮令林道の開鑿はあるにもせよ、黑部の探檢は予等に取つて一大困難の事業たるに相違ない。

○

隣縣石川に於ては溫泉を以て地方繁榮の一策とし、專ら其廣告に力めて居る。成程山中・山代・片山津・和倉の如きは、交通の便を得て、酒肉豊かに物質の自由は利けども、孰れも俗氣に充ちてゐる。黑部に至つては微塵の俗氣をも留めず、其境や神聖・無垢・壯大なる、豪宕なる、將た雄偉

なる彼の山谷は、氣品を養ひ、意旨を練り、體力を鍛ふには天下他に類なきものである。山中溫泉の景色美なりと云ふとも、蟋蟀橋の玩弄物めきたる、我が愛本の足下にも寄付き得ず。黑谷深しと云ふとも、我が黑部大谿谷の孫たり、曾孫たる程の價値もない。況んや山代をや、片山津、和倉は海濱のこととて比較せられぬが、黑部程の絕勝と靈泉とを有ちながら、之を棄てゝ縣外の俗泉に奔るは愚かである。

○

予は既に黑部の自然に就て其一班を叙べた。次で黑部の人に及ばねばならぬ。去りながら、內山村以奧は全く人家を絕ち、唯だ三個の溫泉場を有するのみであるから、黑部山中の住民として叙すべきものを有たぬ。而して此溫泉場の一は音澤村の人佐々木氏に依つて、他の一は富山の人大間知氏に依つて、又他の一は魚津の人朝田氏に依つて經營せられ、各々經營者自身が入山するか、さもなくば開湯の期間代理者に其管理を托してゐるが、毫も輕薄の氣を留めず。金錢の多寡を以て待遇を左右にするが始きことなく、客に對して親切を平等にするところは、最も能く其地境に調和し、殊に女氣がなくなつて一切の取扱は、男手に依つて行はれてゐるなど淡泊愛すべき趣がある。溫泉

管理者の外、國有林內へ出入するものは、音澤村若くは其附近村落の人夫ばかり。彼等は小林區署、陸地測量部等の事業に雇はれ、或時は山谷を探檢する旅行家の案內者となるものであるが、何れも撲訥で善良の性質を有し、彼の有名なる豪傑助七の如きは、先年予の一行に加つた緣故に依つて、當時の情誼を忘れず、予が再入山の報を聞いて雀躍禁せず、親戚故舊に對すると同じく、只管面會の日を待つてゐたことである。人情に厚きこと凡そ此類である。同人の弟の仁次郎と云ふ壯佼は、朝田氏の祖母谷溫泉に雇はれてゐるが、先般黑部山中硫黃澤に有望の銅鑛を發見し、數万圓の價格を以て賣買の交渉が始つてゐるにも拘らず、發見者たる仁次郎は、恰も他人の事の始く、我が一行中其報酬の如何を問ふと、彼は頭を左右に振つて「俺等は猿と同じことだ、主人から食はせて貰へば澤山だ」と答へてゐた。黑部山中に入つて接觸するところの人は、斯うした者共ばかり、所謂撲訥仁に近いものか。

○

大なる自然と、此自然に調和する所の人とを有してゐる我が黑部山は、天が我々の趣味を養ひ、品性を高め、勇氣を蓄へ、又た身體を剛健ならしめる爲に賦與したる靈境である。故に之を開發して

成べく多數の人々をして、其恩寵に浴せしめねばならぬけれども、夫れと共に恁麼貴い靈境は、斷じて俗臭に穢すことを許さぬ。文明の名の下に大自然を破壞するは罪惡である。黑部開發と共に、黑部保存も大なる問題である。

（明治四十四年八月稿）

城端及井波

○

□高原地の市邑は、多く其開發の動機を同ふせるものなり、而して加越の地方に於ては特種の一致点を有す、开は他にあらず寺院の創立也。

□八尾の聞名寺に於ける、井波の瑞泉寺に於ける、隣國にては小立野より起れる金澤の本源寺に於ける、而して又城端の善德寺に於ける、文明の光りは總て伽藍の屋頭より赫耀として漏れ出でたるなり。

□是等の內最も早きは井波の明德年間を推し、金澤の長亨年間之れに亞ぎ、八尾の天文年間更に之れに次ぎ、而して善德寺が城端に移り來れるは降つて永祿二年の事に屬せり。

□往昔の火宅僧はマホメツトの夫れの如く、雙手に劍戟を執つて又た勇猛の戰士たりき。故に寺ある所必ず城あり、寺は多く城堡を兼ねたり。

□斯くして人口は聚り、產業は興り、城下の賑盛となり、お伽噺的なる尉が鼻は、城が鼻となり、城端村となり、尋で町宿並となり、石動・氷見と共に奉行所を置かるゝだけの越中有數の市邑に膨脹せり。元祿六年既に三千七百餘の人口を有し、大工町のみに於てすら三百九十八人を算せしと聞く。

□城端の起るや遙かに他の各高原市邑に後れたるにも拘らず、其進歩の最も目覺しかりしものは、寺院の輪奐愈々壯麗を極めたると、奉行所の設置せられたると、城端絹の旺盛に向へるとに由る。換言すれば一宗教の中心たり、二政治の中心たり、將た三商工業の中心たるを得しが故なり。

□然れども其内の第三は一朝衰運を招き、第二は廢絶となり、殘るは僅に城端別院あるのみ。吾輩岡部町長に導かれて別院の建築を看る。素より往昔の壯麗に及ばざること遠かるべきも、規模宏大、境内幾百年の老樹欝蒼として、長二十一間三尺餘、周二丈二尺餘の彼の栂樹の如き眞に珍品となすに足る。

□城端町の打擊としては、別に祝融の災多かりしことをも數へざるべからず。即ち正德五年に、安永九年に、天明七年に、文化七年に、明治三十一年に、同三十三年に各々火あり、文化の大火は

町の七八分を喪ひ、三十一年の損害之に次ぐ。

○

□金澤の文明は溶けて流れて小立野の高臺より、犀川淺野川兩平の間に瀰漫し、遂に今日の大市邑を成せるも、八尾・井波・城端の三者は餘勢未だ平原に延ぶるに遑あらずして、花爛熳たりし城端町の盛時は久しきを保たず、今は纔に其名殘りを善德寺記の中に窺ひ得るのみ。

□然れども機運は城端の再興を促せり。殊に中越鐵道の線路が、兩礪各町を串貫して高岡に結ぶや、從來五箇山人との交渉位ひにて、暫時浮世を餘所にしたる同町に向つて、更に一道の生氣を吹き込めり。

□城端の童謠に曰ふ。「權兵衞々々々、さら權兵衞、あんどん灯いて猫繫げ」之れ慶長年中、前田利長突如として鷹狩のため同町に入れる時、居民等狼狽町走り權兵衞をして軒燈の点火と飼猫の取締とを觸れ廻らしめしに起因せるもの。時世が同町民の覺醒を促せるは、猶ほ權兵衞の聲を聞くが如かりき。

□鐵道開通より少しく以前、明治二十六年製絹業有志者等相謀つて生絹組合を設け、技手を聘して

傳習し、人を選んで桐生、足利地方の機業地を視察せしむる等、端然不動の尉か鼻の靜態は、漸く眼を働かすに至れり。但た未だ手と足と全身の力とを充分に發揮するには至らず。

□吾輩初めて城端町に入るや、地形の大に八尾町に似たるものあるを覺ゆ。而して、市街の狀態も亦た宛然八尾に異らざる部分多し。但だ八尾は富山に近きだけ、城端は高岡に遠きだけ、各々生氣を帶ぶるの程度に懸隔あり。

□保守的の氣風は住民の面上に現はれ、悠々乎たる趣きは、流石に五箇山麓の一廓たるを首肯せしむるに足れりき。然れども停車場を出でゝ直ちに認めらるゝ所の、彼の精米場の煙突より立昇り居る石油發動機の煙の内に、稍々新空氣の此所に侵入し來れることを暗示しつゝあるに似たり。

□一言にして謂はゞ、落つきたる町也。曾て黄金時代を有せし爲にや、舊家の子孫を見るが如く、微祿するも擧動自から迫らざるを床しとなす。而して彼れ猶多少の資產を剩し、坐して零落を招かんも、奮起して家運の挽回を期するも一に此秋にあり。今は正に城端維新に際せるなり。

○

□家に主人あり、建物に大黑柱あり。一族能く主人の命に服從して和合し、建物能く大黑柱を中心

として調和せば、其所に安全は保たれ、其所に繁榮と進步とは伴ふ。地方自治の事亦此の如き而已。

□城端町寂びれて、昔日黄金時代の面影復た尋ぬること能はざるにせよ、保守的空氣のうちに自ら一道の生氣脈々として通へるを認めらるゝ所以のものは、自餘町村の如き不和合不一致の醜態なく、岡部長左衞門氏を一町の主人と仰ぎ大黑柱として信賴し居れるにあり。

□吾輩岡部氏に對しては一面の識あるに過ぎざるも、明治二十六年初めて生絹組合の設置さるゝや、氏は早くも擧げられて其組長たり。三十一年町長に就職し一旦退職したるも、更に復職して今日に至り、曾て摸範町長として知事の表彰する所となれる人物なるは之れを知る。

□氏の町役場にあるを見るに恰も自宅に在るが如く、吏員等も亦自宅に在らんよりは、設備善く整ふて居心地よき役場にあるを喜び、役場は一面に於て彼等の家庭なるが如き觀あり。之れ縣下二百七十の町村中、單り城端に見る所。公私混合と云はゞ言へ、和氣靄然、其の職を樂むは自治の運用洵に妙を得たるものと稱すべし。

□而して主要工產物たる絹織物の組合も、亦役場樓上に併置せられ、岡部氏たるもの階下にあれば

町長なり、階上にあれば組長なり。上がつたり下がつたりして、長左衞門は双方の長として活動す。

□城端絹の產額、三十八年度には十六萬二千圓に過ぎず。數年にして二十萬圓となり、三十萬圓となり、四十萬圓となり、四十四年には六十二萬圓に昇れり。曰く、是非共百萬圓に達せしむる希望なりと。而して產品の種類三十八年には六種に過ぎざりしも、九種となり十種となり、遂に二十種に垂んとし羽二重・絽・綾・縮緬其他殆んど有らざるなく好評既に內外に博す。

□知事の表彰文、岡部氏を評して、一意專心一町の福利公益を計るを天職となすと云ふ。併も吾輩は長左衞門の長所を認め、コセ〳〵したる干涉を試みずして、能く彼れを信任せる町民の長所を感ずるや大なり。同町々務が挽回の曙光を放ち得たるは、豈に啻に人に長たる長左衞門一人の力ならんや。

○

□城端と五箇山との關係は城端觀必須の付物なり。五箇山の廣大なる面積は、城端に取りて一個の土藏の如く物置の如く、同時に又自家の工場とも見做すことを得べし。但だ稱して寶藏と做すは

未し矣。

□五箇山に四個の出入口あり。曰く八尾、曰く井波、曰く城端、而して他の一は飛驒の白川とす。四門の內井波城端は兩要衝に當り、地便に倚りて五箇に對する權力を二分しつゝあり。

□五箇の天產は現在左まで豐富にあらず。山は多く荒されて木材の如きは、飛驒より出で來るものなれども、蠶・繭・和紙及び牛畜の產出あり。工產物は悉く兩町問屋の羈絆を脫すること能はず。活殺一に兩町商人の手に屬して、正に之れ俎上の魚なり。

□城端町が五箇山の甘汁を吸ふこと、幾許なるやは數字の明瞭を欠けども、山人の低廉なる勞力供給が、城端の富を涵すに於て、涓滴以上の効果あるを知るべし。

□然れども今日の山人は、往昔の値ひを辯ぜずして商人の謂ふが儘に左右せられる山人に非ず。却つて往々にして町民を利用し、俎上の魚も潑溂として庖丁の刄に從はざる場合あり、時世は何時までも山人の愚蒙を保存せしめざるなり。

□都會勞働者相手の高利貸は、一面に於て必要欠くべからざる恩惠者たると等しく、五箇山人に對しては仮令高利を以てせらるゝにせよ、何者も敢てし得ざる資金の融通を爲し居る城端、若くは

波井町民の誼も亦沒すべからず。

□五箇山の天產大ならざるも、樹を植ゆべく、家畜を飼ふべく、養蠶其他山地適當の工業をも興すべく、更に飛驒山の木材をも搬出すべし。之れを開發して一個の寶藏たらしむるには、充分の地積と相當の人口あり、其爲め先づ必要を感ずるは道路の改修となす。

□五箇山の問題は唯だ道路ある而已。併も久しく此の必要の起業を見ざるは、不幸にして五箇山の出入口が四にして三にあらざる爲とす。換言すれば白川口、八尾口の外一個の礪波口を有せずして、二個の礪波口を有するが故に、井波城端の競爭は郡費及び縣費の支出に厄介の事情あり。兩者互ひに控制して何れも其目的を達せざる所以なり。

□縣郡當局者が、五箇山の產業的所屬を兩町の何れか一方に偏せしむるを辭せず。一大勇斷を決行し得ば兎も角も、然らざる限りは當分目覺しき發展を期すべからず。「先祖代々傳はる五呂八茶碗に二三杯呑めば聲もよく立ちます」との麥屋節と共に、五箇山中、舊に依りて日月の長きものあらむ也。

○

□產業以外に五箇山を開發するの方法あり。庄川上流の風景を利用すること之れなり。五箇山下兩町民何ぞ好資本を贖ふするや、中越鐵道の長爪何ぞ好下物に伸びざるや。

□吾輩未だ實查の機會を得ざるも、屢々五箇山通の談を聽きて、其風光歷々睹るが如し。乃ち下梨より輕舟に棹して流れを下れば、斷岸絕壁の狀、樹木の狀岩石の狀、天下の奇觀を極め、殊に秋季紅葉の交に於ては、滿山の紅燃ゆるが如く深潭の靑、激湍の白と相映じ、自然美茲に盡くと稱す。

□嵐山上流保津川下りの奇景は人口に膾炙す。庄川上流の舟夫が舟を五箇山の激流に操つるは、恐らく夫れ以上にして、而して風景も亦彼れに讓るものに非ずといふ。唯だ陰れたる五箇山は、此の自然美を世人に知らしめざる而已。之れを知らしむれば高名天下に鳴ること受合ひなり。

□況して五箇山は我邦の異域なり。更に少しく進めば家長制度の異風を存ずる白川村のあるあり。畫家も、史家も、人類學者も、社會學者も、好山家も乃至ひら見物人も、物質文明の破壞力を逞ふせる今日に於て、五箇山の存在に隨喜の涙莫かるべからず。

□交通の不便を言ふ勿れ。鐵道は城端に達せり。城端より下梨までの近距離は、人車用ふるべから

ざる所、山駕籠を用意せば、之れのみにても既に探勝者の興味を發せしむるの値ひあるべきなり。

□かくて舟にて青島に下り、井波町に出で、人車福野町に通ずれば、五箇山の觀光客は同時に礪波三町を見るを得べく、三町は亦た其物産たる、城端絹・井波紬・彫刻・漆器・蠶糸・福野縞の眞値を天下に紹介するの便を得べし。

□而して其好機會は眼前に來れり、聯合共進會之れなり。共進會が恰も庄川上流紅葉の秋に於て、開かるゝこそ勿怪の倖ひと云ふべけれ。猶ほ此計畫は久しく道路問題にて、睨合へる城端井波提携の一策ともなるべきなり。

□招客の方法は、共進會場附近に於て活動寫眞にて庄川下りの實景を映寫し、遊志を勃發せしむるも可也。五箇山風景の繪畫冊子及び案内記類を頒布するも可也。

□彼の如き好資本を有して之れを開發し得ざるの道理無し。城端須らく起つべし、井波宜しく起つべし、福野起つべし、中越鐵道亦手に唾して起つを要す。而かも協賛會に於ては素より相當の助力を與ふるの義務あり。

□井波に風神堂、又は吹かぬ堂と稱するものあり。歴史は實に風を以て始まる、日本海沿岸を通過

する低氣壓が、此の八乙女山下の高臺市街に向つて猛威を揮ふの狀想ふべし、故に井波は風より見るの必要あり。

□往昔泰澄大師の此地を過ぐるや、土民等風害に苦めることを訴へて已まず。大師即ち山頂に風神堂を鎭し、其麓に止觀寺を建つ。町基茲に成れりと傳ふ。然れども大師豈に能く自然を制し得んや。風は相變らず吹猛りて風神堂は、木葉の如く谷底深く吹飛ばされたり。

□後年僧綽如來錫して說教の最中、又々大風吹起り、樹木を拔き、家を倒す。土民更に鎭風を綽如上人に乞ふて止まず、即ち風神堂の跡に鷄塚を築く、之れ例のフカン堂なり。

□風は毎日ひにち吹通すものに非ず。泰澄建堂後一時風難を絶てるが爲めに、布教上一大効果を奏し、綽如築堂後も又「風害立どころに除かれ、土民其高德に感じて宗門に歸し、引いて加越能悉く其門徒となれり」となり。

□昔は諸葛孔明七星壇に風を祈りて神通力を現はし、之れは八乙女山頂に風を收めて宗法の不思議を示せり。英雄能く風を弄し來りて、己れの事業を成功す。猾なる哉、井波の賑盛は佛教と寺院となるも、其の教勢の張れるは洵に風のお蔭なりし也。

□然れども自然の大作用は、何時迄も術策の利き目あるものに非ず。風は又颯々として吹き荒み、風神堂再び雷火の爲めに燒失せり。記錄の明かなるもの而已を數ふるも、寶曆九年には井波全町は火かれ、同十二年の大火は約七百戸を空しくして瑞泉寺をも火き、弘化元年には三百餘戸を失へり。其他近年に於ては明治十二年の瑞泉寺燒けを別とし、三十一年には二百餘戸の罹災あり。若し夫れ火災を伴はざる大風に至つては枚擧し得ざる也。

□風の井波町に交渉すること既に此の如しとせば、風が井波住民の氣質に交渉すること少しとせざるなり。八乙女山のフカン堂は土地の歷史を說明し、氣象を說明し、併せて又井波住民を解かんとする一個の鍵なり。

○

□江戸ッ子の苦味走れる面相は、疾風砂塵を飛ばすに由るものにして、宵越しの錢を使はざる氣性は、大火の多きに基づくとなす者あり。大火の多きも亦畢竟風の多き所以にして、之れ則ち東京人士を風より說明せんとするに外ならず。

□武藏野の平原と、礪波の山間とは其趣自ら異ならざるを得ずと雖も、井波人士が其氣質に風の淘

汰を受け、之れが爲めに、猛氣と孤獨主義を助長せしめし嫌ひ莫らずや。

□曾て聞く富山に火災あらば、各戸皆急速避難の策を講じ、馳せて消防に赴くの意あること無しと。災害は人をして個人主義を發揮せしむ。井波に一致共同の美蹟を求め難きは、之れを人の罪に歸するよりも、寧ろ自然力の結果と做すべき也。

□井波は戸口の大に於て、東礪各町村の首位に居り、產業も亦絹織物・絹綿交織物・彫刻物・漆器等の諸工產物を有し、蠶種に至りては夙に名聲を放てるにも拘はらず、城端の如く落つきたる趣を欠き、町風雜駁にして住人の氣質には、何となくイラ〳〵したる風あり、平和を望まむより寧ろ波瀾を喜ぶものに似たり。

□人心焦だちて和氣靄々の趣きに乏し、於是乎快を他方面に取らざる可らず。遊廓の盛んなる所以なしとせんや。

□三十七八年戰役の頃、官人の井波に放蕩する者最も多く、高等官一名放蕩艦の稱あり。屢々井波灣に敵艦を襲擊し、或は捕虜となり、或は沈沒し、醜聲却つて戰報よりも高かりしことあり。一体に遊び易き土地なるを知るべし。

□無類の惡港なる越後の新潟が、日本第一の良港なるかの如く持嘶さるゝものは、新潟美人の引力に由る。遊廓も亦土地繁昌の一機關なりと雖も、彼れは全國の粹客を迎へて、黄金を雨ふらせるに反して、之れは己れの黄金を自家の便所に投ずるに等しく、未だ以て感心したる事にはあらざるなり。

□近時舊郡役所跡に公園の設置あるも其殺風景なる、到底酒池肉林の快を移さしむるに足らず。其目的は可なりと雖も、設備の及ばざるを惜む。縱し良公園を得るにせよ、依りて以て住民の趣味を向上せしめ得るや否やは保證の限りにあらず。

○

□井波に蠶種あり、紬あり、彫刻あり、落雁あり。漆器あり。而かも是等の物産に依りて井波の名を知らしむること、未だ太子傳に依りて、僻陬小邑の名を八乙女山の絶頂よりも高からしめたるに及ばざるや遠く、井波の太子傳が、太子傳の井波か、之れを區別するは至難なり。

□太子堂は明治十二年に燒失し、今ま再建の募財中なり。之れ井波別院の爲にも井波町の爲にも、何は扨措き急務中の急務に屬する事業とす。何となれは太子堂は民衆吸引の唯一の機關にして、

同時に又金儲けの上に、無くてならざる重要の要具なればなり。

□古來太子堂に珍藏されつゝある聖德太子自刻二歳の木像、及び畫聖巨勢金岡筆聖德太子畫傳は、往昔瑞泉寺開基綽如上人が雄辯の故に依りて宮中に引かれ、後小松天皇の御前講を試みたる、彼れが稀代の才氣の大報酬にして、謂はゞ上人が此山邑に金の成る木を與へたるも同然なり。

□人若し若干獻金を爲して太子像の拜觀を申入るゝときは、寺僧恭しく緣起を高唱し聽かせ、然る後佛壇の扉を靜かに左右へ開き分るところ、金光燦然たる帷幕先づ難有連の双眼を眩じ來りて崇敬の念湧くが如し。寺僧乃ち何處かの紐を引張るよと見る間に、聖帷はカラクリ仕掛けの如く自からスル〳〵と卷き揚げられ、其處に慈眼豊頰宛ら地藏菩薩然たる半裸の小像現はる。稱名念佛の聲拜觀者の腹より發し、隨喜の涙潸々として雨に似たり。

□カラクリの如き金ピカの聖帳に驚喜したる拜觀者は、退いて他に問ふに及んで、彼の太子像はホンモノに非ざりしと知り、盍んぞ二度吃驚を爲さゞらんや。否な時として井波の太子像は、全國各地に出開帳を許さると云ふに至りては、不思議といふも愚かなり。然れども敢て不思議といふ勿れ。ゴルゴタにて發掘されし耶蘇磔殺の十字架の木片と稱するもの、世界各地に珍藏せられ、

之れを集むるときは幾十幾百の大十字架が作らるべしと聞くにあらずや。古今東西宗教の事皆な此の如きか。

○

□地理上より見たる井波は、礪波僻陬の山邑に過ぎず。氣象上より見たる井波は、風伯猛威を揮ふて祝融の災害多く、爲めに平靜の趣きを欠ける土地なり。唯だ怪む、斯かる地方が工藝美術の府として一大氣焰を揚げ得たることを。

□我輩初めて井波に入るや、地方の人某君「先づ御覽に入るべきものは彫刻物です」と言ひ、引いて一工場に抵る。置像あり、掛額あり、欄間あり、意匠の高雅と技術の精巧とを以て勝れ、見る者をして恍惚たらしむ。

□井波の彫刻美術は、源を瑞泉寺建立の時に發す。綽如上人の京都より伴ひ來れる、幾多匠工中に七左衞門なるものあり、留つて此地に住す。其裔田村與八郎は妙技匹儔なく高名天下に轟き、北陸諸州の彫刻師にして、田村の門に入らざるを恥としたり。文祿年間加州公の建築を金澤に起すや、擧げられて主附となり、次で京都東本願寺の建築に際しては、聘せられて彫刻棟梁となり、

遂に彫刻術の本場は越中井波なりとの榮譽を博せしむるに至れり。

□於是乎佛光寺本堂、知恩院本堂を始めとして、京都伽藍の大部分は殆んど井波匠人の手を籍らざるものなく、今日越中の赤毛布連が京都に遊びて結構の壯麗に、打魂消るところの建造物は其實越中よりの逆輸入に係れるなりき。

□田村氏の多藝なる、彫刻より進んで漆器に及び、舊藩時代に於て井波漆器が相當の勢力を占めたりしことは、屢々藩公の命を蒙つて、青貝細工の硯箱其他の器具を調進したるに依りて知るべし。

□藍より出でゝ藍より青し。曾て京都より出でて京都を壓倒し、却つて同地へ逆輸入を試みたるもの、彫刻の外に猶ほ乾菓有り。「名にしおふ八乙女山のやまず來て繰返しつゝ見るやをだ卷」井波の糸卷落雁は夙に天下に鳴り、又た京都の宮廷に納められし御所落雁は、東山天皇の御製「白山の雪より高き菓子の名は四方の千里の落つる雁金」と共に知られたり。而して之れ井波の五郎兵衞が、正保年間藩公より製菓の命を受けて考案せるもの、一に稱して長生殿といふ。

□五郎兵衞の祖治部は蓮如上人に隨ふて來國し、瑞泉寺三世蓮乘に臣仕したるものにして、治部の先は則ち本朝製菓の濫觴たる板倉治部其人なり。知るべし、井波の工藝美術は瑞泉寺有つて始め

て興れるものにして、皆之れ綽如上人の餘澤に出づ、復た怪むを須ゐざるなり。

○

□東礪波郡統計表を一瞥するに、工産物の種類に富むこと井波の右に出づるもの少なく、彫刻・漆器・菓子は既に之を言へり。織物としては絹織あり、交織あり、羽二重あり、蠶卵紙は縣内の大産地として知られ、其他双物あり、革製品あり、簽あり、挽物・桶類・車輛・葺板・履物・檜笠・疊表・蠟燭・合羽・提灯など應接に遑あらず。

□井波人士は天性頗る器用にして、一体に工藝的天才を有せるが故に、將來大に此方面に於て發展し、工藝美術の府たる昔日の榮譽を挽回するの覺悟莫る可らず。併も其發展の障碍たるものは、則ち人心の不一致なり。個人としての井波人士は技能を有し、猛氣を有するにも拘らず、公人としての彼等は餘りに自我的に過ぎたり。

□此頃鐵道計畫あり、其一端は井波を經て庄川沿岸の木材土場たる青島村に抵らんとするもの、之れ井波に取りて福音には相違なしと雖も、交通機關を利用して産業的發展を爲さんとせば、宜しく先づイガミ合ひを廢せざる可らず。

□井波警察分署長山崎氏の談に曰く、井波より僅々里餘にして湯谷溫泉あり。山紫水明眞に穫難き清境となす。而して之れに浴するものは附近農村の下等客のみ、未だ中流以上の顧眄を經ず、道路担々井波より人力車を通ずるに易ければ、同溫泉を開發し惹いて當町の繁榮を策するは、當さに地方人士の爲さゞる可らざる所なり。然れども未だ斯かる有志を認めずと。

□井波町の舊跡としても、亦旅客の杖を引かしむるものに乏しからず。太子像によりて知らるゝ瑞泉寺は措いて言はず、八乙女山上には不吹堂あり、同山麓には綽如上人の塚あり、綽如の乘用せし馬蹄によりて穿たれしてふ有名なる臼浪水あり、瑞泉寺十一代の住職浪化上人が芭蕉翁の頭髪を埋めて、記念の俳庵を結びたる黑髪庵あり、皆な以て紹介すべし。然るに黑髪庵の如きは、現に瓦落多道具の置納屋となりて、其所在を尋ぬるさへ容易ならざらんとす。不吹堂、綽如塚は一覽の機會を得ずと雖も、臼浪水の保存も亦甚だ不完全の嫌ひあり。町内の舊跡にして此の如し、盍んぞ能く里餘の先にある溫泉場に及ばむや。又曷んぞ五箇山探勝客の招致に及ばむや。發展の材料たる産業は之れあり、繁榮の資本たる名所舊跡は之れあり、唯だ一の欠くるものに就て、精神的工夫一番を要す。

（大正元年十月稿）

戰國時代の越中

○

旅客若し北陸線に據りて、米原より直江津に出づるものあらんか、汽車の金澤驛を發して北走すること約三十分程にして津幡驛あり。線路是れより稍々東に向ふて、雜木林に包まれたる山間を攀ぢ、大小二個の隧道を潛らんとす。其短きは九十九折と稱し、長きは即ち三、一〇三呎の倶利伽羅隧道にして、其身が今ま加賀越中の國境なる礪波山古戰場を過ぎつゝあるに心付くべし。逸名氏の詩に曰く、般若野は曠濶礪波山は莽蒼、此地我れ能く記す。壽永の古戰場、木曾殿何者ぞ、一擧忽ち鷹揚、倣ひ得たり田單の智、天を燒く萬炬の光、平族紈袴の子、鉄衣鴛鴦を夢む、何ぞ支へん懸河の勢、盡鏖哀傷に堪へたり、暗谷白骨を埋め、水聲空しく悲壯、鮮血林木を染め、霜氣夕陽殷なり、惆悵として偏へに涙を濺ぎ、古を弔ひ漫りに徜徉す、唯見る芻牧過ぎ、牛を叱して野塘を度るをと、感慨叙し得て盡せり。山麓に降りて初めて越中の小驛に達す。地名を石動と呼び、旭將軍義

仲の祈願文、武田信玄、佐々成政等の書翰を所藏せる、埴生八幡社の在る處なり。此より軌道は坦々たる肥沃の平野に向つて走らむ。見渡す限り美田の遙かに展開するは、即ち庄川の冲積したる礪波平にして、鷄犬の聲長閑に離落の間に聞え、太平の象、羈旅の情を慰むるに餘りあれども、奚んぞ知らむ、皆是れ兵共の夢の跡、昔は鐵騎東西に馳違ひて、矢叫びの響天地を撼かせし、慘憺たる修羅の巷にて有りつらんとは。右方迥かに指す東方一帶の高臺は、上杉謙信の父なる、梟雄長尾爲景戰死の地と傳へらるゝ栴檀野にして、般若野は曠濶、礪波山は莽蒼と詩人の謳へる大戰場般若野村は、少しく其前に當れり。而して取次に迎へたる福岡驛の附近には大瀧村ありて、戰國時代に於ける越中の巨頭、飛ぶ鳥をも墜さん許りの聲望ありし神保氏の木舟城址を遺せり。福岡より五哩にして高岡あり。鳳凰鳴く高岡の麗句を引いて、開府こゝに三百年の沿革ある今日の商工市邑が、肥前樣、若くは大納言殿の盛名匿れもなくして、其の一擧一動諸侯の注目を惹ける偉人、前田利長の居城なりしことは言はずもがな。此偉人の長へに眠る繁久寺外一簇の杉林を目送すれば、間もなく蜿蜒長蛇の如き丘陵の車窓に迫り來るを看む。是れぞ豊臣秀吉が、白馬金鞍、親から越中の地を履んで軍容の威を示せしに因み、今は黑川村の水蜜桃「太閤」の名に古へを偲ぶ太閤山と知るべし。而

して神通河畔に位置せる富山は、當線の主要驛にして、其舊城は水越、神保の兩將を經て、秀吉眼上の瘤たりし、怪雄佐々內藏助成政の哀史を語るところならずや。富山より更に東すれば、甲越の兩明星が、金山の富に垂涎して、引張り蛸の吸引力ありし松倉城址の松倉村あり。或は又、上杉景勝の股肱竹股朝網等の十三將が、勇士の面目を保たんが爲に、枕を列べて腹搖切り、悲壯の最期を遂げたる魚津城の在りし魚津町ありて、此地の奇景、蜃氣樓は謙信の槊を横へて觀望せしものと口碑に傳へらる。「武士の鎧の袖を片しきて枕に近き初雁の聲」なる國風は「魚津城にて初雁を聞き」と題し、英雄閑日月ある不識庵の吟懷を行れるものにてありけり。斯く說き來らば、猶ほ列擧すべきもの二三にして足らず、四五にして猶足らず。遂に越後の國界宮崎、境に至るまで、殆んど往くとして古城址ならざるはなく、見るとして古戰場ならざるは莫きなり。されば少しく史籍を諳んずるものにして、越中路を通過せば、宛ら極彩色したる合戰圖の繪卷物を繰展ぶるに同しく、千萬無量の追懷に己れを忘れ、當年の活劇を眼前に彷彿たらしむるや必せり。抑も越中歷史は、連續した る長篇の戰記にして、其戰記の最も華やかに輝き、光彩陸離たるものあるは言ふ迄もなく戰國時代に在り。鄉土人文史に於ける鄉人活動の高調期ともいふべき戰國時代は、宛ら信飛二州の群嶺の間

に聳然として高秀せる立山が、鄉土地文を代表せるにも似て、試みに此部分を削除したんには、越中史は恐らく平坦無味のものとなり畢り、肝腎なるヤマを失ひて、凡庸作家の駄小說と一般、唯徒らに讀者の倦怠を招くの外莫らんとす。顧ふに戰國時代は、日本に於ける民族的精力が欝勃として內に充滿し、軈て黃河の決したるが如く、火山の破れたるが如き勢ひを呈せし、活潑々地の世紀にして、八道の山河も亦群雄衆將と共に共鳴震動せるの狀は、正に現下世界時局に喩ふべきにあらざるか。全歐の禍亂は我が戰國を大にせしものにして、戰國は全歐の禍亂を縮圖したるものといふべきが故に、彼此れ對照し來れば興味彌々深きを覺ゆ。況んや越中は當年直接龍拏虎搏の舞臺たりしのみならず、一面に於て又諸雄對抗の中間地として、頗る緊要の關係を保ち、外交上に將た戰術上に資料を提供すること乏しからざるべきを信ず。今や我軍青島及び南洋に征獨の目的を達して、戰捷國の光榮を荷ふと雖も、英露佛の友國は尙ほ敵國獨墺と干戈を交ゆること闌にして、我等も依然軍國の民たり。戰國に於ける英雄の覇圖と祖先の活動に顧みて、我等は須らく滿身の精力を發揮し、盟つて大正國民の使命を完うすべきなり。

○

舊臘紐育經由歐洲電報は、土耳古皇帝と回々教僧侶二十八名の連署の下に、宗教戰爭の宣言を發表したりとのことを報ずるや。我國の智識階級を擧げて頗る事態を重視し、多數の同教徒を有せる露國及び佛英二國は、恐らく煩累を免れざるべしと觀察したり。然れども該宣言の結果、如何なる反響を與へたるかに就ては、爾後杳として何等の續報をも受取らざるより推せば、右は又例の揑造に出でしものならんも知るべからず。去り乍ら土耳古政府は、露佛英の諸國に對して宣戰を布告すると同時に、回々教を信奉する自國々民に敎ふるに、宗敵の討つべき所以を以つてし、大に宗教戰爭としての威力を發揮せんことを期待したるに見るも、强ち虛報として斥くべからざるは勿論にして、其反響の著しきもの莫かりしは畢竟今日の回教民に、最早往昔の好戰的狂熱を缺乏したる爲めと做すの失當にあらざるを信ず。之に就て際なく聯想せらるゝは、戰國時代の眞宗佛徒の事にして、今日に於てこそ北陸佛教徒間に殺伐の氣風を索むるは、恰も女性に睾丸を發見せんとするに等しと雖も、當年を回顧すれば宛然として彼回教徒が隻手にコーラン、隻手に劍の大活劇を演ぜしに彷彿たるものあり。元來北陸は同教主力の存ぜし處にして、越中の火宅僧が武威の赫々たりしことは、加賀能登及び越前に讓らず。彼等の勢力は深く人心の地盤に喰込み、牢乎として拔き易からざりし

を以て、信長も之に苦められ、信玄も之を憚り、謙信も亦之が爲に大志を伸ぶること能はざりき。乞ふ順序として戰國越中の中心たりし教軍の鐵火的事蹟より概觀せむ。北陸眞宗の眞勢力は、文明年間本願寺門主中興の開祖と呼ばるゝ、傑僧蓮如の越前吉崎に道場を開きて布教に着手せしに始り、越前一國の教化は固よりいふに及ばず、進んで加賀能登兩國を風靡し、越中も亦尋いで山科本願寺の下風に立つことゝなり、蓮如巡錫の際は、群集道を壓して死者を出すこと少からざりき。而して蓮如越中布教の根據地となれるは井波の瑞泉寺にして、蓮如上人法話には「文明五年かの年、吉崎の御坊より出たまひて越中國礪波蟬の庄の內、井波村瑞泉寺の坊まで御下向なりけるに、此國は最早當流門人擴まり、此時はや當宗繁昌のことにて、御下向とて人々數多く群集すること、限り無くして、毎日人多く壓されて五人十人死せること侍る」と書せり。蓋し該寺は、過ぎにし元中年間本願寺五世の門主綽如が、越中巡錫の時に創建せしものに繫り、北國眞宗寺院の嚆矢を以て目せられしことは、綽如以降瑞泉寺五代賢心手記の「賢心物語」に「當流に於て北國の開山は當寺なりと、蓮如上人折々仰せられ候となり」とあるに由りて明かなり。斯くして築き上げられし瑞泉寺が、越中僧軍の本營となり、禍亂の發動地となれる所以は如何。回教の好戰的性質を帶びたるは、其教

祖マホメットの性格に基因せること多しと雖も、北陸佛徒の殺伐は必ずしも、其布教者たる綽如蓮如の感化に歸すべからず。彼等をして血の洗禮を受けしめ、軈て宗教戰爭の大活劇を演ぜしめたるものは、主として戰國時代の包圍關係と、勇猛無比なる北方人種本來の氣質に出でたりと做すを至當とせむ。

○

順序として茲に先づ北陸僧兵の如何なるものなりしかを示すべき二三の小話を擧げて、後章事實の因つて來る所を窺知するに便ならしめんと欲す。安元々年近藤師高加賀の國司に任ぜられ、其弟近藤師經目代として來り蒞むや、翌年事を以て能美郡の涌泉寺を燒く。諸寺激怒、衆徒白山の神輿を擁し、入洛して闕に迫る。朝廷爲に師高を解官して尾張の井田に徙し、師經を備後に流して漸く騷擾を鎭定することを得たり。次で正中二年、白山、金劍の兩衆從、神會に際して爭鬪し、双方死するもの數百人、更に降つては建武二年、北越の境石動山の衆徒、國司中院定淸の爲に十四坊の全山を盡し、足利氏の賊兵を防ぎて鏖滅せしことあり。更に又應安四年、石動山の衆徒二千心を南朝に傾け、桃井直常に黨して足利義將を射水の守山に攻め、京師に敗走せしめたることあり。其宗派

の如何に關せず、北陸の浮屠が勇猛不屈の氣慨を有せしことは凡そ此の如し。後年眞宗各寺が、回々教徒若くは十字軍を起せし基督教徒にも比すべき驚天動地の活動を爲したるものは、豈夫れ偶然ならんや。髮を削りて佛門に入りたる上杉謙信が盛んに干戈を動かし、入道したる武田信玄が死に至る迄殺戮に從ひ、又伊勢新九郎の法体せし早條早雲が稀代の戰將なりし此時代に於て、北陸の火宅僧は之を一面より見れば、時勢の產み出せし群雄と敢て異るところなく、但だ彼の六雄八將は個人として時代の壇上に立ちたるに反し、僧徒軍は某寺院の名稱の下に、或は又北陸の衆徒なる大集團の下に、一個の法人資格を具へたる英雄とも見做すべきか。抑も此團体的英雄の活動は因を眞宗統派の葛藤に生ぜしものにして、加賀の國司富樫政親は專修寺派に左袒し、其族富樫泰高は本願寺派を援けたる結果、文明六年兩派遂に兵力を以て相見え、專修寺派は敗れて政親戰死し、加越能三州悉く本願寺派の統一する所となれり。時に越中四郡の代官松原信次は將軍義尙の命を奉じ、銳兵數千を率ゐて僧軍を加賀に攻めて利あらず。而して礪波の土山に在る越中の勝興寺は、加賀二股の本泉寺と聯絡を通じて本願寺門派と相應じ、此機會に乘じ礪波半郡を完全に其手中に收むることを得たり。謂ふまでもなく越中の眞宗は、蓮如との深甚なる緣故を有し、瑞泉寺は蓮如の二男蓮乘

を其の三代の住職となせるのみならず、勝興寺も亦蓮乘と密着の關係を保ちしが故に、金澤に本願寺の勢力を張るまでは、瑞泉寺は陰然として北陸の本山ともいふべき地位を占め居たるものなり。之を思へば兩派衝突の事變は、加賀を中心として發生したりと雖も、國司富樫氏の全力を傾けたるにも拘らず、能く本願寺門派の統一を容易ならしめたるは、越中の後援に負ふ所多く、越中國にして若し高田派の地盤ならんには、局面は果して如何なる展開を見たらんも未だ知るべからず。而して本願寺門派の統一莫からんには、或は武田信玄との提携もなく、謙信の西上に便ならしめ、悉いて織田氏の覇業に障碍を與へたること無しとせんや。當年に於ける瑞泉寺の力も、亦豪なりしと謂はざるべからず。

○

當時越中の佛徒は、東に長尾氏との軍事的交渉あり、西に三州聯合僧軍に加りて、越前朝倉氏との繫爭あり。其關係頗る複雜を極めて、常に兵馬倥偬の裡に處し、三面六臂の働きを爲せるは驚嘆に堪へざる所なり。而して東方長尾氏との交渉は、單に越後軍の入寇を邀擊するに留まり、謂はゞ消極的行動に過ぎざりしも、西方朝倉氏との繫爭は主として攻勢を取り、其積極的活動は眞に駭目に

値ひするものあり。史家或は論じて曰く、若し越前に朝倉氏の重鎭なく、仮令之あるも、能く本願寺門派の鋭鉾を峻拒するの力莫かりせば、聯合僧軍は進んで山科本願寺を擁し、片手にコーランを翳し、片手に利劍を振へる回教徒をして猛威を逞せしめ、遂に幾旬の中原を殉へ、足利氏に代りて天下に號令したらんも未だ知るべからずと。此の如きは強ち一場の空想として嗤笑するを許さゞるなり。乞ふ先づ筆を西方の葛藤に着け、然る後轉じて東方の關係に移らんとす。曩きに越賀の間に眞宗教派の軋轢を生ずるや、越前の朝倉貞景は富樫政親の專修寺派を援けて利あらず。本願寺門派は爾來之を含み、統一的事業一段落を告ぐると共に加賀、能登、越中の僧軍三十萬を發し、遽に越前に迫る。時に永正三年七月、朝倉氏の軍善く戰ひ、東軍敗れて退きしも、翌年重ねて襲擊を試み、又其効を奏せざりき。此役聯合軍參加の寺院中に、越中安養寺の名あり。土山の勝興寺は此時安養寺村に在りしを以て、安養寺は即ち勝興寺の通稱ならんと言ふものあり。越中軍の代表的寺院として、特記せられしよりせば夫れ或は然らむ。既にして同五年足利將軍調停の勞を執りて、朝倉氏と北陸本願寺とを和せしめたる結果、爾後久しく兵火の慘を見ざりき。然るに外爭稍々閑にして內訌生じ易く、享祿二年の春本願寺十世の門主證如の臣、下間筑前及其弟民部少輔等山科本願寺より來り

て加賀に入り頗る横恣の處爲あり。不平闘國に勃發して、下間派と非下間派との間に劍戟を用ふることゝなり、寺院多く兵燹に罹りて滅び、加賀の國司富樫泰高も亦越前に逐はれて朝倉氏に賴る。於是乎不平組は越前黨と化し、再び越前加賀の對抗を見るに至れるは奇と謂ふべし。斯くて南越八千の軍は、朝倉宗滴を將として大に加賀に戰ひたるも、畠山、河合、洲崎等の勇僧猛士戰死するもの多く、敗兵四散し宗滴は越前に退く。此際越中瑞泉寺の態度に關しては、記錄明確を缺くと雖も下間は門主の派遣せし者なるが故に、系統正しき瑞泉寺は、漫りに感情に走らず、不平組の妄動に與せずして、冷靜自ら持せるに似たり。於是下間筑前勝に乘じて僧軍を整へ、將に越前を侵さんとするに際し、恰も將軍義昭越前に在り。諭して朝倉氏の女を山科門主顯如の子、教如に配することを約せしめ、宿怨茲に全く散じ後年織田、朝倉兩氏の釁を釀すや、本願寺は却つて淺倉淺井二氏と結び、猶ほ一面に甲斐の武田信玄と提携し、信長を牽制したり。故に朝倉氏亡びて越前の織田氏に歸したるは、北陸僧軍の西長の一頓挫にして、信玄の死は更に第二の打擊とはなれり。然れども信長弑害に遭ひて怨敵忽ち空しく、前田氏の北陸に鎭たる頃は、彼等は漸く宗教家の眞面目に立戻り、血腥き戰國時代の慘劇も亦同時に其幕を閉ぢられしなり。

○

曩に本願寺門派の釁を高田派と交へ、北陸の宗教統一に忙殺せられつゝありしとき、越中は管領畠山政長の領分に屬せしが、明應二年、長政の戰死を機として、能登の畠山義統、密かに之を侵略せんとの野心あり。越中の目代椎名守氏等、義統に宿怨あるを以て、能登の畠山義統、密かに之を侵略せ於是同三年顯定來りて越中を取り、其弟房義を守護に任ず。時に關左八州並に奥羽の地は、悉く顯定の手に歸し、上杉氏の威望北方に隆々たるものあり。既にして房義は其臣長尾爲景の亡す所となり、顯定大兵を率ゐ來りて仇を報ぜんとせしも、却つて越後に戰死し、之より爲景威を越中に振ひ、越中の士民擧げて爲景に抗す。就中瑞泉寺によりて代表せられたる眞宗僧軍は、大永年間、爲景が領内の一向宗を禁壓せる故を以て、爲景の凶暴を惡くこと最も甚しく、加能兩國の各寺院が打續く戰鬪の爲に氣力の稍々疲憊せる嫌ひありしに似ず、徐ろに兵力を養ひ、嚴然として八乙女山麓に雄視し、機會だにあらば彼の井波名物の疾風狂嵐を捲き起し、驚天動地の活劇を演出せんものをと、鳴りを靜めて時期を待てり。斯くて天文十五年(或は曰く十四年、或は曰く十一年、或は曰く七年)長尾爲景、宇佐美定行を將とし、自ら來りて越中を征定せんとす。新川郡松倉城先づ陷り、增山城、

放生津城又相次で落ち、婦負及び新川の衆、風を望んで越後軍に降るもの多く、爲景の兵威大に振ひ、恰も往昔木曾軍入國の際に於けるが如きものあり。脾肉の嘆に堪へざりし越中僧軍、焉んぞ默過するを得んや。井波の瑞泉寺、安養寺村の勝興寺、中目村の得成寺等、礪波射水の宗徒を驅り、越中加賀の豪族も亦八千の兵を整へて一齊に起ち、礪波梅檀野に戰うて奇捷を博し爲景遂に戰死す。本朝通鑑に之を叙して曰く、爲景越中の釋賊を擊つ、賊謀りて陷穽を設け、且つ爲景を欺いて曰く、我輩麾下に屬し公を導きて加州に入らんと、爲景之を信じて陷穽に死すと。北越軍談の記す所に曰く、爲景は魚津の板屋刑部、放生津の江波參河守、及び加州の賊將坪坂伯耆守等の勸めに依て、急に加州へ發するの處に、越中の安養寺、瑞泉寺等、板屋、坪坂を賺して內應させ、射水高岡邊より礪波郡の海濱道なる鬱蒼の地に陷馬坑を設けたるに、爲景是に陷ち同月二十四日梅檀野にて苦死すと。諸本各々符合せざるも、爲景の戰死を肯定せるは即ち一なり。此の如くにして瑞泉寺黨は、首尾よく年來の宗敵にして、且つ顯定房義を殺したる道義の仇たる爲景を滅したりと雖も、之より新たに勁敵上杉謙信との對抗を生じて、越中の戰國時代史に愈々脂を乘らしむるに至れり。懷ふ昔本願寺門主綽如千里の騏背に騎して井波に入るや、馬蹄の穿つ處忽焉として靈泉を湧出す。曰浪水即

ち之にして、瑞泉の寺名亦此に基くと。何ぞ圖らむ偉僧馬蹄の水は、他日澎湃として地を捲く鮮血の川となり、漂杵の慘を呈せしめんとは。

○

長尾爲景の梅檀野戰死は、花と咲く越中戰國時代の興味ある出來事を、喚び起すところの伏線にして、之あるが爲に後年に於ける上杉謙信の猛烈なる復讐的侵入を有意義のものたらしむれども、爲景の戰死を否定せば、自ら越中戰史の聯絡を失はざるを得ず。梅檀野の古塚、疑問を包みて風雨茲に幾百年、恨みは和田川の流れと共に長からざるを得んや。傳へいふ爲景の敗死するや、長尾氏の臣照田某、長子晴景の暗庸を利し之を擁立して自餘の諸弟を殺さんとせし爲、謙信身を推くに所なく、近臣數輩と共に、微服して北陸及び東山の諸國を巡歷し他日の謀を爲せりと。越中の口碑傳說にも、亦謙信微行中に關するもの少しとせざるなり。是等は必ずしも信憑するに足らずと雖も、其事件の頗る劇趣を帶びたるは、脚本となして優に太閤記以上の價値あるべきを信ず。長尾爲景梅檀野の一條が、越中史上斯程に興味あり且重要の關係を有せるにも拘らず、先年富山縣の事業として編纂せられたる「越中史料」は全然之を抹殺し去れり。其然る所以は異說最も多くして、彼此互

ひに一致を欠き、眞相を穿つの至難なるものありたればなり。否な鄉土史の編纂に際して幾多の異說に逢着するは、啻に此一節のみにあらず、隨所殆んど矛盾と撞着とを見ざることなけれども、越中史料が特に長尾爲景を梅檀野に於ける、不名譽の敗死より救ひたる所以のものは「上杉謙信公年表」の爲めなりと斷言するを憚らず。乞ふ少しく上杉謙信公年表の何物なるかに就て說明するところあらむ。該書は上杉家の編輯を主掌しつゝある、伊佐早謙氏の編纂に繫り、伊佐早氏は前田家に於ける近藤磐雄氏の如き地位に立ち、上杉家に關する記錄に精通すること他に及ぶもの無きを以て、其記述せる所には、信用を措かざる可らざる理由ありたればなり。而して該年表には、天文五年の條に於て下の如くに書せり。「九月三日、爲景旗及び文書所領以下を嫡男晴景に讓る。十二月二十四日、爲景病死す、林泉寺に葬る。法名大龍寺殿絞竹庵道亡沙彌」と。而して猶ほ其例言に於て、謙信公の父長尾爲景の越中戰死は、無稽の最も大なるものとし、讀者に警告を加へ居れり。嗚呼果して然るか、果して然るか、我輩の疑團容易に散ずること能はず。仍りて或は梅檀野に赴きて探査を試み、或は同好者の意見を敲きたる結果、今や聊か管見無きにしもあらざるなり。

○

長尾爲景、及び上杉謙信に關する史籍は、錯雜紛亂、其眞相を捕捉するの容易ならざるものあり。往年上杉家の編輯伊佐早氏、特に越中に來りて史籍の踏査を爲し、梅檀野に於ける所謂爲景塚を弔ひ、該古墳附近の舊家永田又平氏に對して、弔祭守護の囑托を交渉せしは抑も何の爲なりしか。若し夫れ謙信公年表にいへる如く、爲景の病死が確實にして、一点の疑念を挿むの餘地莫らんには、毫も無稽の傳說に耳を假すの必要あるべからず。故に伊佐早氏の態度は、少くとも爲景終焉の事蹟が、不明瞭なることを想像せしむるのみならず、其後永田氏へ寄せたる同氏の書簡中に於て、爲景梅檀野戰死を自ら承認し居れるに至りては、謙信公年表の編者すらも、最初は爲景戰死論者にして、病死說を採らざりしを知るべし。其書簡の文に曰く、「兩古塚之儀に付、篤と相調候に、貴邸內の塚は、字佐美定行と申傳候は誤謬と存候。其所以左に一、永正三年九月十九日、長尾信濃守能景、椎名慶親と芹谷に於て戰ひ討死、法名高岳正統。此役に宇佐美某、水原某等諸將も戰死せしこと、古文書に徵して明白なり。一、天文十四年、長尾信濃守爲景亦同所に於て戰死す、法名讓恕道七。但し宇佐美定行は戰死せず、定行は永祿七年七月七日死去。其墓は越後魚沼郡上田庄雲洞村雲洞庵にあり、以て貴邸內の塚は定行塚にあらざるを斷定す。何れ又篤と取調候上、更に正確の御答可申候、

先は要旨申上候也。六月二十五日(明治三十二年)伊佐早謙　永田又平君」同氏は傳ふる所の爲景塚を以て直ちに眞物とは稱せざりしも「天文十四年、長尾信濃守爲景亦同所に於て戰死す」と證明せしからには、該古墳に折紙を附したるものと見做して不可無し。然るに爾後の抹殺は、何等の考證に出でしやを知らずと雖も、上杉家に取りて其祖先の敗死は、名譽とする所にあらざるは勿論、一面に於ては又爲景塚保護囑托料に關して、交渉不調となれる內情ありと聞けり。是等は參照と爲すに足らんか。爲景塚は、東礪波郡梅檀野村梅檀野神社の北方一町の處に在り。平地より高きこと數尺の圓塚にして、古來相警めて侵すものなく、考古學上よりするも、固より當時代の遺物に非ずと決定するを許さゞるなり。

○

梅檀野に於ける長尾爲景の運命を叙し來りて、佛敎者の所謂因果應報の理法を想はざるを得ざるものあり。元來長尾氏は、世々上杉家の重臣にして、歷代主家の爲に忠勤を抽んでたるもの多かりしに拘はらず、六郎爲景に至りて專恣橫暴を極め、遂に逆意を起して上杉房義を越中に弑し、剩さへ其兄なる管領上杉顯定が、問罪の師を起して來り攻むるに及び、反つて之を越後長森原に敗死せ

しめしことは、旣に記せる所なり。然るに兩主を殺したる爲景父子が、處も同じ梅檀野に其の屍を曝せしのみならず、爲景が父能景の讐を復せんとして、返り討となれるは、上杉顯定を返り討と爲せる、罪惡の結果を自ら刈れるものにあらずして何ぞや。熟々玩味すれば、其成敗の因つて來るところに、無限の感興を禁ずること能はざるなり。爲景の越中戰死は、古來幾多の史籍に載せられて、人口に膾炙すと雖も、其父能景の越中戰死に至りては、之を知るもの少く、越中唯一の珍書と目せられし、野崎翁の肯構泉達錄は材料の博搜驚くべきものあるを認むれども、猶且此一節を缺如せしに見れば、思ひ半に過ぎんとす。蓋し長尾上杉氏が、越中僧徒の勢力を忌憚せるは、一朝一夕の事にあらずして、房義の曩に越中の守護に補せらるゝや、越中の豪族多く歸服せず。就中陰然一敵國の觀を爲せるものは、即ち瑞泉寺勝興寺の一派にして、房義の漸く苛政を施し、民の膏血を絞るに及んでは、動もすれば宗敎軍の爲め、加賀富樫氏の覆轍を履まんとするの虞ありしを以て、寧ろ先んじて他を制すべく、能景をして之を伐たしめたるに、神保氏遊佐氏等僧軍を援けて勢ひ抗るべからず。能景及び水原、宇佐美の諸將悉く敗死したり。上杉家の古文書中、爲景の書簡に「先年越中國に於て亡父正統を始めとし國中士卒數輩討死云々」と記せるものあり。又越後本土寺の過去帳中「高

岳、越後長尾信州吉景、越中にて戰死、九月十九日」とあるを見れば、能景の戰死は寸毫の疑ひを存する餘地無く、其正統と云ひ、或は高岳の云へるは、凡て能景の法名を指せしものにして、梅檀野芹谷千光寺の過去帳中「十九日、眞光院殿高岳正等大居士」とあるは、能く之に符合せり。爲景既に其の父を討たる、況んや越中併呑の一大障碍物が本願寺門派あるに於てをや。其軍の西下は、情に於ても將た理に於ても、當然有り得べきことにして、若し北越軍談の言へる如く、加越の國士中、心を爲景に寄せ、其出兵を勸誘せしものありとせば、何ぞ心動かざらむ。斯くして彼れは越中にて弑したる故主房義の怨靈の招くところとなり、因果應報の覿面の理を成せり。蓮如の所謂「御文章」に言ふあり。曰く「之すなはち往昔の宿緣淺からざる因緣なり」然り、因緣も亦豈に妙ならずとせんや。

○

上杉謙信は、我が戰國時代の舞臺に上り來る幾多の淨丑且未中、屈指の立役にして、啻に「輝虎配膳」の主人公たる而已ならず、戰國越中に於ける大歌舞伎に在りて、正に缺くべからざる荒仕事なるは、鄕人の普く知るところなり。爲景既に梅檀野に戰死す。看よ々々今此千兩役者の登場せん

とするを。一般軍書の記すところに依れば、謙信の越中來寇は、天文十五年より始まりて、若し其悉くの異說を併すとき、爾後は十五六回、乃至廿有餘回にも達するならむ。越中人士には、由來英雄崇拜の美風ありて、敵乍らも天晴なる彼の戰將を欽慕するの餘り、有ゆる口碑傳說を生み出し、自己の鄕土と謙信とを結び付け、謙信ならでは夜も日も明けざる觀あること、近世の名優團菊の人氣を以てするも猶且及ばざらんとす。然れども上杉家の謙信公年表に據れば、甲寅二十三年まで繼續したる天文年間には、未だ一度も謙信越中出征のことあらず。永祿三年に及んで、始めて指を增山城攻略に染め、夫れより天正五年まで、前後八回の示威的行動を算へ居るに過ぎずして、一々群書の符合するものなきは、實に已むを得ざるなり。謙信は武名を重んずるの士、仮令幼時其父の慈愛を受けず、逆境の裡に生長したりとはいへ、爲景の爲に恥辱を雪がんとするの念や、頗る切なるものありしなるべく、且は西上の望一日も已むことなかりしが故に、一面には不倶戴天の仇敵たり、又一面には大志を成すの邪魔物たる、越中を徇へんとして、數次こゝに進出せしは怪むに足らずと雖も、奈何せん背ろには勁敵武田信玄を控ゑて、身を兵馬倥偬の間に置き、充分に其目的を果すこと能はず。而して信玄死し、越中また漸く威壓の功を奏せんとせしときは、則ち黃泉の征途に就か

ざるを得ざる時なりしは、命數の窮まるところ、是非もなき次第と謂ふべし。去れば異本の雜說を取りて、謙信が幾回となく越中に來寇し、新川、婦負、射水、氷見、礪波の闔國隅々を殘さず、其馬蹄に蹂躙したりと做すは、稍々大袈裟に過ぎたる感あり。之が爲に徹頭徹尾上杉家記錄の示す所を本據とし、越中の諸記錄と軍書類の所載とを一切無視せんとするも、亦其不見識を陋とせずんばあらず。於是乎鄕土史研究の必要あり。我輩常に以へらく、越中史中最も興味深くして研究の餘地多きは、古へにしては大伴家持、及び家持を中心としたる當時なり。中頃にしては、上杉謙信、及び謙信を中心としたる當時なり。次では佐々成政、及び成政を中心としたる當時なりと。併も謙信時代は、局面の變化に富みて、關係の複雜せること前後に比無く、千山萬水の大景、殆んど應接に遑あらざんとす。

○

謙信來寇の回數、並に其年月等に關しての嚴正なる史的研究は、暫らく之を後日に期し、父祖以來宿怨重なる越中の僧軍に對して、謙信が如何に報復の念に强かりしは、宗徒亡滅の祈願を爲したると、寺院に加へたる行動の慘烈を極めしに依りて見るべし。試みに謙信公年表、若くは謙信年

譜を一瞥するに、永祿七年には「願文を彌彦以下諸車に納れ、越中を平げんことを祈る」とあり。元龜元年には「公來春越中を平定せんことを祈願せらる、署名して謙信と云ふ」とあり。又同三年には「瑞泉寺安養寺の一向宗徒を誅滅せんことを祈る」とあり。後者の文に曰く「願文の所、右の意趣は賀州並に瑞泉寺、安養寺の一揆蜂起すべき由申唱へ候。之に依つて當郡の能化衆六人に申付け、愛染明王一七日修行、並に仁王經、尊勝陀羅尼衆僧に申付けて、誦經を讀ませ候條、賀州越中の徒、悉く退散、雜意消失、越中信州關東越後云々、右衆事安全長久堅固、諸人歡喜を得て、安堵の思に任すべきものなり。仍て願文件の如し。元龜三壬申六月十五日輝虎」と、既に此の如き熱心あり。故に其精銳を提げ來りて連戰連捷の勢ひに乘ずるや、越中の名立たる寺とし寺は、幾んど兵燹を免かるること能はず。さしも輪奐の美を誇りしものも、其節何れも一度び灰燼に歸せざるは莫りき。而して之より先、越中本願寺門徒對謙信の葛籐中なる永祿の初年には、恰も本願寺の顯如が門主となるの盛儀あり。諸國の緇素を擧げて西上し、越中諸寺の守備薄かりしに乘じ、向背常なき戰國の習ひとて、神保、石黑等僧軍を窺ひ、次で勝興寺、瑞泉寺、善德寺との間に大に干戈を交ふるに至り、旁々形勢甚だ險惡となれるを以て、僧軍は其自衞上、欵を甲斐の武田氏に通じて、謙信の

西下を控制せしめ、信玄も亦之を利用して、謙信の上洛を障破せしめんことを期し、一個の攻守同盟を成立したり。此密約の發議者は何れに在りしかを審らかにせずと雖も、或は武田氏、先づ書を瑞泉寺に與へたりと做せり。夫れ或は然らむ。併も信玄に於ては、之を以て猶ほ足れりとせず。更に進んで、下新川郡の金山を握れる松倉城主椎名泰種との間に、協約を結べり。椎名は曾て爲景と密著の關係を保てるものなりしにも拘らず、其こゝに至れるを見れば、信玄の手腕轉た驚くに堪へたり。越後の驍將は、武を以て越中に臨み、甲斐の老雄は、謀を以て越中に處す。越中との交渉を透して見たる兩者性格の相違は、夫れ豈に興味深からずや。

○

武田信玄の辣腕によりて成立したる、瑞泉寺、松倉城、及び甲州間の三角同盟は、當時に於て直ちに其効果を實現したり。永祿十一年謙信の越中に入るや、松倉城の危險を思ひ、取敢へず大坂本願寺に移牒して、長延寺實了を瑞泉寺に使せしめ、越中僧軍をして椎名氏を援けしめ、自ら越後の背後を衝かんことを約せり。其齎らせる所の書簡、今ま現に西礪波郡埴生八幡宮に所藏す。文に曰く「金山逼迫の由に候間、近日後詰として越後に向ひ勢を出さしめ候。然れば大坂御內儀に任し、

長延寺を以て申候。此時貴寺の御肝煎に依て、椎名右衞門大夫開運候の樣に御調略簡要の趣、馳走に預るべく候恐々謹言。卯月六日信玄、上田石見守殿」と。當時井波瑞泉寺の巨頭として、上田石見守、竹部豊前法橋、齊藤刑部、土屋薩摩、稻塚左近、桃井右近等あり。石見は其の牛耳を執れること、同寺の記錄に徵して知るべし。而して當時尙ほ、信玄より勝興寺へ向つても亦密かに八重森某を派して、同一趣旨の書簡を發し、協同一致越後軍に抗らんことを勸誘したり。文に曰く「其已來遠慮を申し候。椎名右衞門大夫越後に背き、本願寺門主の高意を得候。茲に因つて當方へも無二相通じ候。此の如きの節、其國靜謐の御調略肝要に候。是等の趣申談ずべき爲め、玄東齋を大坂へ指上候。金山へは五日の中に長延寺を越すべく候。彌々御調談專要に候、定めて其聞え有るべく候哉、本庄彌次郎輝虎に敵對、常手後詰の備へ相催ふし候間、出陣致し近日越河せしむべく候。委曲は八重森申すべく候恐々謹言。七月十六日信玄、勝興寺机下」と、信玄が一致協力を勸告したるは、能く越中土豪の弱点を看破せるものにして、謙信も亦曾て曰ふ。「越中は一本釆幣なき寄合なれば、仮令牛王寶印に血を濺ぎ盟約するとも畢竟和合すべからず」と。共に看る所誤らざるなり。既にして翌永祿十二年、越後軍及ひ椎名軍は、大に新川に戰ひ、謙信の將河田豊前長親奮鬪して偉功を奏し、

松倉城は茲に守を失ひ、河田長親代つて之に居ることとなれり。此役に際し、瑞泉寺等の如何なる行動を執れるかを明かにせずと雖も、四邊の事情は礪波の守備を空しくするに由莫りしか。或は一本釆幣なき烏合の衆なりしが爲めか。應援の事蹟を認むること能はざるなり。遮莫松倉の喪滅によりて、信玄對瑞泉寺の提携は斷絶せらるゝに至らず。謙信の存在する限りは、兩者互ひに其背後牽制の必要を感ずること、依然として變らざりしが故に、信玄は飽迄越中並に北陸僧軍の力を利用せんと欲し、本願門派は又た何處までも甲州聲援を頼んで、信玄及び信長に當らんとしたり。其結果として、恰も歐洲戰爭に於ける獨軍の如き地位に立ちたる越後軍は時に、或は南して川中島に會戰し、時に或は西して越中に遠征し、數次捷利を博せしことあるも、倉皇として班軍の已む可らざりし場合あり。討てば服し、去れば背き、刈れども盡きざる頑强の草の根は、越中の全野に蕃りて滅却すること能はず。さしもの信謙をして、空しく畢生の遺恨を抱き、愛深明王一七日の祈禱も、彌彦明神の願文も、其の効驗無くして終らしむに至れり。恐るべきものは僧軍の力なりき。

○

青山延光の六雄八將論は、我輩少年時代より好んで讀むところ。其書武田信玄を論ずるや、奸雄

の巨擘を以てし、口を極めて罵倒措かざるに反し、上杉謙信に對しては、嘖々として尊王の志を稱讃し、盛んに其人格を揚ぐ。此の如きは單り六雄八將論のみに止らずして、後世の讀書子は皆な齊しく信玄を喜はずして、謙信を欽慕するの風あり。殊に其仁義を重んじて襟度の甚だ快濶なるものありしに服す。傳へ言ふ、謙信の臣峰澤某なるもの、罪を得て放たれ、仕を椎名氏に求む。既にして謙信の來りて越中攻むるに際し、某窃かに身を路傍の叢間に伏せ、銃を擬して將に之を暗殺せんとせしが、遽かにして銃を投じて流涕淋漓たり。謙信其聲を怪んで彼れを發見し、溫言久濶を叙す。某大に嘆じさばかりの仁君智將を、擊ち奉らんと存ぜし事悔しく成つて候、今ま遙に見奉りて先に屋形の心に背き、又かゝる設けを工み申す、事此上もなき大罪人にて候、疾く〳〵首を刎ねらるべしと、自ら誅に伏せんことを乞ふ。併も謙信仁智の虚名を敢て當らずと稱し、某を宥して問ふ所莫しと。一場の小話、千言万語を重ねて信玄の遺德を飾らんとしたる、甲陽軍鑑全篇の力にも勝るものありと謂ふべし。而して我が越中の地は、多年謙信の來襲に惱まされたるに拘らず、同盟國たる甲斐の信玄の爲人を賞せずして、反つて怨敵の事蹟を傳ふることを、誇りとするの狀あるを奇とせずんばあらず。併も越中人士の斯くまでに愛好する謙信の人格を、越中人士が如何に觀察せるかと

謂はゞ、恰も對獨交戰國の人民がカイゼルに對すると彷彿たるものありて、一般讀書子の謂ふ如き寛仁大度の摸範的英雄にあらで、頗る殘忍暴虐の猛將と見做されつゝあるは、更に一層奇異の感莫んばあらず。今ま其二三の例を擧げんか。曰く、謙信の射水郡放生津城に江波氏を攻むるや、主將以下從類十六名を屠り、之を城外に梟首して快としたりと。又曰く、謙信越中に入り、津毛城に在つて新川郡の庄官百姓に謁を賜ふと稱し、欺きて悉く誅を加ふ。下縣尾村彌右門なるもの之を探知し、馳せて警を各村に傳へ、難を野積谷に遁れ避くと。又曰く、謙信飛驛を攻めんとして越中高原野に陣し、廣嶺城を襲ふて利あらず。之れより越中の鄕士は手足まとひなるが故に、賺して殺さんことを決心せりと。又曰く、神保氏窮かに美少年をして謙信の豎たらしめ、機を見て刺を行はんとして成らず、謙信之を虐殺すと。又曰く、神保の將益木中務、關野城に在りて謙信に服せず、謙信謀つて其娘を捕へ、以て脅迫すと。此類一々枚擧に遑あらず。越中人士の謙信を見ること何故に此の如きか。想ふに越中に取りての謙信は、前後の事情唯だ其猛烈ありて寛仁を見るの機會莫りしが故に、傳說も亦彼れを惡鬼羅刹化せるは素より其處なるべし。然れども又一面より考ふれば、天性に於て猛烈なる越中人士が、已れに肖せて一個の謙信を、作り出さんとせし傾なきを保せざるなり。

○

戰國時代に於ける群雄の勢力を調節して、能く其均衡を保たしめたるものは、北陸の本願寺門派にして、之あるが爲に信長は東國を瀧川一益に、中國を羽柴秀吉に托して、各々其手腕を振しめたるも、北方の經綸に至りては手を着くるに由なく、柴田勝家をして纔かに北陸に備へしむるに過ぎざりき。此實情に通ぜる如才なき武田信玄は、巧みに信長に宿怨ある門派を煽動して、信長並に謙信の抑制を試み、獨り權謀術數に迂なる正直者の謙信のみは、此間に立ちて何等の利するところもなく、書を信長に送りて「來春三月中旬に必ず越後を出で上洛仕るべく候間、其時分相公も安土を出でられ候はば、興亡の一戰を遂ぐべく候」と述べ、其膽を寒からしめたるにも拘らず、所謂興亡の一戰なる快業を遂げ得ざりしことは前に之を盡せり。然れども此勢力の均衡は到底持久せらるべきものにあらずして、元龜三年三方ヶ原の一戰は、織田德川聯合軍の敗北となり、信玄意氣軒昂、一鞭長驅して幾旬を手中に攻むるの好機漸く迫り、織田氏の危きこと累卵の如く、玆に局面の展開を見んとするに及び、天正元年信玄病の爲に斃れて形勢忽ち一變、長篠の役哀れ武田氏遂に起たず。而して一方に於ては、淺井、朝倉、三好、松永等皆亡ひて六角は又降り、信長今や右大臣に昇りて

號令を天下に布かんとするに至れるも、殘れるものには謙信あり。謙信を敵に廻すは信長の欲せざる所なりしも、籠蓋の劫を奏すべからずと見て取り、之に備ふるが爲に、安土城の驚くべき大工事に著手したり。天正四年正月より丹羽長秀主宰の下に、明智光秀羽柴秀吉合力し、幾万の人夫晝夜を分たず、必死の活動を爲し、其騷擾山も谷も動く計りの次第なりと、信長記は書し居れり。此の如くにして逸を以て勞を伐つべき軍略を講じたりと雖も、動もすれば越後軍の鋭鋒に當り易からざる虞ありしに、時なるかな謙信も亦天正六年を以て卒し、茲に信長北方の患全く除かるゝに至れり。於是既往を顧るときは、瑞泉寺一黨は言ふに及ばず、北陸に於ける本願寺門派の執り來れる外交政策は、背面越後の牽制上已むを得ざるもの有りしとは言ひ乍ら、信長を迎へんと欲して、却つて信長の最も恐れたる勁敵を制し、爲に時日を遷延して、陰に織田氏の覇業を成すに便ならしめたる嫌ひあり。斯くて信長の爲すべき當然の殘務は、即ち本願寺の始末ならざるべからず。仍りて僧軍の氣焔稍々衰へたるに乘じ、調停の勞を宮中に煩はし畏くも　正親町天皇よりの勅使本願寺下向となり、門主顯如は平和を重んじて大阪石山の堅城を棄て、諸老に諭して從來の感情を解きたるに、顯如の子教如不平禁ずる能はず。獨り大阪に留り檄を門徒に飛ばして再擧を謀れるも事成らず、恨を呑んで紀伊に退去したり。時に天正八年八月。此春信長の將柴田勝家、佐久間玄蕃等甲兵五千を率ゐて加賀の僧軍を討ち、僧燈寺、弘願寺、光德寺、本願寺、廣濟寺、惠林坊、善照坊等悉く攻略せられ、佐久間御山に據りて威壓を施したるも、顯如信長の媾和條約中「賀州二郡大坂退城以後、如才なきに於ては返付すべき事」の一條を加へて靜謐に歸す。而して本願寺と氣脈を通じつゝありし瑞泉寺も、大勢の此に至りては、門主の諭示に抗し得ざりしは勿論と做す。

○

上古以來我國覇權者の不斷の憂ひとなれるものは、東北並に北陸の强暴比ひなき匪徒蠻族にして、之を鎭撫するは固より凡庸の器の能くする所にあらざりき。故に朝廷或は大彥命を遣り、或は日本武尊を勞し、或は又坂上田村麿を向はしむる等、孰れも咸な武勇絕倫の英雄を選定せられざるは莫かりき。既にして諸國に國主を置かるゝに及んでも、威令時として行はれず、加賀白山の僧徒が、國主排斥運動の爲に兵を動かして禁闕に迫れるが如き暴擧を見るは、尋常茶飯事たりしなり。織田信長の越前朝倉氏を滅せしは、即ち其權力北長の第一歩にして、上杉謙信の病死は期せずして其第二歩を進めしものと謂ふべく、加賀の僧軍を討伐せしめて盛政を御山城に居らしめ、更に顯如と和

して北陸門派の氣焔を鎭めしときは、確實に第三歩を占たるものなりしかども、當時越中にて依然として瑞泉寺を中心としたる一大勢力あり。雲行一變せば何時風雨を捲起さんも知り難く、加ふるに土豪諸處に割據して、向背頗る怪むべかりしを以て、用意周到なる信長の安んぞ之を放念すべき道理あらんや。先づ窃かに越中及び能登の諸將に對する誘致策を講じ、越中の神保長純と婚を結びて、謙信の生前に於て早くも自家藥籠中のものとなせるなど、其手廻しの好き坐ろに舌を卷くの外なし。信長の北邊に武將を使用したるものを見るに、勇猛を以て鳴れる柴田勝家あり。鬼玄蕃と謠はれし佐久間盛政あり。桶峽の一番槍以來武功無類の前田利家あり。利家は前に近江長濱に萬石を食み、次で越前府中に三萬三千石を給せられ、天正九年には又能登一國を得たり。而して越中一國の主として富山城に麾下屈指の佐々內藏助成政を居らしめ、此の如くにして古來さしも難治を極めし北陸の配置略ぼ完了を告げ、漸く意を安んずる間もなく、天正十年六月流星一夜、本能寺の上を飛び覇業半ば成りて光秀の弑逆に斃れ、其搗き上げたる臼中の餅は、秀吉の手に依つて圓めらるゝことゝなれり。賴山陽吟じて曰く、蜻洲手に在り打つて丸と爲すと、次で來る秀吉の對北方策如何。秀吉を生めるものは信長なり。信長によりて身を立てたる秀吉は、親しく故主の偉業に參與して能く其成

功と失敗との因を知悉し、或点までは信長の筆法を學び、群雄駕御の道に於ては、最も深く得る所ありしに似たり。故に細川幽齋は曰く「信長樣の軍法は御敵を仕たる者は子々孫々までも御果し、其跡をも覆す程に稠しく成され候て、天下を御治めなされ、內裡の御修理等御仰付られ、王法の衰へたるをも御取立て候て、萬事賞罰正しく仰付けられ候ゆえ、萬民に至るまで仰ぎ奉らずと云ふこと無し。然し乍ら一度御敵仕候もの御詫言申上げ、御旗下になされ候ても御心を許されず、御憎しみ淺からず候故謀反人多く出來候。右の段太閤樣能く御覽なされ、御敵を仕候者は稠しく仰付られ、又御詫言申上げ、御旗下になり候へば、御譜代同前に懇になされ、御心置かれざる樣になされ候故、昨日まで御敵仕候者も、身命を捨てゝ忠節を致すべくと存候故、謀反人も無之候て、早く天下を御治めなされ候」と。實に其言の如く、信長によりて最適任者と認められし、北陸の行政長官を兼ねたる各師團長の椅子の如きも、敢て之を動かすの意思莫りしものなり。

○

織田氏の北方經營漸く一段落を告げ、秀吉また之を繼承せんとするに方りて、恰も天正十一年長嶋の攻圍戰を動機とし、柴田勝家は瀧川一益を援はんとして柳ケ瀨の會戰となり、佐久間盛政の賤

ヶ嶽防戰となり、北の庄城塞戰となりて、北方の兩雄柴田佐久間は茲に空しく亡滅す。前田利家は朋友の信に依りて一旦勝家と事を共にせしも、利あらずして退いて府中を守るや、秀吉禮を厚ふして、切に其社稷を失はざらんことを說きたるが爲に和即ち成り、越中の佐々氏も大勢の定るを見て、其女を秀吉に質とし事無きを得たり。之れ秀吉が信長の失脚に顧み、叛將を容るゝの禁度を示さんとせしに由るは勿論なるも、其間少くとも三個の理由あり。(一)利家は性質極めて篤實にして、一旦人と約するや、假令一命を抛つと雖も斷じて之に違背せざるの美德を有せることは、秀吉の夙に了知せる所にして、前に勝家が敗將八員を率ゐて府中に來り、利家の慰藉を受くるや謝して曰く、我れ天運盡きたり、北の庄に歸りて潔く自刄せんのみ。君の高義何を以て報いんや、請ふらくは自今秀吉に隷し給へ。我れ地下に於て寸怨なしと、雙涙潸々として鎧袖に落ちたりと謂ふを以つても利家の爲人を知るべし。秀吉固より是等の佳話を傳聞し、私かに勝家の眞友を得たるを羨望したるならむ。(二)成政は驍勇にして至誠無く、其反覆豫知し難きものあるは、秀吉能く之を知れりと雖も、當時東方越後には上杉景勝の已れに雌伏せるあり。西方加賀には利家の重鎭ありて暫らく之を野に放つも、深く憂と爲すに足らずとせしならむ。(三)越中は加越能三國中最も難治の地にして、

其餘殃尙ほ完く除かれざるものあり。故に成政をして之が制馭に膺らしむるは、所謂毒を以て毒を制するの得策と做せしならむ。而して萬事は秀吉の註文通りに運び、成政は城尾城に齊藤氏を討伐して、先づ越中を平定し、然る後野心を暴露して加越兩軍の對抗となり、末森、朝日山、鳥城、蓮沼等の大小戰鬪を重ね、一面には上杉景勝の越後軍、土肥政繁を先鋒として境に侵入し、控制の運動を起すあり。佐々の自滅は旣定の事實にして、之を放置するも何等の虞莫りしにも拘らず、秀吉自ら軍旅十萬大袈裟の陣容を張り、長征して越中吳服山に來り、盛んに威武を輝かせしは、畢竟一場の政略的演劇に過ぎず。秀吉大坂に在りて佐々叛亂の報に接するや、左右を顧みて曰く、我れ壯年より成政の力狡なるを知るゆへ、其鎭めとして前田を加州に置きしなり。我れ人を知るの明鑑豈違はんや。前田、佐々勇烈智略の優劣旣に先知せりと。之に由りて見るも、加軍優に越軍を壓迫し得べきを自信せしは明らかなり。併も一世の英雄豐太閤をして、特に越中に誘き寄せ、戰國時代越中史に最後の花を咲かしめたるは、佐々成政の貢獻に他ならず。此点に於て內藏助も亦一働きを爲し吳れたりと謂ふべし。

○

加越の役終りを告ぐるや、秀吉礪波、射水、婦負、越中三郡を以て利家の世子利長に賜ひ、利長は射水の守山城に入れり。既にして成政肥後に遷され、加越能三州悉く前田氏の領するところとなりて、北門の鎖鑰一に其の手に握らる。賴山陽詠じて曰く「北門鎖鑰本同儔。六尺嬰孩任大憂。保爽不持分陜拐。燕封却自冠群侯。」時に三州の豪族は或は亡び、或は歸服して、掃蕩の功始んど完きを告げたりと雖も、北人は由來其の天性に於て强頂剛腹、動もすれば權力を恐れず利害を顧みずして猛然蹶起血を見ずんば已まざるの氣慨あり。未だ以て須臾も放念するを許さざりしが故に、利家、利長、利常の約三代に亘れる戰國時代の末葉に於て、前田氏の施したる政治は、最も峻酷なる法治主義にして、兇悍不順の徒には加ふるに必ず重刑を以てして苟くも假さず、斬あり、磔あり、梟あり、秋霜烈日も啻ならざりしを見る。併も、之れ實に當時にありて勢ひ已むを得ざるに出でたる一時的政策にして、彼の性惡說を前提となせる韓非の重刑主義若くは、マキアベリーの君主々義と同一視すべからざるや勿論なり。此間に於ける藩主の苦心は利常の老後、近臣を集めて漏せる座談のうちに窺知することを得たり。殊に越中は其の難治三州の首位にありしを以て、常に油斷せらるゝこと莫りしは謂ふに及ばず。而して眞宗僧徒に對しては、最も深く注意を拂はれしことゝ信ず。何

となれば彼等僧徒は信長との和睦以來、全然劍戟を抛ちて宗教家の本務に立還りたりと雖も、立山と同じく一個の休火山にして何時爆發せんも知る可らざりしが故なり。豈獨り眞宗僧徒と謂はんや。戰國當時の各宗僧徒は、悉く氣象豪邁にして制馭し易からず。例へば新川郡楡原法相宗の遍照院金乘坊なるもの、日蓮宗輸入の强制に反抗し、畠山氏の軍と勇戰せしが如き、又其の末葉金乘坊了哲なるもの、天性剛勇にして一千人の僧兵を率ひ、成政の帷幄に參じて出陣の傳令を爲せるが如き、共に著名の事實となす。されば利家利長時代に於て、纔かに知り得たる寺院優遇の事蹟を擧ぐるも、凡そ左の如きものあり。

(一)天正十五年五月、利家新川郡舟見村寶福寺に百俵の地を寄附す。(二)同年七月、今石動城主前田利秀山林若干を永傳寺に寄進す。(三)同十六年十月、利長、田百苞を勝興寺に寄進す。(四)同十八年二月、利家立山寺、仲宮寺等の莊園を復す。(五)同十九年十一月、利家、田百苞を石動山天平寺に寄進す。(六)慶長二年七月、利長、淨慶寺信藏等が同志を集めて顯如を援けたるを以て斬罪の制裁を加へたるも、其の十月には前田長種より勝興寺を國中諸寺の觸頭となせり。(七)同十一年、利長、安居寺を再興す。此類の事、若し細かに穿鑿し來らば、一々應接に遑あらざるべし。而して

其の意神佛尊崇に出でたりと做すも、又何ぞ懷柔策の一端ならずとせんや。

○

頼山陽は豊太閤を詠じて曰く『二世休嗤秦業短。混同六國太艱難。』と。此の如きは何ぞ必ずしも後世頼山陽の詩を待ちて知る所ならんや。戰國に於ける天下は唯だ實力あるものゝ廻り持なること、兒童走卒と雖も尙能く解せざるは莫かりき。足利尊氏の室町幕府を立つるや、將軍の實權は管領細川氏の手中に握られ、細川氏は三好氏に制せられ、上杉氏は長尾氏に壓せられ、終に織田氏の起るに及び、統一の大業半ば成らんとして、圖らず秀吉の繼承する所となれり。併も六國を混同する太だ艱難、當時にありて秀吉の歿後は一個の疑問に屬し、或は再び海内分裂群雄割據の狀態に陷り、若干年月の歷史を鮮血に塗抹するならんと想像せし者もあるべく、或は又直ちに秀吉に代り、號令を諸侯に下すものゝ輩出せんことを期待せし者もあるべし。是等は興味ある問題として寄ると觸ると、人々互に論議するところありしは爭ふべからざる事實なり。而して時人の月旦に上りし秀吉以外の注意人物は果して誰々なりしかと謂はば、我輩は德川家康、黑田如水及び前田利家の三雄なりしとなすに躊躇せざるなり。家康に就ては復た新たに說くを須ゐず。黑田如水の庸將ならざりしことは

士を見るの明ある秀吉夙に之を看破したり。秀吉職を讓るの際隱居して左右と戲れて曰く、予歿後誰れか天下を掌握せんと。敢て對ふる者なし。强て問ふ。僉な曰く、五大老か。秀吉頭を掉て曰く、非なり未だ識らざるか、單に天下を得る者なり。僉な曰く、未だ之を識らずと。秀吉曰く、跛子能く得べしと。僉な曰く、彼れ祿十萬石、何すれぞ當らん。秀吉曰く、予輩は未だ彼の機度を察せず、故に疑ふ。予嘗て備中を徇へ、接戰するに及び、計言至り夜以て日に繼ぎ東上し、勝龍寺に戰して逆賊を討つ。而して後ち交戰大小數回、其の大節に臨み、呼息閉塞謀慮百端、彼是れ決し難し。苦計を跛子に問へは、坐決即斷、未だ曾て難澁なるものあらざるなり。而して其の計、予の意表に出づるもの數回且つ其の心剛捷にして能く人に任ず、宏度深遠天下匹ひなし。予在世と雖も、若し得んと欲せば、則ち輙く之を得べしと。黑田如水は前名孝高、秀吉の參謀長として偉功ありしこと實に秀吉の言の如し。面貌痘痕ありて怪醜、加ふるに跛にして風采揚らずと雖も、武勇絕倫、軍略の秀、戰術の妙、府中目して良平と呼ぶ。蓋し陳平張良の智謀を兼ねたりと做すなり。然れども如水に野心なく、後年老を告げて恬退するや、列侯士大夫の狂駕絕えず、門前市を爲せるにも拘らず、風月を友として悠々其の園に灌ぎ遂に出でず。故に殘れるものは前田・德川の兩氏ある而已にして、

勢ひ世人の注意は、此の兩雄の上に集らざるを得ざりしなり。

○

當時にありて窃かに將來の覇權者を憶測するは、恰も立憲政体の今日に於て後繼内閣の首相を物色するに等しく、秀吉が戯れに其の左右に諮問したるが如き問題は、武將の小集ある毎に酒後茶前、屢々之を論議せられしを知る。曾て前田利長、細川忠興以下四五の戰友、蒲生氏郷の邸に會せしとき、話題圖らず秀吉歿後の中心人物に及ぶや、氏郷乃ち利長を指して、渠の阿爺利家ならずして誰かあらむ。利家若し大志を有せば、北國より上洛の途中、些の障碍あることなく、西國の毛利を制するには中國の浮田あり、關東の德川を防ぐには不敏と雖も乃公あり。且や諸方の同情靡然として、前田氏に傾くべきを疑はず。我等何れの日にか肥州（利長）の配下に立つべき運命を荷へりと說き、衆皆敢て異論を挾まず、利長獨り哄笑して之を阻むと。利家の聲望隆々として諸侯を壓せしを知るべし。文祿中朝鮮の役起り利家、秀吉に隨ひて肥前に赴き、次で共に渡航せんと欲して、故ありて果さず。秀吉伏見に還る。而して諸將中智勇の利家に如くものなきを以て、囑に依り秀吉に代りて全軍を統ぶ。其の器の偉なること此の如し。故に若し利家にして夙に家康の野心を包藏せば、氏郷

の豫測は必ず容易に成功せしならむ。唯だ彼れ誠實にして、秀吉の倚托を重んじ毫も他意あることなく、家康も亦利家の存在する限りは其の鋒鋩を露すに由莫りしも、天年を假さずして秀吉薨去の翌年利家相次で薨じ、今や又た家康に比肩すべき英雄を見ず、群小徒らに事を過り時勢日に豊臣家の爲に非にして、遂に大坂陣の大悲劇を生ずるに至れり。同役の將に起らんとするや、秀頼の名によりて利長の應援を乞ふ。利長疾の故を以て之を辭し、慶長十九年五月黄泉の客となる。大坂冬の陣に先つこと五ヶ月なり。或は謂ふ利長の死は自殺にして疾の爲にあらずと、之れ實に永久の秘密なり。史家の所謂戰國時代は、足利氏の季世應仁の亂より秀吉の小田原城攻略まで、若くは關ヶ原の役、家康西軍を破りて覇基を定めしまでと爲す例なるが故に、大坂冬夏の兩陣は、蓋し戰國一百餘年間のパノラマを照らしたる、太陽の餘光を投げたるものとや謂はむ。併も利家にして若干の壽を保ち、義憤の爲に蹶起したらんには、局面は更に如何の展開を爲したらんも知るべからず。前田氏父子を遽に此時代より喪へるは、恰も不發爆彈の遂に其の用を爲さざりしが如き感ありて、戰國越中史も亦こゝに終りを告ぐ。

○

戰國時代は越中史中のヤマなりとは、本篇の緒言に於て之を述べ置きたり。今ま試みに前來の記事を統ぶるに、當時代に在りて其の身親しく越中の地を踏み、歴史上最も重要の關係を作れる、知名の人物には、管領上杉顯定あり、顯定の弟上杉房義あり、長尾爲景あり、爲景の父能景あり、上杉謙信・武田信玄あり、佐々成政あり、前田利家あり、前田利長あり。將た又豊臣秀吉あり、宗教家としては蓮如あり、神保、畠山、石黒、江浪の土豪の首たるもの、若くは以上諸雄の麾下に屬する勇將謀士の如きは、必ずしも一々列擧せず。此他猶ほ間接の關係を保てるものに至りては、久しく瑞泉寺一派の本願寺門徒より、宗敵と見做して附狙はれたる織田信長あり。左良々々越の冒險旅行により、佐々成政の交渉に應ぜし德川家康あり。單に是等の人物を書き列ぬるのみにても、既に光彩の陸離たるものあるにあらずや。古志の昔より茫々二千五百年、越中史の前後を通じて、何れの部分にも此の如く華やかに、此の如く賑はしき時代を見ること能はざるなり。併も越中史の當時代には別に一個の特色ありて存す。开は即ち眞宗寺院の勢力が常に筋書の中心となりて、之れより幾多の場面を生み出し、總ての淨丑且末に役割を賦與せしかの觀あることなり。又た越中の地が、北方に雄たる謙信と、西方に覇たる信長との中間に立ちて彼れを制し之れを抑へ、能く勢力の均衡を取

らしめたるが如きも、興味の深きものあるを覺ゆ。而して越中史の戰國時代が後世に對つて、如何なる結果を及ぼせしかを見るに、(一)諸英雄活動の事蹟と、我等の祖先が其の渦中に投じて、大小の戰鬪に參加せしことゝは、地方住民の氣象を雄健ならしめ、殊に英雄崇拜の風を起さしめたり。若し夫れ好事の士ありて越中の口碑傳說を蒐集せば、其の十中七八まで英雄豪傑に關するものなるを發見し、我輩のいふ所の決して妄誕ならざるを知らむ。(二)越中を基礎として我が戰國の事實、並に史上著名人物の研究に貴重の便宜を與へたり。例へば爲景戰死の虛實の如き、成政の雪中濱松旅行に關する眞否の如きは、之を肯定すると打消すとに由りて歴史の叙述に、至大の變化を來すべきは言ふを俟たざるのみならず、地方に存在せる古文書若くは古記錄類が、從來の日本歴史に意外の訂正を要求すること少からざらんとす。(三)人生に於る高尙の趣味を喚起し、併せて有益の感化を與ふる名所舊蹟の多くは、主として戰國時代の賜にして、越中の山河に特別の意味を結び附けたるは案内記の示す所なり。

○

本篇回を累ぬること二十、歐洲戰局の持久と等しく、定めて讀者を倦ましむること多からむ。併も

茲に稿を終らんとするに臨みて、我が戰國時代を世界現下の時局に對照するに興味の少からざるを覺ゆ。龍虎山頭の伏魔殿、一たび其封鎖を發かれて百八魔星の怪傑と化し、宋末の天下を荒れ廻りたる水滸傳にも彷彿たるものは、我れに在りては應仁の亂以後の所謂戰國時代にして、世界に在りては即ち今次の大動亂にあらずや。露・佛・英・獨・日・白の諸國中、其孰れか宋江・李松・魯智深にして、又其何れか信長・秀吉・家康、乃至信玄・謙信・利家・勝家・成政なるは、必ずしも之を謂はず。龍攘虎搏の壯觀古今に絕し、雄邦强國の面目鬚眉歷々として視るべきものあり。而して國際の儀禮公法、未だ悉く廢滅せりといふにあらざるも、固より實力の外に勝敗なく、民族的精力の自由競爭今ま正に闌なるは、宛ら戰國史中最高潮の頁に對するかの感なき能はず。去り乍ら相似たるものは、單に是れ而已に止らずして、第一は外交に掛引に於て相似たり。我が戰國時代は前にも云へる如く、偏へに實力の競爭によりて輸贏を決せられたりと雖も、其一面に於ては群雄互ひに、外交の手腕を逞ふして權謀術數到らざるなく、暗中の飛躍眞に端睨すべからざるものありたり。本編越中瑞泉寺を中心としたる、信玄・謙信・信長等の攻略關係の如きは皆な其例と做す。而して之れを時局に照すに、歐洲交戰國が兵馬倥偬の間に於て、其外交の手を巴爾幹諸邦に伸べて、或は煽

動し、或は威嚇し、或は懷柔することを忘れず。尙傍ら對米對支の活動に於ても亦見るべきもの多きにあらずや。殊に戰時外交には有ゆる犧牲を餘儀なくせしものにして、人質若くは政略的結婚の行はるゝを常とし、親戚血緣も一朝にして仇敵となり、屢々慘劇の演出を見たるは、我が戰國時代の特色なりしと同時に、歐洲今日の狀態にして目的の爲に手段を選ばざるカイゼルは、ヒステリー症なる露國皇后を心痛せしめ、間接に露帝に平和を吹込ませんが爲に獨逸皇族中、露國皇后の生家なるヘッセ家の公子六名を、故らに戰場の危地に差向け重傷を負はしめ、其外交魂膽の殘忍なる犧牲に供せしが如きは其一例と做す。其二の相似點は、即ち戰術及び武器等の顯著なる進步にして、我が戰國時代に於て、初めて大規摸の用兵を行ふこととなり、武術以外に戰略戰術の研究を競ひたるのみならず、武器は銃砲の應用に一新勢力を加へ、尙ほ築城術及び工兵作業の革新を見たり。例へば大坂陣の攻城軍が、甲斐の鑛山夫を使用して抗道作業を營みたる如きは、頗る着目に値ひするものとす。而して歐洲の大戰亂が、武器及び戰術に驚くべき記錄を作れるは、復た說くを須ゐざる所なり。知らず、我が戰國時代の後に德川氏の統一的覇業を成就せる如く、歐洲大戰亂の後に、如何なる局面の展開を見るべきか、抑も興味饒き觀物にあらずや。

（大正四年一月稿）

越中の治水と山林

○

山岳重疊として、南東部一帶に連亘し、幾多の巨流源を是に發して北向又は北西向し、奔激急駛して越中灣に朝宗す。隨つて各川の中流若くは下流は、堆積作用に依りて河宋を發育し、其結果往々兩岸の耕地面より高きものあり、之を本縣に於ける河川の狀態となす。故に一朝洪水の氾濫することあらば、破壞力の及ぶ所、猛を極め、慘を盡すは復た異むを須ゐざる也。試に本縣の歲出を見るに、土木費は每年平均五十萬圓以上に達して各欵の首位を占め、教育費、勸業費の如きは、近時膨脹の甚だしき縣民を驚かせ、本縣の經濟は教育勸業のため一大危機に瀕せりとさへ唱へられつゝあるに拘らず、之を土木費に比せば及ばざること甚だ遠きを見る。況んや警察費をや。又況んや自餘の諸欵をや。此の如き厄介なる河川を有し、此の如く際限なき縣費を失ひつゝある地方は單に經濟の一点よりしても、不斷治水の方法を苦心し、極力其防止を圖るべきは固より當然なり。然るに

事實は之に反し、官民共に意を治水の根本に致さず、漫然として年々水害復舊費を計上すること殆んど慣例となり、毫も怪むものなき而已ならず、縣費支辨以外の諸川は、互ひに補助金の交附を爭ひ、目前姑息の繕縫工事を行ふに滿足し、未だ大局の問題を顧みるに遑あらざるに似たり。此時に方りて本年の洪害あり。之を既往に索むるに、百萬圓以上の土木費を要せし實例は、明治三十三年度及び三十年度の兩回の外、二十九年度と做す。即ち三十二年及び二十九年に於ける出水の如きは被害の慘憺たるに由り、官民を擧げて一時は善後策の研究に熱心せしも、爾來暫らく斯かる大洪害を中絶せるため、復た治水を論議する者なきに至れり。底事ぞ河伯突如として暴怒し、濁浪滔天、山獄崩れ堤防壞れ、耕地、住屋、畜類、生靈其犧牲となるもの多く、縣下の官民俄に悚然として恐れ、慄然として戰く。併も唯だ恐れ戰くのみにして、未だ豁然覺る所莫んば遂に何の得る所あらんや。之を以て吾輩は這般の出水を以て天公の與ふる教訓と做し、此際從來の舊套的土木法に據らず、各川沿岸民の縣費分捕競爭を避け、根本的に縣下百年の長計を樹立し、禍を轉じて福となすの用意あらんことを切望して已まず。乃ち衆と共に對本縣河川善後策を講究せんと欲する所以なり。

○

治水の根本政策は謂ふまでもなく、水源地たる山林の涵養にあり。舊藩時代に於ける本縣の林制は、御林御仕立林官林格及び民林七木禁伐等の嚴重なる保護の下に、領土の公安を維持し木材の供給を豊富ならしめ、其業蹟頗る見るべきものありしに拘らず、維新後の濫伐は山林を荒廢せしむること甚だしく、爲に頻繁なる洪水の慘害を招き、一縣財政の基礎を殆うせしに依り、漸く山林恢復の必要を感じ、去る明治三十三年度より初めて、森林調査の吏員を置きて保安林の調査に着手し、爾來年々法律に基き、各川流域の危害地に之が編入を行ひ、今や十餘年に及び、効果の少しく見るべきもの無きにしもあらずと雖も、水源救治の事、果して之を以て意を安んずるに足るか。吾輩專門的技術に昧きも、時に深山幽谷を跋渉し、親しく實地に就て經驗せる所に依れば、此の如き山林の狀態を以てして、出水の危險を感知せざる無慮放心は轉た驚くの外莫らんとす。既に保安林に編入せられて年處を經たるものは、林相稍々恢復せるも流域の斷岸絶壁に至りては、依然として山骨露出し、一草一木を止めざるもの隨所に發見せらる。啻に各川の本流域のみならず、若し上流山間に於ける無數の名もなき小谷に踏込みて一々實査せば、其慘憺の狀想像するに餘りあり。元來本縣水源地の山嶽を構成する所の岩質は粗雜脆弱にして、吾輩の知人たる一技術者が曾て説明せる言に依

れば、幅員の最も廣きものは、極めて結合力に乏しき片麻岩及び片麻質花崗岩とし、之に次ぐは角閃花崗岩・火山岩・石英粗面岩及び安山岩の類なり。故に禿岳童山にして樹木を被らざる部分は、風雨寒熱の作用にて自然的崩潰を來すは怪むに足らずと。禍根災因は實に茲にあり、實に茲にあり。試みに既往の大洪害を調査するに、千丈の堤も螻蟻の一穴より亡ぶと稱するが如く、小谷より排出せる土砂の堆積は一時降水を瀦溜し、軈て之が決潰は猛烈の勢ひを以て、他の土砂と岩石とを誘致し、土砂と岩石との流下は更に幾多の大崩潰を誘ふこと、殆んど恒例と稱するも可なり。這般の被害も亦豈に此方則を免るゝを得んや。

○

去る七月下旬の出水後、直ちに小川流域を踏査したる本縣技術官は、吾輩に告げて曰く、曾て小川上流を探撿せし際、某の名稱ある一小谷の狀態、極めて危險なるものあるを發見せしことあり。秘かに以へらく今回の慘事、恐らく之が一原因たらむと。乃ち千辛萬苦を冒して往いて撿せしに、果然該小谷は崩潰其跡を留めざりきと。又曰く若し單に水量の增加のみならんには、及ぼす所の損害未だ彼の如く太だしからざりしなるべし。之れ實に水害にあらずして砂害也。水量二丈と稱する

も其實一丈五尺までは土砂及び岩石にして、純粹の水は唯だ他の五尺を占めたる而已と。言聊か奇矯に似たりと雖も、現に黒部の如き將た小川の如き、堆積の砂岩に依りて深谷を充塞し、河床を丈餘の下に沒了せしに徴せば、思ひ半ばに過ぎんとす。來る臨時縣會に提出せらるべき水害復舊費豫算の内容は、吾輩の窺知する所に非ずと雖も、富山通信の傳ふる百四十万圓の支途が、悉く堤防橋梁乃至道路等の工事費に充てられ、水源地たる上流山林に一指だも染めざるものなりとせば、其効果は恐らく這般の洪水に等しき程度の天災が、再來せざる或期間内に留まり、重ねて大雨に遭へば、幾多の勞費は忽ちにして空しく水泡と共に、沒し去るべきは素より當然と做す。盍んぞ憂ひざるを得んや。或は曰く堤防橋梁、道路の復舊は焦眉の急に屬し、山林水源地は即ち第二着の問題なり。而して焦眉の急に應ずるもの既に百四十万圓に達す、何の餘裕ありてか復た能く山林に及ぼさんと。併も之れ本末を顚倒し利害を辨知せざるの言にして、新に增加せる無數の危害地は、今後雨量甚だ大ならずと雖も、猶且つ慘害を誘起せしむるの嫌ひあるは、最も睹易き道理なり。故に我輩は敢て河川工事の必要を意とせざるにあらざるも、寧ろ主力を上流山林に傾注せんことを、善後策の得たるものと信じ、復舊豫算を議するの前に於て、當局官吏及び縣參事會員等が草鞋を千嶽万谿の間に

印し、水害の原因を親しく躬ら檢閲し、然る後適當の方針を樹立せんことを冀望して已まず。謂ふ迄もなく其勞や洵に鮮少ならず、或は冒險的行動たるを免れざるべきも、山を知らずして水を治めんとするは、夫れ以上の危險事なるを知らざる可らず。

○

曾て中國に於ける洪害地として知られしものは岡山縣なりき。然るに旭川上流砂防林の施工以來、治水の効果顯著なるものありしを以て、往年本縣知事は特に砂防技術者宇野某氏を岡山縣より招き、縣内河川の實狀を鑑定せしめたることあり。當時宇野氏は施業の必ずしも至難ならざるを說けるが、異論また少からず、遂に要領を得ずして今日に至れり。唯だ近者常願寺川上流に於て、年々試驗的砂防工事の行はれつゝある有り。纔に此種の事業の絕對困難ならざるを、知らしむるに過ぎず。元來本縣の山嶽嶮惡無類にして、中國に於ける所謂贅六式山嶽と同日に談ずべからず。彼の旭川上流の筆法を用ゐて、果して完全の成功を期し得べきや否やは、頗る研究を費さゞる可らずと雖も、其個所に依りて、或は砂防森林の施設に適するもの無きにしもあらざるべく、或は林業よりも寧ろ土木的手段を以て、石堤其他の築設を必要とするものも有らむ。是等は一々實地に就て技術的最善の

方法を撰擇するに如かず。漫然机上の空論に據りて其可否を決せんとするは、斷じて吾輩の取らざる所なり。今は則ち縣民齊しく舊套の堤防修理に安んずること能はず、國土の保安、身命財産の擁護を圖るには、別に何等かの有効有力なる施設の希望を有し居れることゝ信ず。故に少なくとも堤防工事以外、保安林以外に土木的植林の新事業を攻究すべき時期に到達せしものと稱して可なり。本縣廳には林業に關する一局ありと雖も、由來內務部勸業課內の一掛として、其室の一隅に蟄伏し、勢力甚だ振はず、氣焰最も揚らざる嫌ひあり。曾て技師廣瀨氏在任の時代に於て、一度び獨立の一課を成せるも幾許ならずして、復た勸業課の併呑する所となり、豫算編成の如きも偶ま新計畫を立つるときは、廳議忽ち之を排斥し、縣會之を重視せず、常に農務、商工、蠶業等各掛の殘滓餘瀝に甘んずるの狀あり。彼の縣營紀念林と云ひ苗圃と云ひ、實は何れも戰役若くは行啓の餘澤にして、其成れるや寧ろ勿怪の幸ひと謂ふべきなり。山林は面積の大部分を占め、河川の暴漲皆な因を之に發する本縣の地勢として、森林行政部を此の如く虐待するは、策の得たるものに非ず。治水林業の行はれ難き、病根或は之にあらむか。

○

治水の策を講ずるに方りて、茲に深甚の注意を加ふべき者は、即ち山林の開墾ならずんばあらず。本縣は由來米產を重んじ、苟くも灌漑の便を得べき所は寸土尺地を剩さず、耕して之を水田となす風あり。爲に大熊道三の如き當時破天荒的の大用水を起工せる者ありて、縣內隨所に幾多の小道三を輩出し、山間稍々平面の餘地は拓いて稻作に利用せらる。而して局に農政に在る者は、苟くも開墾を行ふものを以て悉く篤農者と做し、其功勞を激賞して又た其他の利害を顧みず。啻に從來に於て然る而已ならず、今後に於ても恐らく此風愈々盛んならんとするものあるを信ず。食料問題は今や水田の擴張を促し、農商務省は相當資金を補助して技術上の困難を助け、山林原野の開墾を奬勵せんとするもの丶如くなるが故に、本縣に於ても亦强ひて現在以上の水田を傾斜地に求むるの計畫を立てむか、吾輩は其結果に就て坐ろに寒心に禁へざるなり。這般水害の報道を綜合するに、下新川郡內の山村に於て水田を根底より流亡せしもの、極めて多大なるを知る。之れ實に好個の教訓にして、居村民自らも濫開の弊害を、切實に認識せることならむ。併も是等の水田は流亡の損失を被れるのみならず、一面に於ては水害の原因となり、河床を充塞して氾濫を大ならしめ、堤塘橋梁道路を破壞するの一大勢力を與へたるは、技術者の說明を俟たずして明かなり。本縣に於て既に着手せ

られつゝある、水田擴張調査が幾許の程度に進み、如何の內容を有せるかに就ては、未だ聞くことを得ずと雖も、農務當局者にして若し親しく山間水田慘禍の跡を視察せば、了解する所必ず尠からざるべく、或は調査既成案に一大修正を加ふるか、又は根本的に之れが再査の必要を感ずるならむ。吾輩前章に於て縣廳內務部森林掛の氣焰甚だ揚らざるを慨せしが、猶ほ一言の加ふべきは、勸業課內の統一を欠きて各局孤立、農務森林兩掛の聯絡を見る能はず、行政の方針往々矛盾の嫌ひあることと之れなり。此の如きは治水策を樹つるの一障碍なるが故に、農務・森林・土木の各當局者は互ひに墻壁を撤して、此際充分なる意見の交換を爲し、一縣の平安を期せんことを要す。

○

治水の主力を洪患の本源たる山林に致さゞる可らざるは、吾輩既に之を說きたりと雖も、河川堤防の修築に就ても、亦一言の加ふべきもの莫くんばあらず。本縣の河川は山腹部に於て、四五十度乃至六十度以上の傾斜を有し、急流激湍飛瀑狀を爲すものあると共に、中流以下に及べは流力減少して土石を沈積し、河床の發達を甚だしからしめ以て氾濫の一原因を爲せり。殊に這般の水害たる、寧ろ砂害岩害と稱するの至當なる程、多量の土砂と岩石とを流出し、河床埋沒殆んど出水以前の狀

態を留めざる部分多ければ、將來大に氾濫の危險を增加せるものと謂ふべく、即ち河床五尺を高むれば、一丈の出水に際して從來の水量一丈五尺に及べる時と、同一の結果を招くべく、若し又一丈五尺ならば二丈の洪水と、同一の猛害を被らずんばあらざる也。然るにも拘はらず、堤防を修築すること、依然として從來の如くならんには、其効力想像するに難からざるなり。元來本縣の如き河川の性質に對しては、或點まで流勢の自由を與へ、所謂自然的狀態に委ぬるの必要あり。惜しい哉其策是に出でず、徒らに米作を尊重するの餘り、寸土尺地を生產に用ゐて剩さゞるが故に、河川は勢ひ床幅共に窮屈を忍ばざる可らず。虐待酷遇之れ極むるの觀あり。虐待酷遇の反動は時として激怒となり發憤となり、其所爲の殘忍暴戾なる人をして驚倒せしむることあるは、豈に獨り人間のみならんや。之を以て堤防を復舊すると共に、河床を復舊して堆積の砂岩を除却するは、最も重要の手段なりと雖も、砂岩の浚渫は素より容易の業にあらず。於是乎川幅を擴張して水量を保存し、氾濫を防止するの必要を生じ來る。川幅擴張は實に本縣河川の現狀として、重要の問題たるを失はざるなり。往時富山市が連年の浸水に苦めらるゝや、國庫の補助を除き工費十八萬餘圓を投じて、彼の馳越分水線なる一種の川幅擴張工事を施行し、爾來幸ひにして洪患を薄ふするに至れるが如きは、

慥かに一個の參考にして、河川の部分に於て幾許の身幅を擴張すべき乎との技術上の問題は、吾輩門外漢の關知する限りに非ずと雖も、此際復舊土木工事をして漫然舊套を襲はしむるは、鉅額の縣費を空しく水神河伯の犧牲に捧ぐるものに似たり。官民の一考すべき事と信ず。

（大正三年九月二十日稿）

高岡銅像論

○高岡銅器は、其產額百數十萬圓を算して、實に我が富山縣重要工產物中の巨擘なり。而して其製作品の種類に就て見れば、花瓶、瓶掛、置物等を重なるものとし、何れも前途有望ならずとせざるも、茲に高岡銅製品中、特記せざる可らざる物あり。世人多く注意せず、當業者も亦關心するところ少き人物銅像即ち是れなり。

○高岡銅器業者の銅像を製作せしは、去明治十三年、隣縣の依囑に應じて丈八の日本武尊を鑄造せしを嚆矢となす。同像は今ま日本名公園の一たる金澤兼六公園內、臥龍山を背景とする處、其手に草薙の劍を提げて威風堂々四邊を壓し、金澤名物の一に數へられつゝあり。而して近代人物の肖像に在りては、去明治三十九年、富山市出身の勇士堀川陸軍大尉の立體製作に始まり、爾來縣內に建設せられたる、大小各種銅像の數は五六に達し、縣外の囑を受けて製作せしもの四五を算す。市內大佛座像の如きも亦是等の內に加へて可なり。此の如くにして實驗を重ぬると共に、技

術の進歩見るべきものあり。曩きに支那革命亂の戰死者、陸軍大將陳作新氏の銅像計畫起るや、其發起人等は、日本に於ける各銅器工業地の實狀を調査せる後、遂に之が鑄造を本市工匠の手に委ねしに徵するも、我が銅器技術の漸く他の認識する所となれるを察すべく、寔に欣ぶべき傾向と謂はざる可らず。

○銅像製作は、高岡銅器の新技術として、今や其頭角を擡起せんとしつゝあるにも拘らず、當業者の之を冷淡に附し去るは、畢竟銅像は他の花瓶・瓶掛・置物類の工藝品と大に趣を異にし、需用頗る稀少なるが爲に外ならず。然れども幵は大銅像のことなり。曩きに我社の分布せし　明治天皇尊像の如き小銅像に至りては、記念品たると同時に置物としての價値を有するを以て、決して需用の乏しきを憂へず、前途極めて有望なる而已ならず、後章斜述する所の如く大銅像も、亦今後時勢の進歩と共に一大需用を喚起し、銅像技術をして二十世紀に於ける工業界の一特色として、誇らしむべき運命を有す。併も之れ當業者の奮發如何に由ることにして、特に高岡銅器業者の着目を要する所なり。

○我邦に銅像あるは、欽明天皇の朝佛教の渡來し、經典、佛畫の類と共に之を齎せるに始まり、爾

來推古、聖武、孝謙の各朝を通じ、木佛、石佛の彫刻及び繪畫と併せ、名工續々輩出して、王朝美術の隆盛を極め、南都東大寺の大佛の如きは、實に當時代に於ける代表的製作物とも稱すべきものなりき。然れども當時の銅像は專ら佛像而已に留まり、未だ一般人物の肖像に及ばず、其佛像すらも燦爛たる藝術の花の盛りを久しきに保つこと能はず、今や空しく古刹の寶物として珍重せらるゝに過ぎざるなり。

○然るに銅像復興の時は到れり。即ち維新の革命は國家に功勞ある幾多の偉人傑士を輩出し、國民の之を追慕する至情と、明治文明の生み出せし工業美術の進歩とは、東京九段坂上の大村益次郎の銅像となり、又は上野公園內西鄕隆盛の銅像となりて、玆に佛像以外、人物肖像の新生面を開きてより、都鄙到る所に近人古人の遺影を建設するの風習を生じ、時としては現存者の壽像を鑄造し、盛大なる除幕式を擧行する者あるに至れり。於是乎往々銅像の可否得失に關して、異論を挾むものなきにあらず。其可否得失は姑らく措き、此の如き議論の生ぜしに見ても、銅像復興の趨勢を卜知するに足らむ。

○人物肖像の保存方法としては、古來畫像及び木像あり、近くは又寫眞あり。猶又我邦に於て多く

行はれざるも、大理石材等を以て彫刻せるものあり。石膏像の如きも近年頓に流行を來せるが如し。而して是等日本畫・油畫・木彫・石刻の各肖像には、皆夫れ〴〵特有の風韻あり趣致ありて、其優劣未だ遽かに定む可らずと雖も、就中銅像に於ては又他の企て及ばざる幾多の特長を有す。其第一は即ち耐久力に於て優秀なることなり。我が古代の畫像木像は水火の災に遭て、今に保存せらるゝもの甚だ少く、纔かに之あるは蝕腐朽殆んど形狀の完全なるは莫し。銅像に至りては然らず、天平より天平勝寶に亘りて鑄造せられし東大寺の大佛が、仮し佛頭のみは兵燹の爲めに再調せられしにもせよ、依然として當年の原形を失はず、寧樂の都の昔を語りつゝあるにあらずや。而して銅像第二の特長は、即ち保存方法の便利なることなり。畫像木像の如きは之を收容すべき建築物莫るべからざるに拘らず、銅像は風雨霜雪の間に曝露して、毀損朽廢の憂ひなきを以て、公園・街頭・社寺の境内等其の建設の場所を擇はず。且之によりて風趣を添ふるの利益あり。第三の特長は繪畫・寫眞等の平面像に於いて慊焉たる所を補ひ、善く實物を立體的に精密に肖似せしめ得るにあり。此点に於ては木像石像も亦敢て異らずと雖も、堅牢にして耐久力に富むことは、彼之同日の談にあらざるなり。既に是等の特長を有す、銅像の將來は益々多望と謂はざるべからず。

○銅像の特長を叙して來りて、玆に其効用に及ばざる可らず。此不朽の建造物に由りて生ずる結果は、素より二三にして足らざるべしと雖も、今ま其著しきものを擧ぐれば (一)他の一般美術的工藝品が、人心に與ふると同一の美術工藝品としての價値は勿論、(二)之を庭園・公園・街路若くは社寺の境内等に建設することに由り、一個の裝飾品として風致を添ふるの大なるものあること、並に (三)偉人傑士を銅像に製作し、其生前の人格と事業とを表彰することに由りて、社會人心に及ぼす感化、即ち社會的教育の力之れなり。以上の内第一のものは、銅像を單に藝術として見るものなれども、开は室内の裝飾品として適當なる小銅像の場合にして、大銅像に至りては即ち第二の副作用を伴はざること少なし。而して建設せられたる場所の風致を添ふる程度は、第一の藝術品として價値の大小と密接の關係を保ち、猶ほ夫れが建設位置の適否と四邊の景物との調和如何に依りて、多大の相違を生ずるを知らざるべからず。隨つて此の如き時に於ては、一面專門的築庭技術者等の技倆に待つこと頗る大なるものあり。

○第三の社會教育に寄與する一点は、即ち銅像の眼目とも稱すべきものにして、實に輕々に看過す

るを許さず。曾て記者の少年時代に於て洛陽の紙價を貴からしめたる、矢野龍溪氏著經國美談の開卷劈頭、希臘齊武の黌堂内に、老教師が賢王傑士の像下に、一群の兒童を教訓する一節あり。而して是等の兒童は賢王コドリニス及び傑士スラブリユスの風貌を仰ぎ、其の偶像の感化を享けて他日驚天動地の偉業を成せり。英雄パロビダス、名士イパミノンダス、快傑メルロー、其他セヲポンブス、ヘレニクス、ヒルリダス、カーロン、ケビソドリス、ダモクリタス等之れなりとは、軈て同書全篇を生み出すの脚色なりき。人物像に依りて與へらるゝ感化力が、如何に强烈なるものあるかは寔に此の如し。著者の着眼点や極めて妙とせずんばあらず。

○世界の宗教中、所謂偶像教と稱して、一派の學者等より排斥せられつゝあるにも拘らず、彫刻し或は鑄造せられし佛像を用ふる佛教・基督教内の立體肖像を有せる基督教内の舊派天主教が、何れも其信徒の精神に恐るべき堅固の信仰を扶殖しつゝ、牢乎として拔くべからざるものある所以は、教育者及び經世家の共に大に注意すべき所ならずや。

○人物像の社會教育に効果を與ふるは、銅像たると畫像たると將た木像たるを擇ばざるに似たりと雖も、平面立體の差が人心に作用する狀態素より同一ならざると共に、耐久力の上より見るも、

銅像に優逸せる特点あることは、上章略ば說述せるが如し。彼の古畫像の紙朽ち色褪せて描く所の人物、面貌風采を辯知すべからざるもの、又彼の古木像の鼻落ち耳虧け、四肢五體一として完きもの無きに對せば、徒らに滑稽の感を生ずるか、然らざれば一種悲慘の念を起すべきは、人情の已むを得ざる所にして、之れを銅像の風雨霜雪に耐えて千古變らず、儼然として克く當年の面影を留むるに比せば、感化の大小深淺果して如何ぞや。

○人物像を社會教育に利用し、兼ねて公園街路、建築物等の風致を添へ美觀を助くることの如何に盛んなるかは、歐米各文明國の實例之を示して餘りあり。即ち帝王・英雄・詩人・學者は勿論、苟くも國家社會に貢献せし大人物の銅像類は、都鄙到る所に建立せられ、特に都會に於ては其數甚だ多く、往々規模の宏大技術の雄渾を極むるものあり。英米然り、佛國然り、就中獨逸に至りては、之を國民の愛國心養成に利用するの周到なる、觀光外人の常に驚嘆措かざる所なり。曩日來縣せる建部博士の近著中に於ても、亦此事を記して曰く「獨逸教育の精神の一として見るべきは、其社會教育に於ける愛國的精神の漲溢なり。試みに獨逸各地到る處の博物館に入りて見るも、一として祖國を記念し、人々の愛國人を熾にすべき用意の分明に現はれたるものに非ざるはなし。

獨逸の大小各都會の粧飾として飾られたる記念像は、軍事と云はず、政治と云はず、文學と云はず、經濟と云はず、總て國家の恩人を記念すべき物に非ざるはなし。是れ亦實に愛國的精神を、皷舞するに非常なる力あるものなり」と。

○天下の力士の多く越中より輩出するを見て、其原因を研究するものは動もすれば即ち曰く「越中の山村水郭、寺社の境内と云はず、路傍と云はず、力士の記念石碑壘々たるあり。之れ其冥々裡に感化を與ふるものにして、梅が谷の母、太刀山の父は、彼の無恰好なる古代關取の石碑なりと是等の觀察必ずしも一笑に附し去るを許さず、多少の眞理あつて存するなり。既に一個粗造の碑石にして、猶且此不可思議の力を有すとせば、近代技術の妙を極めたる銅像が、無言の教師として與ふるの薫化は、時として幾人幾十人の教師先生の幾千言幾萬言に勝ることあらむ。

○我邦の教育界は人格教育の必要を說いて已まず。而かも人格教育なるものを、人格なき教師の舌頭に依りて施し得べしと做さば、誰か其愚蒙を嗤はざらんや。今ま一鄉に十人の無力なる教師を雇ふと、一鄉に一體の偉人の銅像を建設すると、其感化の及ぶところ何れに多くして孰れに少きや、未だ遽に測知すべからず。故に彼の獨逸の社會教育策に倣ひ都市と云はず町村と云はず、街

路・公園・若くは公館學校等の庭内に、我が歴史上著名なる古今の忠臣義士、或は各其地方に關係ある尊敬すべき故人の銅像を設立せむは、極めて適切なる人格教育の一策と稱して可なり。惜しい哉教育者未だ此手近き良方法に思ひ到らず、銅像産地たる高岡市の當業者も、亦斯かる好箇の大需用あるにも拘らず、進んで之を開拓するに意なきことを。

○社會の進歩は銅像の必要を感知せざるに非ずと雖も、此機運を助長せしむると、將た自然の成行きに放置するとは、彼之れ速度の上に非常の懸隔あること勿論なるが故に、本縣當業者たるもの大にしては社會公益の爲め、小にしては業務發展の爲め、宜しく最善の手段を講じ、天下の註文を一手に引受くるの覺悟あるべきなり。由來本縣の實業家は自家の業務を、廣く紹介せんとするに意なきこと、獨り銅器業のみに止らず。高岡銅器既に百數十萬圓の産額ありて、地方重要工産物の一たるにも拘らず、世間猶ほ其名を知らざるもの多し。況んや製作數未だ少き人物銅像に於てをや。此際の急務は、即ち大に斯業の存在を廣告すること之れなり。

○高岡製作の大銅像は、前章說述せる如く縣内に於ては富山・氷見・福光・城端・井波・其他に建設せられ、縣外へも亦數體を輸出せるに係らず、産地に在りては只一體の未成品たる大佛ある外、

何等の銅像をも見ざるは不思議千萬とせざる可らず。曾て前田利長公の銅像を公園内に建設せんとの内議あるや、記者は私かに之を慶し、此の如くにして初めて本市重要物産並に銅像技術を紹介し得べしと做し、偏へに摸範的大作の成らんことを期待せしが、該計畫は知らず識らずの裡に、雲消霧散せるは遺憾なり。富直鐵道の全通に依りて、裏日本の交通狀態玆に一變し、旅客の來往漸く頻繁ならんとするに方り、銅器、銅像の高岡を表示する所の該計畫を再興し、類ゐ稀れなる金看板となすに至らざるは、商的知識を欠くの甚しきものと謂ふべきなり。

○若し夫れ高岡市が人物銅像流行の機運に乘じて、天下の注文を一手に掌握せんと欲する以上は、楠正成可なり、乃木大將可なり、日蓮、親鸞可なり。先づ幾多の商品標本を製作し、之を收容するの銅像舘を建設し、以て全國に一ありて二なき北陸の異彩を放つか、然らざれば公園に配置して風致を添ふるに如かず。然れども此の如きは、到底いふべくして行ふ可らざるが故に、先づ一體の摸範的銅像を建設し、公園にあらずんば櫻馬場、馬場にあらずんば旅客の呑吐間斷なき停車場前の街上に建設し、万衆の眼を惹かしむべきなり。

○或は曰ふ、利長公銅像計畫の消滅せしは公の肖像を得ざればなりと。然れども世に公の肖像として傳へらるゝ畫幅、絶無なりとせざる而已ならず、其父利家公、其同胞利常公及び其血統を引ける前田家歴代主の畫像のあるあり。且つ利長公の性格は歴史並に記錄に由り、明瞭に觀察せらるゝ以上は、必ずしも製作の考証資料に乏しと爲さず。却つて理想的傑作を鑄成するに、利便なきにあらざるなり。要するに的確の肖像を得ざるの一事を以て、計畫を中止するの理由となすは、未だ人をして首肯せしむるに足らず。

○昔はボイツシイ・ド・アングルスは巴里の粧飾に物を吝む勿れと謂へり。巴里は世界都市の華なり。高岡市は北陸に於ける、否な寧ろ裏日本に於ける工藝の府たり。加ふるに幽邃にして、眺望に富める古城公園あり。花の隧道を穿てる櫻馬場あり。富直鐵道に據りて旅行するもの、其前程を急がざる以上は、必ず列車を降りて一見の價値あるところ。されば廣告以外に市の粧飾よりするも、銅像の一二個を吝む勿れと謂はむと欲す。

○大正の日本は第二維新の時代なり。政治に教育に社會に有ゆる方面に於て、我邦は大なる進歩を見ざれば已まざらんとす。而して明治維新の際に於て、國家社會は幾多の紀念すべき人物を輩出せしが如く、大正時代に輩出し活動したる人物の、永く紀念すべきもの非常に多からんとす。銅

像の勃興は蓋し必然の命運にして、廿世紀は銅像の流行を以て、一の特色を現はすべしとの想像は、決して妄誕にあらざるなり。高岡銅器業者が起て其技藝の新生面を拓くへき時機は來れり。終日兀々として花瓶の底を削り、水漏りの誹を招て甘じ居る秋ならんや。仍つて回を重ねて銅像論を草す。

（大正二年四月四日稿）

江花叢書
第十四卷　越中史論贊

（終）

思ひ出

蓮花凉江

昨夜尋常二年の宗雄が「母ちやんたにしなく？」と質問をしました。時に何かと質問をするので、私は答に躊躇する事さへあります。

母「あい、たにしはなくのよ」子供「どこでなくの、貝がどこでなくの」母「ふたを開けたり止めたりして、なくのでせうよ。もう少し大きくなつて理科がある樣になつたら、先生にいろ〳〵の事をお教つて、それは面白いのよ」子供「ふうん、ごろ〳〵のところ田圃などにゐるの」母「あい。」私はぼんやりとして想ひ出に、ふけつてしまひました。私の幼少の頃、亡き父とよく散歩に出た事どもを……。神通川の堤防の一本榎のあたりをぼつ〳〵語りつゝ「お父ちやん一本榎のふちを三度早百合姫といふと出て來るの？」と言ふと父はにつこりして「何も出て來ないよ」などゝ言つて歩いた事を……。夕陽は、はるか有澤橋の邊を紅に染め、神通川の流に、うつりて一入美しく堤の下の廣い廣い田圃には、ごろ〳〵〳〵とたにしのなき聲を聞く時は、實に詩的でした。今も愛する、我子の質問より、職想は次々と、昔懷しく戀しき父を想ひ出します。

父は又よく二三の友人の方々と共に散歩をしました。その折も私は、ついて行きました。その時は、スケッチブックを各々持參して、一流の畫家連中の樣な顏つきで、一生懸命スケッチです。私はちよい〳〵とおぢさん方のを覗いて見ましたが、どれもみな、父よりも下手の樣に見受けました。けれどもみな滿足さうな風で、又樂しく歩き出しました。又ある時は、縣廳の役人達の家族と父母私も共に、神通川へ舟遊びをした事もありました。ぴち〳〵とはねる魚を、とつて、七輪でぼか〳〵と燒きたて、皆が樂しく食し、その中に父や友人達が、皆々赤のふんどしをして、ぼちやん〳〵と飛びこまれたる事なども想ひ出します。その當時の友人達も父よりも早く、すでに亡き數の人々である事を想へば短き

人生を忍ばしめます。

又父は情深い心を持つてゐました。幼少の頃の私にも、同情心を養ふべく、各新聞紙上の記事について、時々話してくれました。明治三十八年福島縣下凶作の際、窮民教恤として、一金五拾錢を二度、富山縣師範學校附屬小學校生徒として、寄附をしましたので、明治三十九年と四十一年に御ていねいにも、當時福島縣知事有田義資氏、同縣知事平岡定太郎氏等よりの感謝狀を戴きました。今尚、父の紀念とする旅行先よりの澤山の手紙や、繪葉書等と共に手箱に藏つてあるので、あの頃のやさしき父の、微笑をたゝえて話して下さつた當時が懷しくあります。

父は常にお友達より親まれました。探檢隊長として、大勢の方々と共に處々方々を探檢しました。神秘境黑部探檢によつて得た材料は、少からず世の貢獻となつた事と思ひます。颯爽としたあの頃の姿は次第に薄れ、晩年の父は靜に一層讀書を好み、常にあの少し脊を丸くして、時に輕く頭を左右にふつては本の上ページをめくりつゝ、默々として居りました。しかし時々家族を打連れ、金澤方面へ遊びに出かけたりすることもありました。そして、野田山のお墓參りの折には、色々とお墓の事を話されたりした事を、今にして想へば、一層淋しく悲しき想ひ出となりました。かくして星霜十年は夢の如く過ぎ去り、父の想ひ出も、次第に影薄くなりつゝあるのに、江花會の極親交の方々によつて、今年丁度亡き父の十周忌にて、盛大に御法事を營まれ、且つ江花叢書第十四卷を發刊される事は、いかばかり、父の靈は滿足の事と信じ、感涙にむせびます。

昭和十一年二月二十九日夜認む

帝都は三四日前より騷擾にて、戒嚴令の狀態。想へば父君には、此うるさき世を去り給ひて、淨土の樂園にて、父君の命日と同じくする蓮花家の父君と共に、いとし我子宗輝を愛し給ひてよ——。

後記

曉堂生

○

昭和十一年三月初二此の筆を採る。遂に江花翁の十周忌は來た。歲月忙々、回想すれば、今更ながら翁の姿が偲ばれる。仍ち同人相胥り、來る三月十一日の命日を卜し、本市片原町宗圓寺に於て、法會を營み本書をその靈位に手向け一は翁を慰め、一は翁の業績を後昆に遺さんとする。之は全く同人の微衷である。

○

思ふに翁の業績の頗る大なるものありしに反して、その酬ゐらるゝ處は、洵に薄少であつた。その一代を新聞記者として終始し、社會の木鐸として貢獻し、一貫した主義と操守とを堅持して、時流に卓然たるものがあつた。予は今茲に翁を論ずる紙幅を持たぬ事を遺憾とする。

○

本編は翁の越中に關する歷史、人物、風土、山水等に對する編賛の集輯である。翁の纂錄せる「越中史の片影」若くは「越中に於ける口碑傳說」の如きは、更に別に一卷をなすべきものなるが故に、茲に割愛して後日を期することにした。

○

予は本叢書を續刊するに當り、毎度ながら常に厚情を辱くする馬瀨清三郎翁、木津太郎平翁、金子恕謙氏に敬意を表す。尚同人たる岡村直堂、小島德次、山本久次郎、倉田雲涯、前田甲、上子三郎、畑中久万吉、山田重治、田島清二郎、蓮花宗二の諸君、並に東京林喜太郎、仙臺古谷夢人、京都櫻井黎明、七尾野村米二郎の諸君に向つて、感謝の意を表する。

○

今一つ附加すべきは、十周忌に際し特に深厚の同情を寄せられた櫻井孝一、改井德寛、內島北朗、長谷川勝起、佐々木大樹、石崎光瑤、竹村白鳳、立野雪鄕其他の諸先生に對し、謹みて深厚の謝意を表す。

54
55

昭和十一年三月六日印刷
仝　年三月十一日發行

著者　井上忠雄
富山縣高岡市南町五四番地

發行者　倉田長太郎
（江花會同人代表）

印刷所　越中活版株式會社
富山縣高岡市定塚町一、三二九番地

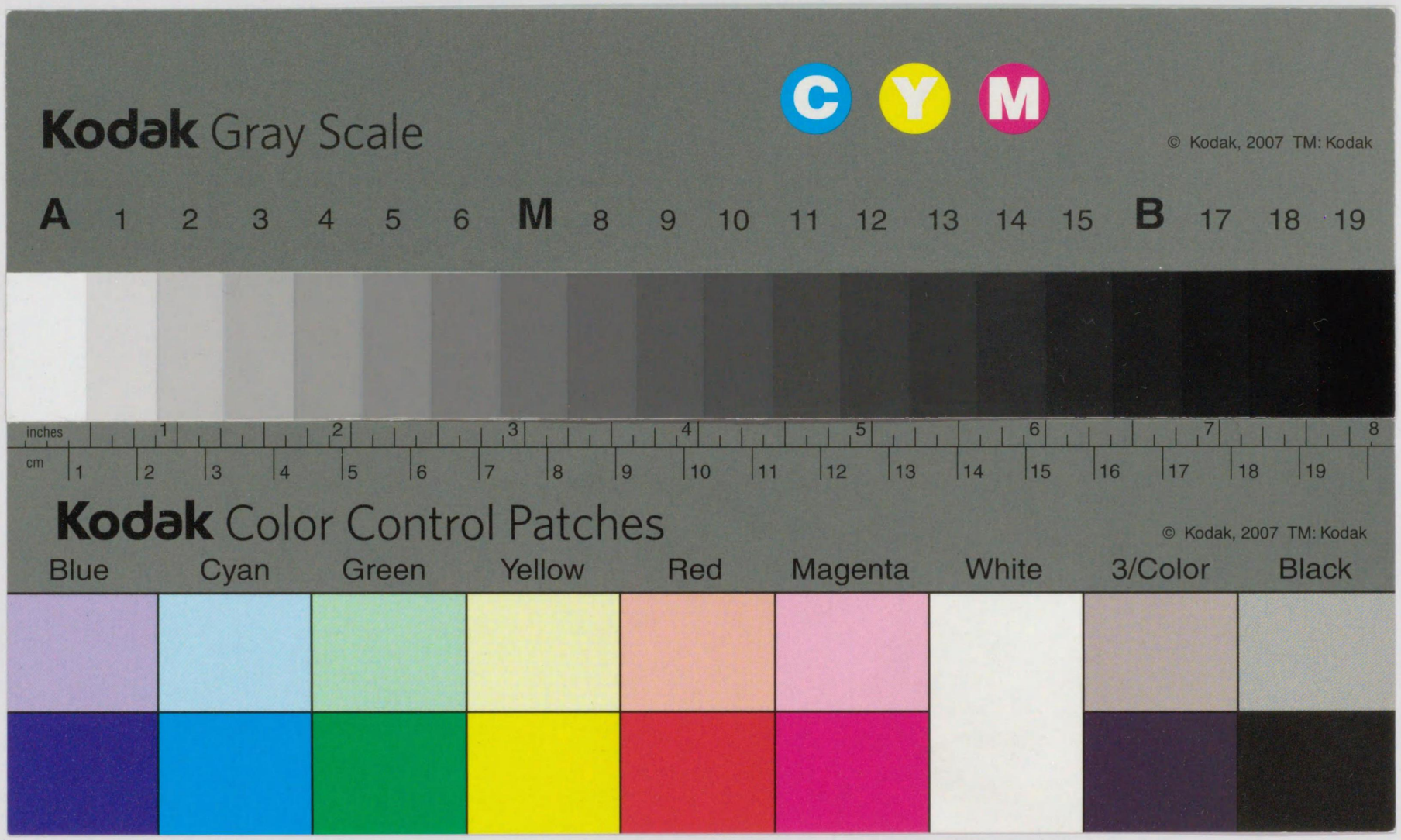
江花會事務所　倉田精美堂內
高岡市御旅屋町一五
電話六七六番
振替口座金澤六四二一番

井上江花先生著江花叢書書目

第一卷隨筆	波蘭陀	大正十五年四月十五日刊行
第二卷隨筆	風呂の煙	大正十五年六月五日刊行
第三卷紀行	古塔の影	大正十五年八月五日刊行
第四卷史論	雪窓閑譚	大正十五年十月五日刊行
第五卷日記	老梅居日記	大正十五年十二月五日刊行
第六卷漫筆	日覺め漫草	昭和二年二月五日刊行
第七卷隨筆	醴泉のほとり	昭和二年四月五日刊行
第八卷紀行	臺灣へ	昭和二年六月十日刊行
第九卷史論	山より見たる越中	昭和二年九月十日刊行
第十卷史論	川より見たる越中	昭和七年三月十一日刊行
第十一卷史譚	塚越ばんどり騷動	昭和八年三月十一日刊行
第十二卷史論	海より見たる越中	昭和九年三月十一日刊行
第十三卷隨筆	蝸牛隨筆	昭和十年三月十一日刊行
第十四卷論文	越中史論贊	昭和十一年三月十一日刊行
第十五卷史筆	越中史片影	昭和十二年三月十一日續行

54
55

548
55


Kodak Gray Scale
C
Y
M
© Kodak, 2007 TM: Kodak
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
inches 1 2 3 4 5 6 7 8
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19
Kodak Color Control Patches
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Blue
Cyan
Green
Yellow
Red
Magenta
White
3/Color
Black